

国交樹立五十周年記念 スリランカ訪問・友好親善使節団

世界平和祈願コロンボ大会

基調講演 二〇〇三年三月九日（日曜日）

演 題

「ダルマ・パーラの贈り物」

―ダルマ・パーラと日本の関係を顧みて、二十一世紀の日本とスリランカの
仏教相互交流を通じて世界平和への貢献を考える―

講 師

スリランカ訪問友好親善使節団代表・団長

黒田 武志老師

国交樹立五十周年

私は日本横浜善光寺黒田武志でございます。

貴国より賜りました数々の熱烈歓迎と、心尽

しのおもてなしに、使節団団長として厚く御礼
を申し上げます。

ここ、由緒あるここバンダラナイケ国際会議
場大ホールに日本友好親善使節団一同と共に世

界平和祈願コロンボ大会に臨み、親善使節団を代表して皆様にお話させていただくことは、私にとりまして無上の光栄とするところでございます。

これまで幾度か貴国をお訪ねし、スリランカ仏教会を代表する長老方をはじめとする仏教関係の方々、また、政治・文化・教育・宗教等各界の指導的立場にあられる多くのリーダーにお目にかかり、仏教者の立場から貴国と日本の相互理解と交流の推進に微力を尽くして参りました。

私は仏教の教えの中で「縁(えにし)」というものを非常に大切なものと考えております。ここで皆様方に、いまこのようにお話させていただいておりますことは「出会い」、であり私自身の意思や欲望に基づく行為ではありません、凡て仏縁であり、み仏様の深いお計らいとお示しによるものと考えてるものがございます。

皆様にお会いできたことは仏種縁による

「仏種、縁に因る」と申される通り「いま、ここ」で皆様にお目にかかれましたこのご縁こそ、まさに「一期一会」の出会いであり、かけがえのない機会なのであります。出会いは偶然ではなく、み仏のお導きであると申せます。命恵まれて生かされて世に在る皆様にとりましても、私自身にとりましても、生涯に二度とない尊い縁のときであることをはじめに申し上げておきたいと存じます。従って再びない機会を捉え、全身全霊を傾倒してまいります。

自身の紹介・スリランカ、タイとの関わり

さて私が生を受け育ったところは、日本であり、日本仏教の一宗派曹洞宗(八百年前、道元禪師により開かれた)の寺の中であります。祖父も父も代々この寺を継いで仏教僧として生涯

を送って参りました。私の兄弟四名も僧侶となり、また私の息子三名も僧侶となる道を歩いております。寺は決して経済的に豊かな環境ではありませんでした。私の意志でここに生まれ、境遇を選んだわけではありません。すべては「天命」。私が「いま、ここ」にあるのも天命、み仏のお導きによるものと思っています。

私は仏教系の大学院を卒業後、専門道場で仏教僧侶となるための修行を致しました。若いころ、仏道を求めながら、迷い、もがき苦しんだ日々を思い出します。生き方がわからない。いたい、大事なことは何か、成長するためにどんな力をつけねばならないのか、またどんな人格的变化が生じねばならないのか日夜迷い模索するばかりでした。やがて海外に仏教を学ぶ必要を感じ、原点インドをはじめスリランカ・ビルマ・タイ等とその周辺国を訪ね回り、タイでは二二七の戒律にまもられ、一年半の間、行三

昧、得度しました。更にアメリカカロサンゼルス禅センターでの布教活動等、他国にあつて異なる態様を具に学び体験するという貴重な機会に恵まれたのでございます。そのお蔭で、私は大無辺の仏教を感得、世界観を自らに感じ、真の仏教徒としてその生き方を学びとることができたように思います。

父であり、師であり、開山である

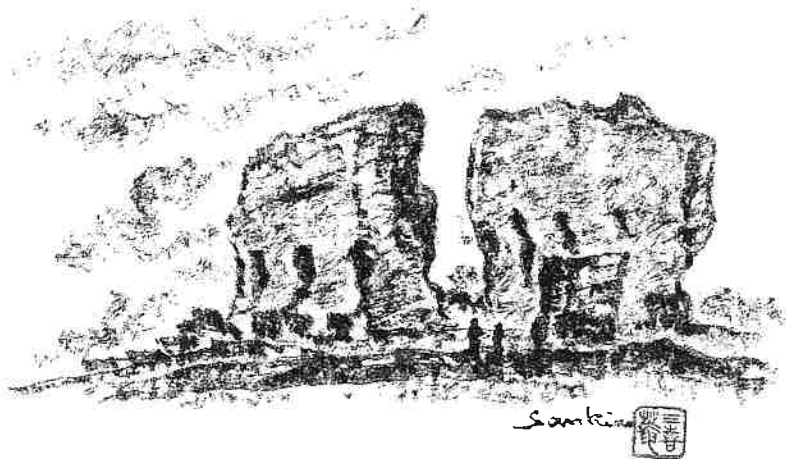
白純大和尚より寺の建立と育英会推進の力を得る

後年私が帰国し、さらに修行の歳月を重ねるうち、「人材育成の寺を作ろう」という信念から、横浜に新寺善光寺というお寺を建立するに至ったのであります。ここが現在私の宗教活動の拠点となっております。今より三十五年前になります。

当時私は無一文。この資金はすべて私の理念や思想に共鳴共感する仏心篤い信者より得たも

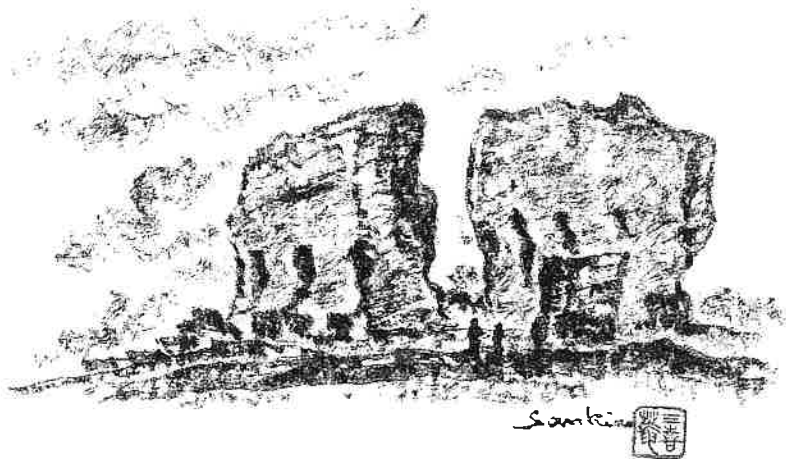
のであります。その建立晋山式には多数の海外
仏教国代表のご臨席を賜ることができました。
グローバルでユニークな一人の青年僧の門出と
して、その祝典が大きな話題となりましたこと
も鮮明に記憶しております。全く零からのスター
トでした。はや私自身の半生に余る歳月が流れ、
この寺も檀家三千軒、それを優に越えておりま
す。

今から二十年前（寺院建立から十五年目）私
の念願でありました「人材育成の発信基地」と
して横浜善光寺留学僧育英会を発足させること
ができました。これは偏に檀信徒のご理解とご
浄財の賜物です。また受け入れを容認してくれ
た各国機関・寺院のお蔭です。しかし覚悟の上
ではありましたが、当初資金的には必ずしも順
風ではなく、続けることの困難を否というほど
味わいました。それでも、毎年欠くることなく
続けられた事実は、み仏の導きであり、さいわ



のであります。その建立晋山式には多数の海外
仏教国代表のご臨席を賜ることができました。
グローバルでユニークな一人の青年僧の門出と
して、その祝典が大きな話題となりましたこと
も鮮明に記憶しております。全く零からのスター
トでした。はや私自身の半生に余る歳月が流れ、
この寺も檀家三千軒、それを優に越えておりま
す。

今から二十年前（寺院建立から十五年目）私
の念願でありました「人材育成の発信基地」と
して横浜善光寺留学僧育英会を発足させること
ができました。これは偏に檀信徒のご理解とご
浄財の賜物です。また受け入れを容認してくれ
た各国機関・寺院のお蔭です。しかし覚悟の上
ではありましたが、当初資金的には必ずしも順
風ではなく、続けることの困難を否というほど
味わいました。それでも、毎年欠くことなく
続けられた事実は、み仏の導きであり、さいわ



いにして奨学派遣と受け入れ業務は確実に推移。既に世界二十ヶ国百十名の仏教学徒が本育英会の奨学金によつて仏陀の教えを学んでおります。この横浜善光寺留学僧育英会の奨学生の中にスリランカ国出身者の含まれていること申し上げるまでもありません。昨日も当地、留学僧が一人誕生しております。

この道のりはすべて私が若き日、海外の仏教に目を向け、インド・スリランカ・ビルマ（ミャンマー）・タイ・カンボジア・アメリカ・ヨーロッパ諸国等の国々に仏教の現状とその事績を踏んだための勝縁であり、これに大きな感化と影響を受けたことによるものでございます。国を異にし、民族・人種を越え、たとえ様態は異なっても、その原点は仏陀の教えであり、ともに原点を共有することができればやがて相互理解のもと、もつともつと世界人類の救済と平和共存、実現に大きく貢献できると確信したからに外な

りません。

このような経緯から、この度貴国と日本との国交樹立五十周年記念、日本・スリランカ友好親善使節団の結成派遣にあたり、この使節団の代表・団長を喜んでお引き受け致した次第であります。

アナガリカ・ダルマ・パーラ生誕一三五年度の式典出席

一九九九年九月スリランカ大菩提会のお招きに預かり私は、日本仏教徒代表としてアナガリカ・ダルマ・パーラ生誕一三五年記念式典に出席させていただきました。本日の演題もこれに因んで私のスリランカを述べてみたいと思います。

貴国スリランカの仏教がテーラワダ仏教（上座部仏教）と呼ばれるのに対して私共日本の仏教はマハーヤーナ仏教（大乘仏教）と呼ばれております。原点「釈尊」の教えでありながら、この両者の間には多くの相違と同時に多くの共

通点があります。

大統領と日本

ここにスリランカの仏教と日本の仏教の相違について論じられた興味深いエピソードをひとつご紹介いたします。

かつて日本の禅仏教を世界に広めた近世の仏教学者鈴木大拙博士、生前アナガリカ・ダルマパーラとも深い交友関係にあったお方でございます。ある時鈴木博士をかのジャヤワルデネ大統領が鎌倉に博士を訪ね、質問されたと伝えられております。博士に対し「お尋ね致しますが、貴国日本の仏教と私共スリランカの仏教の違いは何でありましょうか？」と問われた。これに対し博士は、「なぜ相違を強調されるのか。三宝に帰依し、無常・苦・無我証得の為の八正道を共に信奉しているではありませんか」と言上されたというものであります。後ジャヤワルデ

ネ大統領の著書で博士の仏教に対するご造詣の深さに感銘し改めて日本人と日本国に共有と共感を覚えたご紹介されていることでもあります。

ジャヤワルデネ大統領が仏陀の法句経より「*Ignored ceases not by hatred, but by love*」の箴言を引用しサンフランシスコ講和会議で日本擁護の歴史的名演説をなされる直前、日本に立ち寄ったときの出来事であります。

ダルマパーラについてお話し上げる論旨から脇道に外れましたが、私はここで貴国と日本を代表する先人二人のエピソードから、北伝・南伝という異なったルートを通じてさまざまな進行形態を持ちながら伝播された仏教、その源は仏陀の教法（ブッダ・ダンマ）に帰一するのだということを強調したかったからであります。

先に述べましたように、若き日の仏教国タイ、名刹ワット・パクナム寺院に掛錫し、行住坐臥の日常生活の中での求道探求、これこそ仏陀の

祖道そのものであると感得したものであります。実にこのことが私の新しい仏教道場を目指して建立しました善光寺であり、又のちの横浜善光寺留学僧育英会の創立に至る原点でもあります。

さて、今日の本題、日本・スリランカ国交樹立五十周年記念に因み掲げさせていただきました『ダルマパーラの贈り物』について話を進めたいと存じます。

まず、ダルマパーラと日本仏教界との直接交流が始まる前夜について申し上げ、次にダルマパーラと日本仏教界との交流に触れ、更にダルマパーラの志がどのような形で貴国と日本において継承されてきているかを瞥見し、最後に二十一世紀に生きる我々仏教者はこれまで見てきた貴国と日本との仏教交流の上でダルマパーラの残された遺産をどのように生かし甦らせ、それを以って如何にして世界人類の平和と共存と



いう、時代の要請に応えて行くかについて論及して参ります。

ご承知の通り貴国スリランカは、古代から海のシルクロードの要衝として地勢学的に東西貿易に重要な役割を果たしておりますことは今更申し上げるまでもございません。

仏陀の正法（仏教）が世に開顕されてから二千五百余年。貴国スリランカと日本との直接交流の扉が開かれてからの年月は、僅かに百二十年というのが私の知解であります。もとより近年に至り日本人のヨーロッパ訪問者とその船舶往還の途次、ゴール港又はコロンボに寄港した例は多数あつたはずです。しかし正史に残るスリランカ訪問の記録となりますと極めて少なく、正確なものとは中々見当たらないのが現実であります。一八八三年五月ヨーロッパから日本へ帰国の途、コロンボに寄港した一人の日本人外交官と当時の英国植民地総督府における総督首席

補佐官マハームダリとの邂逅に求めたいのであります。

これがスリランカと日本仏教徒のはじめの出会いであり、奇しき縁と存念しお話し申しあげて参ります。今から丁度百二十年前のことになりません。

ダルマパーラと日本

当時ロンドン日本大使館勤務の若き外交官林董（当時三十三歳。のちに駐英大使となり、更に昇進して外務大臣を経て伯爵となる日本外交史に足跡を残した逸材）は、ヨーロッパ留学から帰国の有栖川宮威仁親王殿下の随員としてコロンボに寄港、滞在中英国総督アーサー・H・ゴードン卿の歓迎レセプションに招かれた際、隣席したのが総督首席補佐官・スリランカ人最高位の総督府行政官マハームダリでした。

林は、出色の外交官であり又英語にも堪能で

した。隣席したマホームダリとの会話の中で、「日本も貴国と同じ仏教国である」と申しますと、これを聞いたマホームダリは非常に驚いたそうです。当時アジアの東端に日本という国が存在するということさえ知る人のきわめて少なかった時代。日本も仏教国だと聞いたマホームダリの驚きは当然でした。

只今私共が相集うこの地、コロンボにおいて僅か百二十年前貴国スリランカと日本との近代仏教交流の歴史的扉が開かれたのであります。

マホームダリが林に両国の仏教交流を呼びかけたことは申し上げるまでもございませんし、林がこれに即応したことも、その後の二人の動きからよく知られるところであります。

マホームダリはこの林との出会いの直後、甥のグナラトネに命じスリランカをよく知る日本の仏教学者南條文雄に書簡を送っています「日本の僧侶がスリランカに留学し、当地の仏教を

学ぶに当たって、できる限りの便宜を図る」旨の申し出をしたと伝えられております。

この若き日本人外交官とスリランカ高官との出会いが契機となって日本人僧侶のスリランカ留学に道が開かれ、貴国と日本との仏教交流の幕開けを迎えることになるのであります。

この出会いから三年の後、マホームダリの親切な申し出が実り、歴史上初めて（一八八六年十月）スリランカへの日本人留学僧釈興然（スリランカ僧名グナラタナ）が出帆し、さらに翌年（一八八七年）二人目の日本人留学僧釈宗演（パンニヤケート）がコロンボ港に到着。この二人がこれから始まる近世における両国仏教交流の序幕の主役を演ずることになるのであります。

ブラヴァッキー夫人とオルコット

スリランカにおける近世の仏教復興は（一八八〇年）アメリカ神智協会のブラヴァッキー夫

人とオルコット大佐のスリランカ上陸によって触発され始まったとされています。

この白人仏教徒は、一八七三年の『パーナドウラの論戦』（仏教とキリスト教の論戦）に加わったスリランカ仏教徒の代表メーゲワツテ・グナンダに傾倒し、論戦に先行して既に文通によって接触していたことが知られています。その間の経緯の詳細はさておき、『論戦』において白人キリスト教宣教師の優位乃至勝利を確信していたキリスト教側の予想を裏切って仏教僧グナンダの勝利に終わったことは、仏教徒を自認するブラヴァツキー夫人とオルコット大佐に大きな勇気を与えることになったのであります。

スリランカに来島した二人は（一八八〇年）三帰五戒を受け得度し、正式に仏教徒として活動を始めるのでありますが、数世紀に亘るキリスト教徒による植民地支配のもとで仏教の伝統文化を蹂躪されてきたスリランカ仏教徒は、こ

の二人に啓発されゆくことになります。

ドン・デイヴィットと呼ばれていた青年ダルマパーラは、（一八八四年）「神智協会」に入会し、翌年オルコット大佐の創設した「仏教神智協会」の事務局責任者となり、やがてスリランカの国家再生と仏教復興運動への献身という道を歩み始めるのであります。

かつてブラヴァツキー夫人のオカルト的魅力に引かれて神智協会の門をたたいた若きドン・デイヴィット（ダルマパーラ）は、夫人自身から「あなたの生涯を人類への奉仕に捧げることがより賢明でありましょう。何よりもまず仏陀の聖なる言語、パリー語を学びなさい。」という助言に励まされ、オカルト的仏教神秘主義の呪縛から解放され、大きな感化を受けたブラヴァツキー夫人と決別していったのであります。

仏教神智協会において大佐の補佐役としての広範な活動を通じ、伝統仏教に目覚め、祖国再

生への認識を深めてゆくなか、梵行の誓願を立て（一八八八年）ドン・デイヴィットの名を捨て、アナガリカ（家なき）・ダルマパーラ（護法の人）と名乗り、新たな使命実践の第一歩を踏み出すことになったのであります。

さてダルマパーラと日本仏教界との結縁の時を迎えました。

明治二十一年（一八八八年）に至り、日本では明治維新後新来のキリスト教と在来の仏教との対立と論争が激化し、時代の風潮と押し寄せる欧米の技術・物質文明の背景にあるキリスト教に在来の日本仏教界は混乱をきわめ、大きな危機感を募らせていました。

当時日本ではオルコット大佐の著書も紹介されており、スリランカにおける仏教復興運動とその中心人物がアメリカ生まれの白人仏教徒であることに、日本仏教界は挙げて大きな関心を

寄せ、キリスト教宣教活動に対する頹勢挽回の切り札として、まるで救世主を迎えるように「オルコット大佐招聘運動」が起こりました。

オルコット大佐招聘（一八八八年九月）の特使として野口復堂を派遣、彼は一ヶ月の滞在中、スリランカ留学中の釈興然やスマンガラ僧正などスリランカ仏教会指導者との会見、後ダルマパーラと共にインドに向かいます。野口特使は「神智協会」本部訪問とオルコット日本招聘という当初の目的達成に加え、インド滞在中国賓待遇を受け、懸案は全て成就しました。後の日印両国の文化・仏教交流と経済交流の架け橋となった実績は、仏道の至らしむるところと野口は晩年述懐しています。またオルコットの日本訪問の随員にダルマパーラを推薦したのは野口特使でした。

オルコット大佐は、スリランカ仏教界を代表する長老スマンガラ僧正から托された日本仏教

徒へのサンスクリット語の親書を携え日本を訪問します。日本で初めての南方テラワードム教（上座部仏教）代表の来日という快挙は、今日この大会にその意思が両国に引き継がれているといっても過言ではありません。

オルコット大佐と若きシンハリ仏教徒ダルマパーラは、一八八九年二月九日、数十発の打ち上げ花火の中、日本仏教界を代表する七宗管長と数百人の剃髪禿頭の僧侶による大歓迎の待つ神戸港埠頭に降り立ちます。ともあれ今から百十余年前貴国スリランカの仏教代表を歴史上初めて日本に迎えるという快挙が実現したのであります。貴国仏教界の代表として日本に足跡を印したのが、時に二十五歳の若きアナガリカ・ダルマパーラその人でありませぬ。

オルコット大佐は、日本滞在百十余日の間に日本全国各地に講演すること五十回を数え、「オルコット・ブーム」といふべき時代の寵児となつて

日本を後にしたのであります。キリスト教圏の白人種アメリカ人オルcottの来日と彼の説くところの仏教信奉の講演が、沈滞と危機感の中にあった日本仏教界の活性化と覚醒させるに大きなインパクトを与えたことは紛れもないことでした。

一方ダルマパーラ、航海中病を發し入港と同時に入院。病癒えず療養のため病院で悶々の日々を過ごす。やがて彼のもとへ、仏教僧侶は言うに及ばず識者、学者、哲学者、作家、教育者等が引きも切らずお見舞いに訪れました。ダルマパーラは病床の悲境にありながら異国日本にあって彼の多感な感受性と豊かな才能を發揮、臥していながら多彩に交流を深め日本と日本人に多大な影響と感化を与え、日本の仏教界に偉大な事績を遺したのです。これこそ日本で謂う「禍転じて福となす」でありませぬ。み仏のご意志で「床に伏す」そんな不思議を感じてなりません。

京都滞在中、病院で知り合った友人の一人、後に高名な仏教学者として名を残す高楠順次郎がいます。高楠博士はダルマパーラとの出会いから、「南伝大藏経」（七十巻）の翻訳出版という不朽の金字塔を打ち立てたのです。

四月下旬、漸く病床を離れたダルマパーラは、少しおくれてオルコットの講演旅行にも同行し、そして数多くの講演をこなしました。また各地の寺院を訪ね日本の高僧たちと親交を深めつつ京都知恩院で開かれた日本仏教各宗の管長（代表者）会議に出席、スリランカ仏教界長老スマンガラ僧正の托したメッセージを伝えたのであります。内容はスリランカ南伝仏教の概要と日本僧に対しパーリ語学習とスリランカ留学を勧めるもので、そのための必要な援助を惜しむものではないという主旨のものでした。

やがて一人の日本人留学僧を伴いダルマパーラは帰国の途に着きます。



さて、ダルマパーラの生涯を彩る三つの重大事それに点描を試みながらさらに話を進めてまいります。

まずここでダルマパーラの日本初訪問から一年半後に眼を転じると、日本人留学僧釈興然と共にマドラスに渡り神智協会の年次総会に出席しております。二人は仏陀成道の地ブツダガヤを訪ねます（一八九一年一月）。当時ブツダガヤはヒンドウ教の土候領主マハンタの所有となっており、仏教発祥の聖地としてのシンボル大菩提寺仏塔にヒンドウ教徒の礼拝するシバ・リンガが祀られていたのであります。篤信の仏教徒として同道の釈興然にとりましても釈尊成道の聖地ブツダガヤの巡拝は師僧釈雲照より申しつきり、師の夢見つつ果たせなかつたこの巡訪こそ最重大事であったのです。遙々訪ね来て釈尊仏陀正覚成道の聖地金剛宝座に額つき二人が眼にしたものは男根を象ったシバ神のリンガだつ

たのであります。この時受けたショックは如何ばかりであったでしょうか、想像を超えております。

仏教発祥の聖地がヒンドウ教徒の手のなかで荒廃する様を眼にした二人、悲憤慷慨してこの聖地を仏教徒のために取り戻し、あるべき姿に復興することの必要性と緊急性を痛感したことは当然のことと申せましょう。二人は時を移さず行動を起こし、その運動の推進母体作りと募金活動を始めたのであります。

この年（一八九一年五月）ブツダガヤ復興運動の推進母体として「ブツダガヤ大菩提会」を創設します。これが後のインド大菩提会及びスリランカ大菩提会の名の下にダルマパーラの名前を不滅のものとしている組織の前身となった訳であります。

二人の若き仏教徒が着手したブツダガヤ復興運動ではありましたが、時がたち周囲の状況が変化するに従い、事が一気呵成に運ぶことの容易で

ないことを思い知らされることになります。ダルマパーラ終生の悲願であつた聖地の復興、彼はその実現を生前眼にすることはありませんでした。

時過ぎて更なる国際舞台への登場のチャンスを迎えます。

アメリカ大陸発見四百年を記念したシカゴ万国博覧会（一八九三年）と時を同じくしてアメリカの呼びかけにより開催された「万国宗教大会」において、ダルマパーラはシンハラ仏教を代表して出席、そこで彼は仏教思想がいかに深遠で叡智に富んだものであるかを説き、たちまち欧米知識人を魅了するところとなります。仏教が世界宗教として脚光を浴びた瞬間でもあったのです。また大会に参加した日本仏教代表の中に、かつて歴史上二人目の日本人スリランカ留学僧釈宗演の姿もそこに在ったのです。

仏教の西洋化のため弘布の第一歩を進めると

同時に、ダルマパーラの、その動静は大会に一大センセーションを巻き起すのです。そのエピソードをひとつご紹介致します。

数百名の白人男女に取り囲まれたダルマパーラ。大会中あるホールで、矢継ぎ早な質問攻めにあります。彼は誠意と熱意を示し納得のゆくまでその回答を与えたという。ある老いた白人男性が「仏陀とキリストのいずれが優れていると思われるか」との質問に「基より基督は賢人でありましょう。しかし基督は仏陀に遅れること六百年後の生誕、仏陀の説かれた教法をそのまま解説しただけです。神・仏の対比優劣を比べるまでもないでしょう」と言い切ったというものであります。あつぱれと申し上げてよいのでありましょうか。

シカゴでの宗教大会を経たダルマパーラ、その途路日本に立ち寄っております。滞在となる

六週間は彼にとって二度目の訪日、初来日以来、彼の育んだ日本人と日本に対する信頼感、親愛の情は大きく膨らみ、揺るぎないものとなっていました。

東洋の仏教国その中で、唯一経済力のある日本、それに対する期待は当然の理、しかし彼の求むるものの大きさに比べ、日本側の反応は彼の期待と裏腹にほど遠いものであったようです。スリランカ・インドの宗主国イギリスの思惑も絡み、当時の世界情勢が事情を複雑にして、復興運動は遅々として進展することはありませんでした。

今日、ダルマパーラを考える上で、日本仏教徒と宗教的側面からのみ捉えられ、国際政治の側面について、真に救け合う間柄としての観察・論及はいかにも乏しいようでありませぬ。ダルマパーラの後半生、日本との交流における未解明の部分に光を当てながら、今後この面での研究

の必要性を指摘しておきたいと存じます。

日本人に対し終生変わらぬ友情と信頼を寄せたダルマパーラ、彼の提唱するブツダガヤ復興運動に対する参加と協力、支援を呼びかけながら六十九年の生涯を終えるまで、四たび日本を訪問しております。初来日から二十四年、日本との交流は絶えることなく、彼の創設した仏教青年会（Y M B A）を通して、日本仏教徒に在家仏教青年会活動を呼びかけ、更に仏教発祥の地、インドを第二の母国とし日印両国交流の重要性を説き、日印協会の創設に尽力、その産みの親ともなっております。

ダルマパーラは後半生、なぜか日本を訪れておりませぬ。理由は定かではないが、日本側にあったのではと、いう推測と疑問をここに呈すると共に今後の解明の待たれる大きな謎として留めておきたいと思えます。

一九三〇年彼は仏陀初転法輪の聖地サルナー

トに広大な敷地を入手、そこに初転法輪記念根本香林（ムーラ・ガンダ・クティール・ヴィハーラ）の建立に着手、石造寺院内部三面に仏陀伝壁画を製作するに当たり、近代宗教史にその名を残すであろう画家の選定、これはインド・スリランカを始めとする各国関係者の大きな関心事となりました。紆余曲折一人の日本人画家が選ばれました。推挙とその決定にダルマパーラの力が大きく関わったことは申し上げるまでもございません。

日本人画家野生司香雪の名が挙げられたとき、「この壁画はインド人画家によって製作されるべきだ」との異論や働きかけもあったようですが、壁画三面は遂に日本人の手により完成したのです。この一大事業完成に臨んで彼の示した日本人に対する友愛と信頼がこれほどまで深く強いものであったかということとは顕著であり大きな驚きであります。

仏陀の降魔成道図の完成を一日千秋の思いで待ち続けたダルマパーラ。その完成も束の間、その年四月二十九日、この地サルナートで生涯を閉じたのであります。

「我をして再生せしめよ。…大師仏陀の法を弘めんがために、二十五回にわたり再生のできんことを…」と遺した「家なき護法の人」アナガリカ・ダルマパーラ。

のちのちのことを後継者デバプリア・ヴァリシンハとその同志達に託したアナガリカ・ダルマパーラ。花の群れ咲く芝草のムーラガンダクティール・ヴィハーラの前庭。白亜の大理石立像となつて今日も訪れる巡拝者を見守っているのです。

ダルマパーラ没後七十年。何という不思議なご縁、巡り合わせでございましょう。今日ここにダルマパーラの偉大な生涯を讃え、ダルマパーラを敬仰し、その足跡を慕って仏道修行に精進

されている皆様と「一期一会」の語らいの時をいただき、『ダルマパーラの贈り物』という演題を掲げさせていただきました。私共日本人は共に仏教徒として二十一世紀を世界平和と共存の実現のためにダルマパーラの知恵を頂戴したかったからでございます。いまこそ、仏道を深く信じて安心し立命するという、理に従い述べさせていただきます。

二十一世紀の劈頭に立った私たち地球人、まこと多くの課題の解決に迫られております。

敢えて仏陀の教えにこそ、人類の行く手の闇に光明を点ずる得がたい松明が匿されていると申し上げたいのであります。

古代ギリシャの箴言に「真理は我らを自由にする」とあります、仏陀の尊い教えこそ、箴言に謂う真理そのものであると申せましょう。

我々仏教徒は、今こそブッダ・ダンマという

真理の松明を高々と掲げ地球全生命体の未来に垂れ込める暗雲を払いのける努力をすべき時ではないでしょうか。

しかしこのことは仏教の説く真理が唯一絶対のものであるなどと申しているではありません。

世界にはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドウ教、儒教、道教、神道など多種多様な宗教が混在しています。

よく宗教の対立、宗教をかさにした宗教戦争などという言葉が使われておりますが、それぞれの宗教はそれぞれに人々の幸福へ至る道を説いております。かりそめにも人々の不幸を願い説いた教義はございません。

全ての宗教の開祖の説くところは、人々の平和であり、共存であり、共生、そして幸福への道であります。

宗教対立・宗教戦争の起こる原因はその宗教そのものにあるのではなく、多くはそれらの宗

教の継承者たちがその教義を正しく理解していないことによるものであります。

日本には、「分け登る 麓の道は多けれど 同じ高嶺の 月を見るかな」という古歌がございます。エベレスト・チョモランマの頂上を目指す登行には幾つもの異なるルートがございますが、そのいずれもが唯一の頂上を目指す道の一つに違いないのであります。

一人の人間、一つの民族、一つの国家だけが平和で幸福ならそれでよしとする価値観があるとするなら、それは葬り去られるべき過去の遺物といわねばなりません。

貴国が生んだ世界最大のNGOサルボダヤ運動の創始者A・T・アリヤラトネ博士の提唱する「サルバ・ウダヤ」「全ての者の幸福」の思想こそブッダ・ダンマの原点であり、ダルマ・パーラが私に残してくれた『ダルマ・パーラの贈り

物』そのものと申せましょう。

ダルマ・パーラを憶念してその祖道を辿る私共が思い起こすべきもう一つの教えがあります。

いまいちど申し上げます。今から五十年前サフランシスコ対日講和会議でジャヤワルデネ大統領がスリランカ国民の総意として世界に向け獅子吼された、日本と日本人に対する寛容と慈悲の演説。

人は只 愛によつてのみ

憎しみを越えられる

人は憎しみによつては

憎しみを越えられない

(法句経)

この金言、あらためて感得致します。

結びに当たり、本日のこの集いでお話申し上げる勝縁と幸運を恵与下さいました仏縁に感謝

合掌し、貴国大統領閣下、首相閣下、人的資源
開発・教育・文化大臣カルナセーナ・コディツウ
ワック閣下を始めとする本大会開催にご支援ご
協力を賜りました各界代表の皆様に対しまして、
心底より厚く御礼申し上げます。

スリランカ在日大使閣下と大使館在勤の各位、
スリランカ大菩提会会長バナガラ・ウパティツ
サ僧正、ペルポラ・ビパシ財団創立者 理事長ペ
ルポラ・ビパシ僧正、サルボダヤ運動代表A・
T・アリヤラトネ博士、ジャヤワルデネ・カル
チュラル・センター プレマティラカ・マピティ
ガ事務総長に深甚の謝意を表するところでござ
います。

ご来会の皆様のご多幸とご健勝をお祈りし、
貴国の平和と繁栄を併せてお祈りしつつ私の拙
いお話を終わらせていただきたく存じます。
ご清聴誠に有難う御座いました。

合掌



曹洞宗成寿山善光寺 住職
横浜善光寺留学僧育英会 理事長
日本・スリランカ国交樹立五十周年記念
企画推進委員会顧問



横濱善光寺

いにして奨学派遣と受け入れ業務は確実に推移。既に世界二十ヶ国百十名の仏教学徒が本育英会の奨学金によつて仏陀の教えを学んでおります。この横浜善光寺留学僧育英会の奨学生の中にスリランカ国出身者の含まれていること申し上げるまでもありません。昨日も当地、留学僧が一人誕生しております。

この道のりはすべて私が若き日、海外の仏教に目を向け、インド・スリランカ・ビルマ（ミャンマー）・タイ・カンボジア・アメリカ・ヨーロッパ諸国等の国々に仏教の現状とその事績を踏んだための勝縁であり、これに大きな感化と影響を受けたことによるものでございます。国を異にし、民族・人種を越え、たとえ様態は異なっても、その原点は仏陀の教えであり、ともに原点を共有することができればやがて相互理解のもと、もつともつと世界人類の救済と平和共存、実現に大きく貢献できると確信したからに外な

りません。

このような経緯から、この度貴国と日本との国交樹立五十周年記念、日本・スリランカ友好親善使節団の結成派遣にあたり、この使節団の代表・団長を喜んでお引き受け致した次第であります。

アナガリカ・ダルマ・パーラ生誕一三五年度の式典出席

一九九九年九月スリランカ大菩提会のお招きに預かり私は、日本仏教徒代表としてアナガリカ・ダルマ・パーラ生誕一三五年記念式典に出席させていただきました。本日の演題もこれに因んで私のスリランカを述べてみたいと思います。

貴国スリランカの仏教がテーラワーダ仏教（上座部仏教）と呼ばれるのに対して私共日本の仏教はマハーヤーナ仏教（大乘仏教）と呼ばれております。原点「釈尊」の教えでありながら、この両者の間には多くの相違と同時に多くの共

通点があります。

大統領と日本

ここにスリランカの仏教と日本の仏教の相違について論じられた興味深いエピソードをひとつご紹介いたします。

かつて日本の禅仏教を世界に広めた近世の仏教学者鈴木大拙博士、生前アナガリカ・ダルマパーラとも深い交友関係にあったお方でございます。ある時鈴木博士をかのジャヤワルデネ大統領が鎌倉に博士を訪ね、質問されたと伝えられております。博士に対し「お尋ね致しますが、貴国日本の仏教と私共スリランカの仏教の違いは何でありましょうか？」と問われた。これに対し博士は、「なぜ相違を強調されるのか。三宝に帰依し、無常・苦・無我証得の為の八正道を共に信奉しているではありませんか」と言上されたというものであります。後ジャヤワルデ

ネ大統領の著書で博士の仏教に対するご造詣の深さに感銘し改めて日本人と日本国に共有と共感を覚えたご紹介されていることでもあります。

ジャヤワルデネ大統領が仏陀の法句経より「*Ignored ceases not by hatred, but by love*」の箴言を引用しサンフランシスコ講和会議で日本擁護の歴史的名演説をなされる直前、日本に立ち寄ったときの出来事であります。

ダルマパーラについてお話し上げる論旨から脇道に外れましたが、私はここで貴国と日本を代表する先人二人のエピソードから、北伝・南伝という異なったルートを通じてさまざまな進行形態を持ちながら伝播された仏教、その源は仏陀の教法（ブッダ・ダンマ）に帰一するのだということを強調したかったからであります。

先に述べましたように、若き日の仏教国タイ、名刹ワット・パクナム寺院に掛錫し、行住坐臥の日常生活の中での求道探求、これこそ仏陀の

祖道そのものであると感得したものであります。実にこのことが私の新しい仏教道場を目指して建立しました善光寺であり、又のちの横浜善光寺留学僧育英会の創立に至る原点でもあります。

さて、今日の本題、日本・スリランカ国交樹立五十周年記念に因み掲げさせていただきました『ダルマパーラの贈り物』について話を進めたいと存じます。

まず、ダルマパーラと日本仏教界との直接交流が始まる前夜について申し上げ、次にダルマパーラと日本仏教界との交流に触れ、更にダルマパーラの志がどのような形で貴国と日本において継承されてきているかを瞥見し、最後に二十一世紀に生きる我々仏教者はこれまで見てきた貴国と日本との仏教交流の上でダルマパーラの残された遺産をどのように生かし甦らせ、それを以って如何にして世界人類の平和と共存と



いう、時代の要請に添えて行くかについて論及して参ります。

ご承知の通り貴国スリランカは、古代から海のシルクロードの要衝として地勢学的に東西貿易に重要な役割を果たしておりますことは今更申し上げるまでもございません。

仏陀の正法（仏教）が世に開顕されてから二千五百余年。貴国スリランカと日本との直接交流の扉が開かれてからの年月は、僅かに百二十年というのが私の知解であります。もとより近年に至り日本人のヨーロッパ訪問者とその船舶往還の途次、ゴール港又はコロンボに寄港した例は多数あつたはずです。しかし正史に残るスリランカ訪問の記録となりますと極めて少なく、正確なものの中々見当たらないのが現実であります。一八八三年五月ヨーロッパから日本へ帰国の途、コロンボに寄港した一人の日本人外交官と当時の英国植民地総督府における総督首席

補佐官マハームダリとの邂逅に求めたいのであります。

これがスリランカと日本仏教徒のはじめの出会いであり、奇しき縁と存念しお話し申しあげて参ります。今から丁度百二十年前のことになりません。

ダルマパーラと日本

当時ロンドン日本大使館勤務の若き外交官林董（当時三十三歳。のちに駐英大使となり、更に昇進して外務大臣を経て伯爵となる日本外交史に足跡を残した逸材）は、ヨーロッパ留学から帰国の有栖川宮威仁親王殿下の随員としてコロンボに寄港、滞在中英国総督アーサー・H・ゴードン卿の歓迎レセプションに招かれた際、隣席したのが総督首席補佐官・スリランカ人最高位の総督府行政官マハームダリでした。

林は、出色の外交官であり又英語にも堪能で

した。隣席したマホームダリとの会話の中で、「日本も貴国と同じ仏教国である」と申しますと、これを聞いたマホームダリは非常に驚いたそうです。当時アジアの東端に日本という国が存在するということさえ知る人のきわめて少なかった時代。日本も仏教国だと聞いたマホームダリの驚きは当然でした。

只今私共が相集うこの地、コロンボにおいて僅か百二十年前貴国スリランカと日本との近代仏教交流の歴史的扉が開かれたのであります。

マホームダリが林に両国の仏教交流を呼びかけたことは申し上げるまでもございませんし、林がこれに即応したことも、その後の二人の動きからよく知られるところであります。

マホームダリはこの林との出会いの直後、甥のグナラトネに命じスリランカをよく知る日本の仏教学者南條文雄に書簡を送っています「日本の僧侶がスリランカに留学し、当地の仏教を

学ぶに当たって、できる限りの便宜を図る」旨の申し出をしたと伝えられております。

この若き日本人外交官とスリランカ高官との出会いが契機となって日本人僧侶のスリランカ留学に道が開かれ、貴国と日本との仏教交流の幕開けを迎えることになるのであります。

この出会いから三年の後、マホームダリの親切な申し出が実り、歴史上初めて（一八八六年十月）スリランカへの日本人留学僧釈興然（スリランカ僧名グナラタナ）が出帆し、さらに翌年（一八八七年）二人目の日本人留学僧釈宗演（パンニヤケート）がコロンボ港に到着。この二人がこれから始まる近世における両国仏教交流の序幕の主役を演ずることになるのであります。

ブラヴァッキー夫人とオルコット

スリランカにおける近世の仏教復興は（一八八〇年）アメリカ神智協会のブラヴァッキー夫

人とオルコット大佐のスリランカ上陸によって触発され始まったとされています。

この白人仏教徒は、一八七三年の『パーナドウラの論戦』（仏教とキリスト教の論戦）に加わったスリランカ仏教徒の代表メーゲワツテ・グナンダに傾倒し、論戦に先行して既に文通によって接触していたことが知られています。その間の経緯の詳細はさておき、『論戦』において白人キリスト教宣教師の優位乃至勝利を確信していたキリスト教側の予想を裏切って仏教僧グナンダの勝利に終わったことは、仏教徒を自認するブラヴァツキー夫人とオルコット大佐に大きな勇気を与えることになったのであります。

スリランカに来島した二人は（一八八〇年）三帰五戒を受け得度し、正式に仏教徒として活動を始めるのでありますが、数世紀に亘るキリスト教徒による植民地支配のもとで仏教の伝統文化を蹂躪されてきたスリランカ仏教徒は、こ

の二人に啓発されゆくことになります。

ドン・デイヴィットと呼ばれていた青年ダルマパーラは、（一八八四年）「神智協会」に入会し、翌年オルコット大佐の創設した「仏教神智協会」の事務局責任者となり、やがてスリランカの国家再生と仏教復興運動への献身という道を歩み始めるのであります。

かつてブラヴァツキー夫人のオカルト的魅力に引かれて神智協会の門をたたいた若きドン・デイヴィット（ダルマパーラ）は、夫人自身から「あなたの生涯を人類への奉仕に捧げることがより賢明でありましょう。何よりもまず仏陀の聖なる言語、パリー語を学びなさい。」という助言に励まされ、オカルト的仏教神秘主義の呪縛から解き放たれ、大きな感化を受けたブラヴァツキー夫人と決別していったのであります。

仏教神智協会において大佐の補佐役としての広範な活動を通じ、伝統仏教に目覚め、祖国再

生への認識を深めてゆくなか、梵行の誓願を立て（一八八八年）ドン・デイヴィットの名を捨て、アナガリカ（家なき）・ダルマパーラ（護法の人）と名乗り、新たな使命実践の第一歩を踏み出すことになったのであります。

さてダルマパーラと日本仏教界との結縁の時を迎えました。

明治二十一年（一八八八年）に至り、日本では明治維新後新来のキリスト教と在来の仏教との対立と論争が激化し、時代の風潮と押し寄せる欧米の技術・物質文明の背景にあるキリスト教に在来の日本仏教界は混乱をきわめ、大きな危機感を募らせていました。

当時日本ではオルコット大佐の著書も紹介されており、スリランカにおける仏教復興運動とその中心人物がアメリカ生まれの白人仏教徒であることに、日本仏教界は挙げて大きな関心を

寄せ、キリスト教宣教活動に対する頹勢挽回の切り札として、まるで救世主を迎えるように「オルコット大佐招聘運動」が起こりました。

オルコット大佐招聘（一八八八年九月）の特使として野口復堂を派遣、彼は一ヶ月の滞在中、スリランカ留学中の釈興然やスマンガラ僧正などスリランカ仏教会指導者との会見、後ダルマパーラと共にインドに向かいます。野口特使は「神智協会」本部訪問とオルコット日本招聘という当初の目的達成に加え、インド滞在中国賓待遇を受け、懸案は全て成就しました。後の日印両国の文化・仏教交流と経済交流の架け橋となった実績は、仏道の至らしむるところと野口は晩年述懐しています。またオルコットの日本訪問の随員にダルマパーラを推薦したのは野口特使でした。

オルコット大佐は、スリランカ仏教界を代表する長老スマンガラ僧正から托された日本仏教

徒へのサンスクリット語の親書を携え日本を訪問します。日本で初めての南方テラワードム教（上座部仏教）代表の来日という快挙は、今日この大会にその意思が両国に引き継がれているといっても過言ではありません。

オルコット大佐と若きシンハリ仏教徒ダルマパーラは、一八八九年二月九日、数十発の打ち上げ花火の中、日本仏教界を代表する七宗管長と数百人の剃髪禿頭の僧侶による大歓迎の待つ神戸港埠頭に降り立ちます。ともあれ今から百十余年前貴国スリランカの仏教代表を歴史上初めて日本に迎えるという快挙が実現したのであります。貴国仏教界の代表として日本に足跡を印したのが、時に二十五歳の若きアナガリカ・ダルマパーラその人でありませぬ。

オルコット大佐は、日本滞在百十余日の間に日本全国各地に講演すること五十回を数え、「オルコット・ブーム」といふべき時代の寵児となつて

日本を後にしたのであります。キリスト教圏の白人種アメリカ人オルcottの来日と彼の説くところの仏教信奉の講演が、沈滞と危機感の中にあつた日本仏教界の活性化と覚醒させるに大きなインパクトを与えたことは紛れもないことでした。

一方ダルマパーラ、航海中病を發し入港と同時に入院。病癒えず療養のため病院で悶々の日々を過ごす。やがて彼のもとへ、仏教僧侶は言うに及ばず識者、学者、哲学者、作家、教育者等が引きも切らずお見舞いに訪れました。ダルマパーラは病床の悲境にありながら異国日本にあつて彼の多感な感受性と豊かな才能を發揮、臥していながら多彩に交流を深め日本と日本人に多大な影響と感化を与え、日本の仏教界に偉大な事績を遺したのです。これこそ日本で謂う「禍転じて福となす」でありませぬ。み仏のご意志で「床に伏す」そんな不思議を感じてなりませぬ。

京都滞在中、病院で知り合った友人の一人、後に高名な仏教学者として名を残す高楠順次郎がいます。高楠博士はダルマパーラとの出会いから、「南伝大藏経」（七十巻）の翻訳出版という不朽の金字塔を打ち立てたのです。

四月下旬、漸く病床を離れたダルマパーラは、少しおくれてオルコットの講演旅行にも同行し、そして数多くの講演をこなしました。また各地の寺院を訪ね日本の高僧たちと親交を深めつつ京都知恩院で開かれた日本仏教各宗の管長（代表者）会議に出席、スリランカ仏教界長老スマンガラ僧正の托したメッセージを伝えたのであります。内容はスリランカ南伝仏教の概要と日本僧に対しパーリ語学習とスリランカ留学を勧めるもので、そのための必要な援助を惜しむものではないという主旨のものでした。

やがて一人の日本人留学僧を伴いダルマパーラは帰国の途に着きます。



さて、ダルマパーラの生涯を彩る三つの重大事それに点描を試みながらさらに話を進めてまいります。

まずここでダルマパーラの日本初訪問から一年半後に眼を転じると、日本人留学僧釈興然と共にマドラスに渡り神智協会の年次総会に出席しております。二人は仏陀成道の地ブツダガヤを訪ねます（一八九一年一月）。当時ブツダガヤはヒンドウ教の土候領主マハンタの所有となっており、仏教発祥の聖地としてのシンボル大菩提寺仏塔にヒンドウ教徒の礼拝するシバ・リンガが祀られていたのであります。篤信の仏教徒として同道の釈興然にとりましても釈尊成道の聖地ブツダガヤの巡拝は師僧釈雲照より申しつきり、師の夢見つつ果たせなかつたこの巡訪こそ最重大事であったのです。遙々訪ね来て釈尊仏陀正覚成道の聖地金剛宝座に額つき二人が眼にしたものは男根を象ったシバ神のリンガだつ

たのであります。この時受けたショックは如何ばかりであったでしょうか、想像を超えております。

仏教発祥の聖地がヒンドウ教徒の手のなかで荒廃する様を眼にした二人、悲憤慷慨してこの聖地を仏教徒のために取り戻し、あるべき姿に復興することの必要性と緊急性を痛感したことは当然のことと申せましょう。二人は時を移さず行動を起こし、その運動の推進母体作りと募金活動を始めたのであります。

この年（一八九一年五月）ブツダガヤ復興運動の推進母体として「ブツダガヤ大菩提会」を創設します。これが後のインド大菩提会及びスリランカ大菩提会の名の下にダルマパーラの名前を不滅のものとしている組織の前身となった訳であります。

二人の若き仏教徒が着手したブツダガヤ復興運動ではありましたが、時がたち周囲の状況が変化するに従い、事が一気呵成に運ぶことの容易で

ないことを思い知らされることになります。ダルマパーラ終生の悲願であつた聖地の復興、彼はその実現を生前眼にすることはありませんでした。

時過ぎて更なる国際舞台への登場のチャンスを迎えます。

アメリカ大陸発見四百年を記念したシカゴ万国博覧会（一八九三年）と時を同じくしてアメリカの呼びかけにより開催された「万国宗教大会」において、ダルマパーラはシンハラ仏教を代表して出席、そこで彼は仏教思想がいかに深遠で叡智に富んだものであるかを説き、たちまち欧米知識人を魅了するところとなります。仏教が世界宗教として脚光を浴びた瞬間でもあったのです。また大会に参加した日本仏教代表の中に、かつて歴史上二人目の日本人スリランカ留学僧釈宗演の姿もそこに在ったのです。

仏教の西洋化のため弘布の第一歩を進めると

同時に、ダルマパーラの、その動静は大会に一大センセーションを巻き起すのです。そのエピソードをひとつご紹介致します。

数百名の白人男女に取り囲まれたダルマパーラ。大会中あるホールで、矢継ぎ早な質問攻めにあります。彼は誠意と熱意を示し納得のゆくまでその回答を与えたという。ある老いた白人男性が「仏陀とキリストのいずれが優れていると思われるか」との質問に「基より基督は賢人でありましょう。しかし基督は仏陀に遅れること六百年後の生誕、仏陀の説かれた教法をそのまま解説しただけです。神・仏の対比優劣を比べるまでもないでしょう」と言い切ったというものであります。あつぱれと申し上げてよいのでありましょうか。

シカゴでの宗教大会を経たダルマパーラ、その途路日本に立ち寄っております。滞在となる

六週間は彼にとって二度目の訪日、初来日以来、彼の育んだ日本人と日本に対する信頼感、親愛の情は大きく膨らみ、揺るぎないものとなっていました。

東洋の仏教国その中で、唯一経済力のある日本、それに対する期待は当然の理、しかし彼の求むるものの大きさに比べ、日本側の反応は彼の期待と裏腹にほど遠いものであったようです。スリランカ・インドの宗主国イギリスの思惑も絡み、当時の世界情勢が事情を複雑にして、復興運動は遅々として進展することはありませんでした。

今日、ダルマパーラを考える上で、日本仏教徒と宗教的側面からのみ捉えられ、国際政治の側面について、真に救け合う間柄としての観察・論及はいかにも乏しいようでありませぬ。ダルマパーラの後半生、日本との交流における未解明の部分に光を当てながら、今後この面での研究

の必要性を指摘しておきたいと存じます。

日本人に対し終生変わらぬ友情と信頼を寄せたダルマパーラ、彼の提唱するブツダガヤ復興運動に対する参加と協力、支援を呼びかけながら六十九年の生涯を終えるまで、四たび日本を訪問しております。初来日から二十四年、日本との交流は絶えることなく、彼の創設した仏教青年会（Y M B A）を通して、日本仏教徒に在家仏教青年会活動を呼びかけ、更に仏教発祥の地、インドを第二の母国とし日印両国交流の重要性を説き、日印協会の創設に尽力、その産みの親ともなっております。

ダルマパーラは後半生、なぜか日本を訪れておりませぬ。理由は定かではないが、日本側にあったのではと、いう推測と疑問をここに呈すると共に今後の解明の待たれる大きな謎として留めておきたいと思えます。

一九三〇年彼は仏陀初転法輪の聖地サルナー

トに広大な敷地を入手、そこに初転法輪記念根本香林（ムーラ・ガンダ・クティール・ヴィハーラ）の建立に着手、石造寺院内部三面に仏陀伝壁画を製作するに当たり、近代宗教史にその名を残すであろう画家の選定、これはインド・スリランカを始めとする各国関係者の大きな関心事となりました。紆余曲折一人の日本人画家が選ばれました。推挙とその決定にダルマパーラの力が大きく関わったことは申し上げるまでもございません。

日本人画家野生司香雪の名が挙げられたとき、「この壁画はインド人画家によって製作されるべきだ」との異論や働きかけもあつたようですが、壁画三面は遂に日本人の手により完成したのです。この一大事業完成に臨んで彼の示した日本人に対する友愛と信頼がこれほどまで深く強いものであつたかということとは顕著であり大きな驚きであります。

仏陀の降魔成道図の完成を一日千秋の思いで待ち続けたダルマパーラ。その完成も束の間、その年四月二十九日、この地サルナートで生涯を閉じたのであります。

「我をして再生せしめよ。…大師仏陀の法を弘めんがために、二十五回にわたり再生のできんことを…」と遺した「家なき護法の人」アナガリカ・ダルマパーラ。

のちのちのことを後継者デバプリア・ヴァリシンハとその同志達に託したアナガリカ・ダルマパーラ。花の群れ咲く芝草のムーラガンダクティール・ヴィハーラの前庭。白亜の大理石立像となつて今日も訪れる巡拝者を見守っているのです。

ダルマパーラ没後七十年。何という不思議なご縁、巡り合わせでございましょう。今日ここにダルマパーラの偉大な生涯を讃え、ダルマパーラを敬仰し、その足跡を慕つて仏道修行に精進

されている皆様と「一期一会」の語らいの時をいただき、『ダルマパーラの贈り物』という演題を掲げさせていただきました。私共日本人は共に仏教徒として二十一世紀を世界平和と共存の実現のためにダルマパーラの知恵を頂戴したかったからでございます。いまこそ、仏道を深く信じて安心し立命するという、理に従い述べさせていただきます。

二十一世紀の劈頭に立った私たち地球人、まこと多くの課題の解決に迫られております。

敢えて仏陀の教えにこそ、人類の行く手の闇に光明を点ずる得がたい松明が匿されていると申し上げたいのであります。

古代ギリシャの箴言に「真理は我らを自由にする」とあります、仏陀の尊い教えこそ、箴言に謂う真理そのものであると申せましょう。

我々仏教徒は、今こそブッダ・ダンマという

真理の松明を高々と掲げ地球全生命体の未来に垂れ込める暗雲を払いのける努力をすべき時ではないでしょうか。

しかしこのことは仏教の説く真理が唯一絶対のものであるなどと申しているではありません。

世界にはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドウ教、儒教、道教、神道など多種多様な宗教が混在しています。

よく宗教の対立、宗教をかさにした宗教戦争などという言葉が使われておりますが、それぞれの宗教はそれぞれに人々の幸福へ至る道を説いております。かりそめにも人々の不幸を願って説いた教義はございません。

全ての宗教の開祖の説くところは、人々の平和であり、共存であり、共生、そして幸福への道であります。

宗教対立・宗教戦争の起こる原因はその宗教そのものにあるのではなく、多くはそれらの宗

教の継承者たちがその教義を正しく理解していないことによるものであります。

日本には、「分け登る 麓の道は多けれど 同
じ高嶺の 月を見るかな」という古歌がございます。エベレスト・チョモランマの頂上を目指す登行には幾つもの異なるルートがございますが、そのいずれもが唯一の頂上を目指す道の一つに違いないのであります。

一人の人間、一つの民族、一つの国家だけが平和で幸福ならそれでよしとする価値観があるとするなら、それは葬り去られるべき過去の遺物といわねばなりません。

貴国が生んだ世界最大のNGOサルボダヤ運動の創始者A・T・アリヤラトネ博士の提唱する「サルバ・ウダヤ」「全ての者の幸福」の思想こそブッダ・ダンマの原点であり、ダルマ・パーラが私に残してくれた『ダルマ・パーラの贈り

物』そのものと申せましょう。

ダルマ・パーラを憶念してその祖道を辿る私共が想い起こすべきもう一つの教えがあります。

いまいちど申し上げます。今から五十年前サ
ンフランシスコ対日講和会議でジャヤワルデネ
大統領がスリランカ国民の総意として世界に向
け獅子吼された、日本と日本人に対する寛容と
慈悲の演説。

人は只 愛によつてのみ

憎しみを越えられる

人は憎しみによつては

憎しみを越えられない

(法句経)

この金言、あらためて感得致します。

結びに当たり、本日のこの集いでお話申し上げる勝縁と幸運を恵与下さいました仏縁に感謝

合掌し、貴国大統領閣下、首相閣下、人的資源
開発・教育・文化大臣カルナセーナ・コディツウ
ワック閣下を始めとする本大会開催にご支援ご
協力を賜りました各界代表の皆様に対しまして、
心底より厚く御礼申し上げます。

スリランカ在日大使閣下と大使館在勤の各位、
スリランカ大菩提会会長バナガラ・ウパティツ
サ僧正、ペルポラ・ビパシ財団創立者 理事長ペ
ルポラ・ビパシ僧正、サルボダヤ運動代表A・
T・アリヤラトネ博士、ジャヤワルデネ・カル
チュラル・センター プレマティラカ・マピティ
ガ事務総長に深甚の謝意を表するところでござ
います。

ご来会の皆様のご多幸とご健勝をお祈りし、
貴国の平和と繁栄を併せてお祈りしつつ私の拙
いお話を終わらせていただきたく存じます。
ご清聴誠に有難う御座いました。

合掌



曹洞宗成寿山善光寺 住職
横浜善光寺留学僧育英会 理事長
日本・スリランカ国交樹立五十周年記念
企画推進委員会顧問

スリランカ名誉総領事

ネルソン ウィターナゲ様よりの御礼状

黒田先生

拝啓 時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。旅行中大変ご心配をおかけ致しましたが、私も全快し先日無事帰国いたしました。

5日間という大変短い期間にもかかわらず、スケジュールが盛りだくさんのあわただしい旅行でしたが、お楽しみいただけたでしょうか。このたびの企画は、両国の友好発展と相互理解において大変意義深いものでございました。無事成功に終わりましたのも、黒田先生をはじめとする実行委員会の先生方のおかげと心より感謝しております。また、私もご一緒させていただくことができ、とてもうれしく思っております。末筆ながら皆様のご健康と益々のご活躍を心よりお祈り致します。

敬具

朝も、昼も、夜も、逢うも、別れも

アーユ・ボーワアン

東郷 敏

スリランカまで、およそ九時間、週三便という機内、ほぼ満席。世界的観光地モルジブへの中継地になっているらしく、聖地スリランカへは、われわれだけといってもいい。さて総勢八十名の大旅団、座席の希望はできない。従って隣次第で旅の玉石も決まってくる。これは相身

互い、さていったい、シートはと探す。

らしきところに、なんとオレンジ僧、その隣が私の席、ああ己ぬる哉、地獄に仏とは、このことをいう。さらにその隣は、随分むかしおじょうちゃんだった人、抑私の心掛けがよくない、向っているのは仏教の聖地、属している旅団は

感謝報恩、誠を捧げる神聖なグループ、有らぬ
思いを抱くなど以つての外。上座仏教の教えに
も「あらゆる悪行を絶ち、善きことを思い、善
きことを行い、清浄な心を保つべし、これ仏の
道なり——と人間あれが欲しい、これが欲しい
と渴望するは、苦惱のはじめなり、この悪魔を追
い払えない様では、仏弟子にはなれぬ」と簡明
に説かれている。実に要を得ている。それにし
ても憎つくきシート。幸先がよくない。しばら
く悶々として時を過ごす。通路側がオレンジ僧、
度々用足しもできない、動いてもいけない、無
作法な姿勢も、などと思っていると高ぶってく
る。

なんだか急に下腹部のあたりに蟻りを感じる。
だんだん半ばでなくなり「エクスキューズミー」
と言う。『どうぞ』と返ってくる。また「スミマ
セン」というと『プリーズ』とくる。対話出来
ているのか不思議な思い。こんどはオレンジ僧

『キャンユースピークイングリッシュ』と来た。『ノー
サ、アイキャンスピークジャパニーズ ベルウェ
ル』と応え、大笑い。もうすつかり落ち着き、
ほぐれてきた。用足すなどどこへやら、矢継ぎ
早や、幼稚愚問は承知の上、失礼無礼顧りみず
スリランカ事情、上座仏教の「いろは」につい
て私が知り得なかったこと等。お蔭でスツカリ、
スリランカ通になる。私はひとときも聞き逃し
たり、見逃したりはしない。見る気になって、
聞く気になって、自身の細胞に叩き込んでゆく。
八時間もの個人レッスンの特別学習の成果であ
る。つくづく思う、私はなんと運がいいのだろ
う。ダルマパーラーに深く由来する御方である。
コロンボ大菩提寺の日本スリランカ仏教センター
(千葉蘭華寺上座仏教寺院・管長バーナガラ・
ウパティッサ)に活躍中の若き開教師、一年半
ぶりの帰国だという。まこと縁とは異なるもの味
なものと言うが、巡り合わせ、この出逢いに不

思議なものを感じる。

師に聞いてみる。いちばんのたのしみは『アンマー（母）に会うことです』。聞いていて目頭が熱くなるではありませんか。

Y. パンニヤラマだと名乗っている。さて比丘ヨ「旅は道づれ、世は情け」とか、「袖すり合うも多少の縁」とか、こんな諺きいたことありますかの、「シリマシエン」「ワカリマセン」という。マコトニ逢い難き良き因縁。

やがて再び日本に帰られたのは、ひと月もあとのこと。突然デンワに、いまニッポンカエリマシタと弾んでいる。『アンマー（母）が、アリガトウと喋っていた』とてもよろこんでいたという。スリランカ到着時、「再び帰らざることを思い、ホンノ心ばかり、お母さんにと頭陀袋に押し込んでやった、そのことのようにだった。なんだか、聞いていて、ヨカッタと思う。なんだかほのぼのとしたものを感じる。この訪問記も、



出発前方丈の命で書くことになっていた。考えてみると、出国ゲートを潜ったとき既に聖地モードに自動転換させられていたことになる。いやはやと言うより、ほかない。

さて機は予定通り、バウンドしながら唸っている。

夜の八時というのに、湿り気を含んだ熱風、ドドッと汗が吹き出す。赤道直下、北回帰線に挟まれたスリランカ。これ位は当然なのだろう。

待機中のバスにのる。シャンデリヤと絨毯じゅうたんに包み込まれた空港リムジンバス、豪華だなあと思いつつ周りを見回す、わが団員ばかり。外国だとは思えない。実に不思議。入国査証や荷物など一切関係なく、全くストレートに、多分或る建物に横付けされている。

入口から中程。彩りを添えた美女軍団、ライトやテレビカメラが賑々しい、白詰正装の政府の要人もいる。またオレンジ僧など騒々しい出



迎え風景。同じ機に、多分どこかの国の偉い要人が乗っていた、従ってそのあとになる、おそくなるなあと思っていると、『クロダシエンシェイ』と大声で連呼している。どうもお目当てはこの旅団らしい。

早速団長先頭に順々と入室する。例の美女たちが手に手に、「アーユボワーン、アーユボワーン」と首にレイを巻きつける。入り口正面には『VIPルーム』と大きく明示されている。途端パニックしてしまう。VIPはこの旅団だった。

これは国賓待遇なんだと、はじめて認識する。待ち受けているのは、高僧、狎下各大臣、政府の方々だという。

代表・Drカルナセーナ・コデイトウワック文部大臣より歓迎のご挨拶、約一時間歓談したのち、荷物の確認をと、アナウンス。それぞれバッゲージのチェック。貼られたステッカーに、大きくVIPと表示されている。単なる旅

団ではない。国と国のレベルに位置している。マコト、スローガン通りだった。よくVIP並だとジョークで言ったことがある。これは正真正銘重要人物として扱われている。実に働いた^{くす}い気持である。すくなくとも私はそれに価していない。いわゆるモグリだ。胸騒ぎする。

今朝の新聞だと掲げるその各紙拜見、一面に大きく紹介されているのは、親善使節団、黒田団長他八十名の記事が載せられている。さあこれは大変。

昨年旅団結成時、国交樹立五十周年記念行事という大スローガン。スリランカ政府や仏教界の関係者の方々が、国際派スリランカ通の、黒田武志住職を軸に、各界有志お歴々が名を連ねる混成チーム。一年半も前からその準備にとりかかり、日本・スリランカのさらなる親善と融和を深めるのが狙いと認識はしていた。しかしどうもタイトルが仰々しい。

先の大戦、不幸にして敗戦国となった日本。窮地の世界から救い出してくれた国、それがスリランカだという。

いまさら遠い昔のこと、すべては時効だといいたかった。そんなことよりダルマパーラーといい、ジャヤワルデネ大統領といっても、私には、恩も義理もまた関わりもないこと、しかし滅多に行けない宝島、この際観光専一にさせていただきたい、なにか親善行事らしきものがあるとするなら、すべて黒田団長と役員の方々が処理する、残り団員は、買ひ物と観光三昧にさせていただけたらと、戯れごとではなく本気で方丈に申し上げたことがあった。これまで大概、笑って聞き流す方丈。何故か、このときは違っていた。さすがに頭が血がおのぼりになったように、日頃柔和なお顔がひきつり、みるみる不動明王。灰皿でもあったら手が伸びそうな形相。その時は思った。やはり心にあるものをそのま





ま言うてはいけない、少し繕^{つくろ}ってモノのいい様もあつたと反省。

『トーゴ、オレは悲しいヨ』睨^{にら}みつける方丈。人知れず、早くから、いまこそスリランカ国に対し、感謝、報恩の誠を捧げ尽すとき、ひとり踏ん張^{ふみか}っておいでだっただけに、この語、許すわけにいかなかったこと、想像できる。

前後したが、すべては、スリランカ空港に、降り立ったときから状況は一変。すっかり親善

大使になりきる。そのひとり代表として振る舞うことになる。これは私だけではない。団員すべてにいえること。「人間というものは、自分の都合によって見事、変り得るもの」。こんな盛大な歓迎を受けたということは、いったいなんであつたのか。国レベルといつても、文部省と仏教界が中心になっている。

必ずしも財界が関わっているようには思えない。明らかに文化・教育・宗教・歴史という観点から、この旅団の位置づけがなされているように私は思う。そのすべてのベースはスリランカの国及び人々と黒田団長が二十年に亘る深い交流と真の信頼関係を築いてきたという経緯、その基点に仏教という共通、共有するものがあり、点と線で結ぶところにダルマパーラーという存在が、彷彿としている。

この間、NPO、NGO発祥の地とされる、スリランカ、サルボダヤ財団からの国際賞の受

賞またダルマパーラスリランカ大菩提会より、特別貢献賞、そして横浜善光寺留学僧育英会、二十年に亘り百十名の留学僧に奨学資金を贈呈、その人材育成に尽力しているなど、広く中枢と関わっていることが、国を挙げて、或いは仏教界こそぞってという必然性を生み出したものと思う。

さて日本とスリランカの歴史には、光だけではなく影の部分もあったと思う。現代の価値観だけで過去を評価したり、処理してしまうことにはいささか問題もあり、しっかりとした歴史認識があつてこそ、互敬の間柄をさらに深く尊くとりもつことができるということを実感する。

VIPラウンジから、バスまでは約百米。漸くホテルに向う。一步広場に踏み出した途端、鐘や太鼓、吹奏樂に取り囲まれ、身動きできない。遠すぎるバス乗り場。突然の遭遇と、衝撃に戸惑い、オロオロするばかり、誰も彼も自分達になにが起こっているのか、整理ができない



でいる。旅行社の方々もVIPといい、この出迎えといい、初体験、戸惑っているのが本心だという。入国のための手続きが一切省かれていることに眩惑しているとさえいいうから、普通ではない。「成寿」見開きに、種々写真が載せられているから、ご覧いただくと、想像がつくと思う。それでもこれは序の口だった。

翌日、いよいよダルマパーラー（基調講演の中に述べられている）ゆかりの地。その寺院、大菩提会に向う。寺院は、日本との交流が深く千葉に蘭華寺（上座仏教）を興し、双方の住職である、バーナガラ・ウパティッサ大僧正が案内する。コロンボ市の中心地入りなのか、バスがスローダウン、沿道に人が溢れている。その道路沿い、色鮮やかに民族衣装に彩られた各種踊り子たち。鼓笛隊、騎馬隊、金モールに包まれた象群。白バイ、パトカーなど、お祭りに出会う。バスの中はおおよろこび、運がいい、など

と、写真やビデオに収めている。ガイドに尋ねてみる、なんのお祭りですか。『コレワミナツサマノ、カンゲイデス』多分にジョークだと聞き流す。ただ、なにがあっても、起こっても驚かなくなっている。その行列の横を流しながら、しばらくすると、さあ着きました、と行列の最前列あたりに降ろす。

ところがすでに黒田団長、役員をとり囲んだテレビ・新聞など報道機関、政府・仏界の要人に、インタビュウ等、カメラの洪水に流されている。驚きたくないが、やっぱり、オドロク。歓迎の中をかき分けるように寺院へと歩く。途中頂度阿波おどり風景と同じように道路沿い、物見ヤグラが置かれ、そこに団長・役員が招かれ坐るやいなや、待機中の民族芸術団。

次々、特技の披露、心より持て成してくれる。その間、約一時間、空港のカルチャーショック、放心状態がぶり返す。症状は重症。道路上至る



処、横断幕、見ているだけで国、民族、文化、価値観、歴史といったもの大いなる違いを感じさせられる。関わっている人達は、数千人単位、いったい費用はどれだけ、手弁当でもあるまい、誰が、など貧しい思いに心が走る。こんなことに甘んじていいのかどうか。人々のあたたかい心やふれあいに、なんとも言えぬ、胸の痛みを感じる。

やがて太陽が真上に差しかかるころ、導象・ドウゾと象に引かれ、大菩提寺詣り。寺院山門の右サイド、『家なき護法の人、ダルマパーラーの立像』、そこに額かか付き、方丈と同行の大乗僧、献花、読経。ようやくひと段落、それとなく、導かれるまま、大祖殿に入堂する。

これまた祖堂一杯、信者とオレンジ僧、溢れかえっている。私の心は静思を求めている、しかし裏腹に正面舞台では、歌や民俗舞踊、さらには上座と大乘の融合。相対しダルマパーラー

に尊崇と感恩をこめ、上、大、和しての読経会。秒単位でスケジュールは流れている。最上壇、黒田方丈より、ウパティッサ大僧正に、木彫り日本仏陀像の贈呈。第二十回当地、留学僧に奨学金を授与するなど次々と各大臣の祝辞をいただきながら繰り広げられる歓迎の舞台。おわりはない、途中うしろ髪引かれる思いで旅団、中座する。

三時からという使節団最大のメインイベント。国際大会議場へと向かう、この建物スリランカ独立の父といわれる、バンダーラナーヤカ首相を記念して建設された、国内最大のものだという。途中、首相官邸をウパティッサ大僧正の案内で表敬訪問。首相と二十分間、交歓の時をもつ。

首相は方丈に対し、大旅団の来訪に謝意を示し、日本とスリランカは最も遠くて、最も親^{ちか}い国。同じ仏教国として共有共感を覚える、ダル



マパーラーにはじまり、彼のジャヤワルデネ大統領のことは引用しながら、今後も救け合う間柄を密にし、さらに国交を深めたい。方丈のサラボダヤ国際賞、またわが国の留学僧の育英に、多大な貢献を尽くしてくださったことに、感謝する。わが国の不幸な紛争も終結に向っており、安心して旅を続けていただきたい、と実に淡々と、多用な時間を削いで、歓迎いただいたことに感謝せずにはいられなかった。官邸を後にしながら、やつぱり、『使節団』なのだと言を正しネクタイをギュッと結び直す。

忙しいというは、心が亡いという。しかし全く食事する時間がない。こちらの都合で入場に差しつかえては、国の信頼に関わる。なんとなく急に徒事でない身辺を憂慮するようになっていた。方丈も基調講演のことが気掛かりなのか、原稿を開いたり、閉じたり、対話に事欠いている。近代的大会議場は三ヶ国語による同時通訳

が可能、方丈も安心して臨める。

ことざますなりと会場に入れるのかどうか、状況から、或いはと思ったりする。

間もなくだとガイド。広大な公園に入ったと思ふ瞬間、左手に高さ十五mもあるうかと思える大仏陀立像、それに相對峙、まさしく大会議場、囲われた垣根からは、およそ二百m。収容二千名というから、規模が窺える。バスを横付けする。入口正面道路沿い車窓からはみ出して、高さ五m、横二十mの立看板、黒田団長の肖像と『日本親善使節団のみなさん、スリランカにようこそ』と、シンハリ語に添え掲げられている。もうなながあってもオドロクことはない。さらに道路より会場まで、両サイド、民族衣装と、例の踊り子集団、ギツシリと手に手に両国の国旗を振りながら、祭り囃子の渦の中。おそらく数百、数千と思われる熱烈歓迎。やつぱりオドロイタ。喫驚仰天といふか、呆気に取り



れるというか、表現のしようもない。

ソロリソロリと揺れ動く親善使節団。蝸牛かたつむり一里の道も四里の道程のり。炎天下、一時間かけて漸く、会場のドアに辿り着く。会場内は全階全席、立錐の余地もない。怒涛のごとく押し寄せる拍手喝采。熱気に酔いしれる。ロック大会に行つたことはない。しかしそれを連想する。

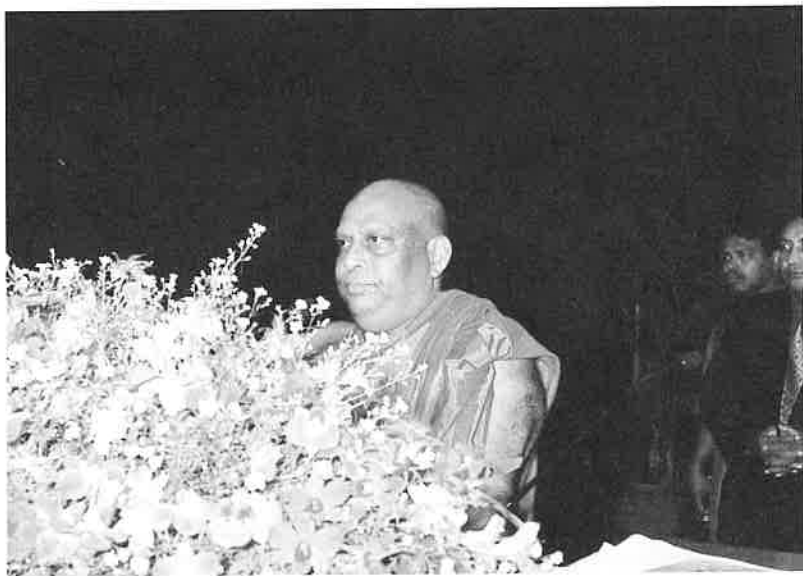
また、よぎる。この動員力と、費用はいつた、い、どうなる。それを察する余り感動と、気懸かりが錯綜する。国を超え、民族を超え、時空を超え、共感共鳴する曼陀羅の桃源郷。東の空、八千kmの隔りはない。あるのはまさしくグローバルレレッジ。地球はひとつの村という思いが、胸を衝く。交歓はすすみ政府・仏教界など各界ご代表の挨拶、歓迎、まことにプロローグは延々と続く。さらには数百名の上座部仏教僧侶群と大乘仏教、僧侶による融合の三千世界。舞台上はこれまた、三疊はあろうか、黒田団長の肖像

が吊り下がっている。その真下壇上に、報道各社カメラが囲み、いよいよ基調講演のスタート。待望の三ヶ国語による同時通訳、器材不良につき不能。よくあることです、すべてが大様。

直前に連絡を受け、関係者を狼狽させる。方丈に『サマーワンナ（ごめんなさい）』。どういたしまして（カマクナハ）、全く気にしない方丈。滔滔と演題『ダルマパーラーの贈り物』を説いてゆく。見事にパッケージされダルマパーラーの生涯、会場のひとり、ひとり、隅から隅へと届けられる。

そんなこともあるうかと、入場時全員の手許に三ヶ国語翻訳講演集が方丈より届けられている。四十分に亘る熱弁も、アーユーボワーン、アーユーボワーン、ボホームラストウテイイ。（どうもありがとうございます）合掌。

方丈だから出来た危機管理。安堵する。ついに、国交五十周年親善使節団の大義、これもっ



て無事終了。—のはずだった、しかし延々それから四時間。南十字星のもと、宵越しの明星まで、歓迎の夢舞台は続いていたという。旅団はスケジュールに刻まれ止むなく途中退場。サマーワンナ（ごめんなさい）。

さて方丈の基調講演の間、身動きしろうもせず、その横に居て、終始見守っていたひとりの僧。その風貌まさしくダルマのモデル。このダルマ大師（私はそう呼んでいた）世界的スリランカ国ペルポラ財団の総裁、ペルポラ・ヴィパシイ大僧正。旅団到着時より、帰国時まで、旅団からひとときも離れていない。連ねるバスの前後、運転手つき超高級車がへばりつく、旅団の代表、役員の方々が使っていた。

多分政府差し回しのものだと思っ込んでいる。最終日、ヴィパシイ大僧正の提供車だと聞かされ驚く、当然にして大僧は、旅団と共にバスの中。ところがこのダルマ大師、政府内だろうと

大寺院だろうと、行く処、敵無し。辺りを払うその歩き方は王像。旅団の露払いをいただく。

思うにスリランカで兵隊の位なら、元師か大将などと、ひとり値踏みしていた。これは慇懃無礼、私流許していただく。旅行中まこと畏れ多く、話すこともない。また、シンハリか英語だけでなく、ズーツと無言の行。いよいよ帰国時、VIPルーム。マイクを手に『サヨウナラのご挨拶』とまことに流暢な日本語、途端、私は肩の力が抜け、ダーツと疲れがでてきた。一週間もバスの中でご一緒して、まったく無視。車窓に映る、スリランカ事情や、風物に好き勝手な評をくだしてきている私、してやられたと後悔する。それならそうと、最初から言えば……。

私が書きたかったことは、こんなことではない。基調講演のすぐあと。多分飛び入りだと思う。司会席、マイクの前に仁王立ち通訳なしの大法話、身ぶり、手ぶりとは裏腹に、会場はシー

ンと聞き入っている。後にも先にも、通訳なしはこの時だけ、都度、日本名誉総領事、ネルソン氏、方丈付き日本からの通訳者、ウイリアム・ダンカン氏がその役を担っていた。この間全く通訳しない。ネルソン先生も聞き入るだけ。旅団も、仕方なく聞く。

やがて、日本語らしき、ガンバレ、がんばれ、と数回。これは旅団に対する激励。

期せずして旅団は反応する。拍手万雷。しかし会場からは全く反応なく深閑かみとしている。こちらの拍手が浮き上ってしまった。

いったいなんだったのか。気になる。

大僧正は訴えるように、叫ぶように閉じた。

結局、帰国するまで、内容について知る機会はなかった。それでも知りたいと思う。帰国早々、スリランカ大阪総領事を訪ね、ネルソン領事に収録したビデオを見てもらい、直訳を頼む。領事は躊躇。スリランカと日本の比較なんです、



そのままでは少し聞き辛いかもシレマセン。悪い意味ではないのですが、ただ同じ仏教徒として根本的に決定的に違うところがアルンデス。

私は言う、誰に気兼ねしているのです、日本人の良さは、外国から好き勝手言われ、それを、沈黙して聞く民族です、ご安心ください。そのまま聞かせて下さい。いやあヴィパシイ大僧正に許可をイタダキマセンと、またいう。私は申し上げた。何を言うのです、スリランカは、八千kmも離れています、すぐわかるものではありません、スリランカは遠いのです。どうぞどうぞとお願いした。

そんな時分割り込んで、ネルソン氏の携帯デーンワ。ハローハロー英語交じりのシンハリ語。ゴメンナサイ、トーゴサン、いまのデーンワ、スリランカのトモダチデス。デーンワは東京からですか。イイエ、トーゴサン。スリランカのコロンボです。どうして八千kmも離れているのに

電話が通じるのかなあ。そんなこんなで漸く……。

本題。私（ネルソン領事自身）について、日本に三十二年も滞在その間日本の経済学博士、名誉領事を務めながらあらゆる分野で活躍している。日本通において第一人者、私の兄貴分です。今日、私たちはお釈迦さまの愛と慈悲によって、日本とスリランカの素晴らしい親善の集いができました。使節団の皆様を心より歓迎したい。

いま法話をくださった、黒田武志大僧師は、スリランカの国際賞、サラナンダ国際栄誉賞と、唯一称号（ダルマ・ケールテイ・スリ・ローカルタ・チャリエ・仏教の発展と世界人類の幸福と繁栄に尽くした人）を受賞されている稀なお方です。また、スリランカと日本の間の留学僧に国を越え、二十年に亘ってその育英資金と人材育成に多大な支援と力を尽くし、日本を代表する、大僧師です。そして誰よりも、スリラン

カを愛し、スリランカの全てを承知しているといっても過ぎてはおりません。

日本は過去、いち早く欧米の文化を受け入れながら、そのままをとり入れず、それ以上のものを独自につくり上げ、世界で最も近代化の進んだ国です。そして模範的仏教国なのです。日本人は、また素晴らしい仏教文化と伝統をもっています。この特別先進国である日本は経済的に豊かな大国なのです。これは日本人の勤勉さと、秀れた能力によるものです。日本との関わりは、黒田大僧師のご法話の通り、アナガールカ・ダルマパーラーにはじまり、先の不幸な大戦で、日本は敗戦国となった、一方スリランカ（セイロン）は戦勝国となり、日本を戦犯として裁く側に立っていた。しかし存亡と危機。未曾有の困難の中にあつた日本を、救いたい一念から同じ仏教国として、御釈迦さまの教えのもと、全権大使、ジャヤワルデネ大臣（後、初代

大統領)は、愛と慈悲の精神を世界に訴え、各国全権大使を動かし賛同を得る、そして日本の国土は分割を免れ講和条約を結ぶに至ったのです。結果、日本は真の独立と自由を掴み、以後めざましい発展を遂げています。

年々歳々著しい経済成長と産業の発展は世界中の途上国に対し今日多大なる支援と援助を行っていることはご承知の通りです。これは一体どういうことなのか、私はいつも考えるのです。スリランカと同じ島国であり、仏教国という共通、共有するものを持ちながら日本は近代国家であり、経済大国。スリランカは、歴史的には日本より、早くから近代国家をめざしたにも拘らず、いまだ発展途上国だということです。

さらに大きな相違は『日本人は贅沢しながら、苦しんでいる』一方『スリランカ人は、経済的に苦しみながら、楽しんでいる』。これは私の比較論である。しかしこの違いは歴然としており、

50 Years of Sri Lankan - Japanese Friendship

BMICH - Colombo

9th March 2003



Pelpola Vipassi Foundation

実に不思議です。

スリランカは自然に恵まれ、天災、地変は日本に比べれば皆無に等しい、それに常夏だから、衣・食・住についても贅沢さえしなければ特に不自由がない。(頂度執筆中、テレビでニュース、スリランカに未曾有の豪雨被害甚大、死者多数。そんなはずは…) 一方日本は、自然に恵まれず(日本は四季折々自然に恵まれていると思っっている)、天災、地変、特に地震が多く、災害に見舞われ続けている。人口密度は高い、資源も乏しい、或る意味で、「生きる」ことが非常にむづかしい国である。だのに日本は発展し続け近代化において世界をリードしている。日本には『ガンバツテクダサイ』ということばがある、イチロー・ガンバレ、マツイガンバレなどいつでも、なんにつけても、ガンバレ。ガンバレ(旅団は耳なれた語に素早く反応、一斉に拍手した)と言う。





このことばによって日本は喚起し、新しい試みをし続けている。スリランカ（シンハリ語）には『ガンバレ』という意味に該当することばがないのです。いったい『がんばる』とはどういうことなのか、私は調べてみたことがある。

二十五年前、仏陀の教えの中に、自分を高めるために努力する、勉強する、その気概なければ、その人の成長は乏しい、というような意味のものを探し出したことがある。しかし、いまでも昔もスリランカにはこの語が存在していない、むしろガンバル必要はない、ということが長期に亘って浸み込んでいる。

あまりにも自然環境に恵まれ過ぎて、日々の生活はがんばらなくても、食べてゆけるといふことに在る。またがんばらなくても、『なんとかなるさ』という心がすっかり根付いているからである。つき詰めてゆくと、仏陀の教えに『欲望は苦しみ、悲しみを生む』パーリー語でタン

ハーヤジャヤテイソーコという教えが少なからず影響を与えているように思う。日本のガンバレも、意味するところ、『我を張る』と語源がなっている、それを見ると同じ意味でも時代と共に、国と共に、民族と共に、変化しているように思う。日本人の『贅沢しながら、苦しんでいる』ということは、或る意味で、仏陀の教えは正しいと思う。裏を返せば、スリランカ人には存在しないために、努力しない、努力しないために、経済的に豊かになれずに近代化できずにいる。

いまひとつ、日本には存在しないものがある。植民地、多民族という問題は持っていない。スリランカ人に『がんばらなくてもいいのか』と問えば多分『いいヨ、なんとかなるさ』と応えるに違いない。どうでしょうか。

私はあらためて問いたい。みなさんほんとうにそれでいいのですか。日本人はいつでも、大いなる心意気と、エネルギーとバイタリティー



をもっています。私たちはもっと日本と日本人から学び、同じ仏教国として助け合い、分かち合い、影響しあって、私たちが愛するスリランカの国を、子供たちを発展的に幸福に導いて参りましょう、そして世界にも貢献しようではありませんか。

今日のために、早くから準備をしてくれた文部大臣閣下をはじめ政府の各閣僚、僧界のテラワダーと長老の皆様にご心より感謝します。最後にこの親善交流使節団をスリランカに導いて下さった、横浜善光寺・黒田大先生とアジア文化協会、並びに各団体各御歴にどうもありがとうございますと申し上げたい。

合掌

概ね直訳いただいたものと思っっている。寺院、仏蹟を訪ねながら、車窓に流れる自然や生活風景を追っていた。スリランカは植民地の時代が終わり日本より五年も早く真の独立と自由を手

にしている。置かれた国土はお釈迦さまの生誕地から目と鼻の先、南伝（小乗）仏教の出発点西欧に最も近い仏教国、国語のシンハリは世界唯一、パーリー語（梵語ともいい仏教聖典に用いられた古代インドの言語）に近いという。

まさしく仏教先進国なのだ、期待しない方がおかしい。私の中に勝手な想像と、ある尺度がこびりついていた。

スリランカは世界でいちばん素晴らしく、仏教文化が花開いている国、期待はどんどん膨らみ、弾けるぐらい膨らみすぎて、自身なにか処理しきれないものがあつた。しかし、現実はずいぶん、経済的には決して豊かには思えない。

日本の常識的目から見ると、これでも仏教先進国なのかと、淋しくさえ感じてしまう。しかし何故か、人々の顔も、心も温かい。どこに行っても、モノ売りや押し売りが全くない。皆無とっていい、ここにはなんとも表現しがたい遠

く美しい「生き方」というものがある。行く先々であたたかく歓迎されればされる程、体が空洞化し素直によるこべない、挙句の果て悶々として帰国する。しかし空洞は未処理のまま埋められずなにか充ち足りない、なんとも言えぬ蟠りに心が晴れずにいた。

黒田方丈よりスリランカ事情を伺っていても、美しき流れの中で、お話いただくものだから、真の実態が掴みきれない。時折方丈に申し上げたこともあった。なぜスリランカですか、なにもそんな遠くまで渴仰かつこうしなくともいいじゃありませんかと、しかし訳していただいたヴィパシイ大僧正の話を伺い、この時点でもなにかも瞬時に吹っ飛んでしまった。あまりにスリランカ人と日本人を見事に表現されていることに覚醒した思いする。この時点で空洞は埋まり、完全に充たされている。スリランカへの旅は、悠久の流れの中の或る分点にめぐり合わせている。一

種のカルチャーショックと、知らなすぎた自分、恥入りながら書いている。

大僧正、さすが国際通、世界の中のスリランカを検証しながらあるがまま、自立、自助の精神に心を致し、宗教のみならず国の再興、再建を踏まえ、或る程度の近代化と経済的にも、状況を一変して、他の国を援助、支援、そして貢献できる国づくりをする必要があるのではないかと問いかけ、多分に政治行政の分野とは思いますが、血を吐く思いで、絶叫し提唱されているように思う。

かりそめにも、文化や伝統、自然をひっくり返してまでとは微塵にも言っていない。スリランカらしい近代化と変革、改革というものがあに違いない。

世界の中で『ガンバラなくてもいい』ところがあった。黒田方丈は、あまりに日頃『ガンバラすぎて』から、しばらくスリランカに移

住されたらいかかなものかと帰国したらご機嫌を伺いながら具申したい。国それぞれとは申せ、二千五百年も『欲望は苦しみを生む』という思想と信念、それを守り続けていることに感動を覚えると共に呆然とする。

伺えば、成る程成る程と思うことが重なってくる。たとえば自然保護区とか、動物保護区なるものは、スリランカが二百年も前に条例か禁令なるものを定めて保護している。その発祥の地だという。やはり普通の民族ではない。いままでこそ、自然保護、環境保護、動物保護区などで彼の先進国、近代国家が謳い上げ、躍起となっている。どうにも気づいた時は遅過ぎている。しかし状況はやらない訳にゆかない地球環境。手の施し様もなくなりつつある。ところがスリランカの人にとって保護は極(ごく)当り前、ガイドが言う、『人間は自然に保護されているのであって、人間が保護する』というだけそれた考えに立って



はいけない、あくまでも共存共生することが大前提なんだ』と言っていた。実に説得力がある。それでも共生することには危険がともなう。熊や象、ヒョウといった猛獣を人々は恐れはする、しかし危険排除のために殺すことは全く考えられないという。毎年相当数の人々が死傷する事故に遭っても、それは「宿命」として受け入れる、そんな諦観のようなものが働いているという。

人々の、仏教的な人生観や自然観というものが実によく表現されており、実際、移動している車窓に、猛獣類を見かける、バスを止めて待つ。或いは見せてはくれる。ガイドが外に出ないで下さいという。私に言わせれば人間が動物に飼われているような島全体が、『人間類二本足保護区』とでもいえるような思いがする。また、動物たちからは、この二本足で歩く不思議な種類を、面白がっているのかもしれない。そんな

ことを考えていると実にたのしくなる。

さらには日本や世界の先進国の間で不足している角膜提供の殆んどは、スリランカだという。アイバンクはいまでは当り前、この発祥はスリランカ、サルボダヤ（全ての者の覚醒）だというから、納得できる。

スリランカは多民族、それぞれ異質の文化や価値観、風俗、習慣、など違うのではないかと思う。しかし方向を共有し共存する基層文化というものが仏教的素地の上にかにも美しく根付いている。多民族は必然的に多宗教国家でもある。圧倒的仏教徒シンハラといっても、ヒンズー、イスラム、キリスト教など、さまざまな宗教と民族が融合する特定な聖地がスリランカにあるという。アダムスピークという山らしく、そこを全宗で共有し、宗教を超えて各宗教が巡礼するという慣習。

スリランカ人のフトコロの深さを感じる。先



の紛争、内乱など多分にほんの一握り、民族間（シンハラとタミール）の対立と抗争、紛争と内乱、これはスリランカには似合わない。どちらが支配するにしても、利益にはならない。共通の聖地、国家として方向を共有することが絶対条件。執筆中、六月九日〜十日、世界五十ヶ国と機関二十代表が日本に集い「スリランカ和平と復興会議」を開催、世界中から四十五億ドル。うち日本は十億ドルの支援を表明、大変な額である。一日も早く和平の道を開いて欲しいものだ。人々の平和な暮らしからは、想像もできない。

主な親善の行事を終え、やがてスリランカ中央部山岳地方、キャンディという都市を訪ねる。京都か奈良を思わせる古都。ここには無数の寺院が林立し、スリランカ仏教界をリードする。いわゆる仏教の中枢寺院、僧侶数十万人、信者一千数百万に対する情報発信基地。



歴代王家の子孫も、ここキャンディに住む。

殊に、靈驗あらたか神の如く、崇め奉られている仏歯寺。なんでもお釈迦さまの左の糸切歯がそのまま保存されているというから、お釈迦さまをほんとに身近かに感じてしまう。また歴代王位継承は、この歯の保持により、その権力を保ってきた。日本のご皇室も、何度かお訪ねになつていと聞く。

かつて王家の子孫だという方から寺院の案内と、仏歯についてその歴史を承る。そんな時分、一瞬周囲が総立ちになり、合掌低頭、なにかと覗いていると、両手に乗せられる程、可愛いといったらいけません、枯れてしまった、菩提樹のように、飄飄と、霞でも召し上つておいでではなかるうかと、まことムダのないプロポーシオン。並の修業でないことがひと目でわかる。それでも目は爛爛として、凜とした気魄、辺りを払っている。私は、息を呑む。咄嗟に、ああ、

ガンジーが生きていた、と叫んでしまった。無礼も度が過ぎている。このお方こそスリランカ仏界最高峰大猊下。

口々に運がよかったと手を合わす。大猊下は旅団を待っていたという。そしてご法話まで承る。ご三家二十一個の鍵が揃わねば開かぬ、開かずの扉。仏歯のすぐ近くに導くといったご褒美まで頂戴する。

大変なご利益をいただいた様な気がする。キツト残された旅団と善光寺檀信徒の人生にいいことがあるに違いない。しかし偶然に運がよかつただけではない。この淨福与えられたるもの、旅団に対するスリランカ仏教界のご尊慮、畏れ多く汲みとることができた。

さてスリランカの仏教事情。紀元前三世紀(釈迦生誕は前五世紀、日本への伝来は紀元後五世紀)というから、入滅後僅か二百年位で伝播されたことになる。いわゆる原始仏教(南伝上座

部仏教) 実に日本仏教と千年の隔りがある。その仏教も二千三百年の時を経て、紆余曲折、基本的教義は変わらなくても民族、社会、政治、風土、文化等の影響を受け、現象面では、あらゆる変化を来たしたものと想像できる。

民族間の比率はシンハラ系(インド・アリア系民族)が圧倒的、人口のおよそ七〇%、それがそっくり仏教徒だという。不思議なことで信者数が出る。日本は先ず不可能、数字が出ない、これが個人と檀家の違い。タイの九四%、ミャンマー(ビルマ)の八五%に次いで高い比率を保っている。

憲法でも国教化している状況が頷ける。スリランカで出家した僧侶は、妻帯しない。七歳で出家が許され、十歳で得度、断髪、見習僧を経て、成人の暁、資格が認められると、具足戒(ウパサンパダー)を受け、やがて正式な僧侶(比丘)になるという。教義の中心は、この世、す



べて無常。人生は苦(思い通りにならないこと)に満ちており、これを克服するには、現象としての一切は縁起によって成立。無我の境地から、すべての執着を捨てるのが肝要だと説いている。

上座も大乘も人の生き方や心を救済するという目的は同じでも、上座は出家中心であり、大乘は出家せずして究極のさとりに達することができるという違い。日本と同じ仏教だから仏陀の真理は変わらない。ただ二二七の戒律は、上座部仏教が、半端でないことを窺わせる。立つも坐るも、眠るも息することさえむづかしい。これに比べると、日本大乘仏教の僧侶の方々は九九%破門の憂き目を見ることになる。黒田方丈は、このところ実に見事に駆け抜け、独身時代上座仏教にも身を委ね、得度し二二七の戒律に護られ、行三昧。嫁とりや飲酒などその欲求と邪念払えず、突如また大乘に帰還、こちらあ





たり黒田武志独自に編み出す二刀流。原点、基点に身を致しながら希れな修行と免許の皆伝をする。善光寺留学僧育英会の発想も二二七の戒律に委ねる中での発願だと謂う。やはり並のお和尚ではない。その時々で随分呼称も変化する。私が知るだけでも雲水にはじまり、坊さん、行脚僧、比丘、開教師、生臭坊主、住職、方丈、名僧、老僧、高僧、大教師、間もなく長老。等々。一本の皴にも、つるつる天辺の輝きにも黒田武志団長の履歴と重みが表現されている。

さて、いまま少し、スリランカ仏教と日本仏教の、信者側から見た違いを、私なりに迫ってみたい。黒田方丈に大、小の違い、その在り方を尋ねてみる。実に滔滔とお話しいただく、ところがすぐ眠くなる。私は簡単に簡単にと、お願いしても、簡単なことをいつの間にか難しくされるものだから、途中で頓挫するのが常。どうも、仏教辞典には、シンプルという字がない。

これは方丈の責任ではない。仏教に対する私の基礎知識が乏しいための理由と、理解する能力がないことに起因している。しかしこのところを解決しない限り、仏教は過去のものになってしまう。お釈迦さまはそんなにも難しく説かれたとは思わない。難しくすれば偉そうに見られる仏教環境が、布教活動を阻害していることに気づくべきです。平均的一般的信者はわかり易い仏教を求めているのです。

スリランカの仏教は、原点は同じだといっても、現象面で、私には全く別ものに感じられる。寺と寺院、僧侶と比丘、檀家と信者。日本の僧侶は、衣の色によって階級が示されている。上座部比丘はオレンジ色、階級が全くわからない。仏教の原点はインドの仏陀。時間の流れに沿うよう、南方系（上座）、北方系（大乘）、チベット系（モンゴル）と伝播されて来た。それぞれ国々の中で南方、北方が、或いはチベット

系が混在していない。宗教の中で、この在り方は、仏教にだけ限られ、他の宗教には見られない現象。

こんなことは、素人の発想。学者や専門家の方々からは笑われると思います。あれこれと私は不思議なのです。例えば、キリスト教なら、プロテスタントとカトリック。イスラム教ならシーア派とスンニー派。ヒンズー教ならピシュヌ派とシバ派、というように国の中で混在し同居する。そして同じ国の中で、同宗、宗派間の抗争が絶えない。ところが大乘、上座は国単位でしか存在しない。勿論、国の中では、あらゆる宗旨、宗派に分かれてはいるが、大乘か上座仏教でしかなく、それから抜けられない。これには、なにか大きな理由があるに違いない、私にはわかりません。しかし天地自然を尊ぶ仏陀の教義が大きく働き、個人絶対崇拜とはここに決定的な違いがあるのかもしれないと私は思っ

たりする。勿論日本に、タイ、スリランカ、チベットの上座寺院がない訳ではない、存在している。ただ本格的な普及活動は、行われていないし、檀家制度と信者制度の壁は安易にとり外し融合出来るものではない。いづれにしても、布施、供養する習慣がないのも理由のひとつ。全ては大様な仏教の在り方が、それを疎外している要因と思う。仏教の在り方は、どうぞどうぞでも信者の熱意と真摯さは、仏教以外の他宗教には及ばない。説得力の乏しい仏教の弱さは日本の中に新興宗教を乱立させるゆえんでもある。

バイブルなど読んでさえいけば大概解るし、絶対神と信者の位置が歴然としているから、位置さえはつきりすれば簡単に、神の子になり、神と共にあり、神に従うという心は、自然に起きてくる。瞬時にでもそれは可能。しかし仏教はそうはいかない。お釈迦さまとの間に距離が



ない。従って立つ位置がわからない。余程な行と知恵がない限り、仏陀と共にという訳にはゆかない。このところ出家された方々が近づけてくださる。力と知恵をわかり易く与えてくだされば、仏教も違ってくる。また仏教以外の宗教は絶対神であって、それは超えられない。キリストの信者にはなれても、キリストにはなれない。絶対になり得ない。マホメットしかり、バラモンをも。なぜなら、神であり、絶対神だからです。

しかし仏教はお釈迦さま自身が私に並びそれを超えろと教えているように思う。私は神ではない、あなたと同じ仏なんだと言われる。だから難しい。

いま、申し上げているのは、私の考え方と、とり方です。これは実に不遜、傲慢、横柄、等々、あるだけ並べて、なお足りぬ態度です。

スリランカの仏教に学んで、私は悩んでしま

いました。原点は同じなのになぜ、こんなにも違うのか。日本の仏教は普及する段階で、説得力ある宗祖があの手この手を尽くし中国に出かけては教義の理解、その説き方を変えて来たのだと思う。どれがいい、悪いなど、解るはずもないし、言えない。また言ってもいけない。空海も、最澄も、栄西も、法然も、親鸞も、道元も、日蓮も、瑩山も、また諸々教祖といわれる方々も、理解と説き方が少しずつ変わるために、一派を興してしまった。否、興さざるを得なかった。この祖師方、空海と最澄は少し古く同時。他の宗祖六名の方々はほぼ同年といってもいい程に、時間的開創に差がない。いまより千年前その前後わずか百年以内のこと。おそらくその頃、日本は、精神文明の大きな曲がり角にあったのだと思う。

いまの世界も日本もまさしく混沌の時代、大きな曲がり角にあると思う。みんなが精神的に

疲れきってしまっている。私も高度経済の急成長の時代を体験し、物質的に豊かにはなった。それでも尚、充ち足りず幸福を追いかけ続けている。瞬間つかんでもまた追いかける。ついには心は疲れ、限りなく充足感がない。同時に未だ来ぬ先の未来に言い様のない不安すら感じている。この不安と疲れを癒すには、どうしたらいいのか。頂度千年前の日本がいままた巡って来たと思っている。たとえば温泉に浸かるとか、按摩をするとか、そんなことでは当然解決しない。癒す知恵の問題であることは、誰にでもわかる。

そこで仏教こそ、知恵の宗教だといっているのであるから、それを解決するのはいまこそ仏教以外には、力を發揮できる宗教はない。方法はひとつ、僧界も迷わず一点集中お釈迦さまの知恵を借り、やり直し、出直し、取り組み直す必要がある。道に迷ったらスタートに戻れとい



う諺があるように、まず原点、「宗祖を通して釈尊に還る」限りなくお釈迦さまに「近い位置」に戻って欲しいのです。

信者は、檀家は、癒し、導かれる時を待っているのです。宗祖になれるのはいまです。私が近い位置というのは信者に叶わぬ位置なのです。先にも触れたように、旅団がダルマパーラーの祀られている大菩提寺に詣った時、黒田団長に従い、仏陀像に向い、いまにも供養の読経（般若心経）を唱えようとした時、ドカドカツとオレンジ僧（おそらくテラワダーと長老、そして住職）数十名が旅団の前列に並び坐り、旅団に対面したのです。いわば仏陀像を遮る様になってしまった。旅団は仏像に対面し、お釈迦さまに感謝の誠を捧げようとしている矢先なんの断りもない。戸惑うというより、呆気にとられてしまう。おそらく旅団の方々も奇異に感じられたと思う。これが上座仏教。



大乘仏教では、高僧も、長老も、信者も、仏陀像に對面して、すべてを執り行ふ。止むなく読経。そして供養物や、お布施を供えようとすると、お釈迦さまが、手にされる前に、すべて横取りされてしまった。こちらの頼みごとでも、多分盗まれ、お釈迦さまに届いていない。犯人はオレンジの衣を着けた、断髪の男だと訴えたかも知なる。これでも仏教、原点は同じなのか。

いわゆる上座仏教の僧侶（比丘）は既に仏さまの位置に立っていた。これは日々二二七の戒律を守り、修行怠らず、自力で解脱し、（いわゆる輪廻からの脱却であり執着する心がない）苦や欲から全く解き放たれているということになり世俗の旅団とは、また大乘の僧侶とは位置と在り方が違うということを見せつけられたような思いがする。だから、上座部僧侶は信者より、足でも嘗められるように尊敬され、畏敬さえ感じられていることは当然であり、説得力のある

僧侶がそこに在るということをひしと感じる。私の『近い位置』とはそのことなのです。

よく方丈に『トゴ、オレを超えろ。犯せとも言う。坐ってみろ。いつまでも間違ったことを本当と思つて言つては超えられないゾ』と脅す。いま『近い位置』と書きながら、そのことかもしれないとひとり合点している。

機内で例のパンニヤラマ僧にあの手この手を使い、ワインなり、ビールなり、肉類を飲食させようと、意地悪をした。師はことごとく合掌してNoサンキュ。ワタシハ、クチニシテハイケナイノデス。という。じゃ、死ぬ前に、酒と肉しかないとすればどうする。ワタシ、シニマスと来た。さて日本の大乘僧、そうはいかない。死の間際オレにひと口、吞ませてくれ。これでも原点は、同じ仏教なのか。

このところ多分に比較する意味で書いている。大乘には五戒のひとつに不飲酒戒なるもの

がある。しかし、そこにあるもの、いただいたものはムダにしてはいけない。ただほどほどにという。大乘では、これを薬用であったり、叡智の泉であったり、また究極的、智恵、真理を知る尊いものとして、般若湯とも呼んでいる。仏界には、捨戒の便法を駆使する天才がいた。

大乘と上座の違うところは、戒と戒律の差。

また大乘と上座は、布教活動に大きな違いを見せる。大乘は他者救済（利他）を重視するのに対し、上座（小乗）は、出家者の宗教的完成を重視する。歴史的には、上座は先輩、大乘は後輩、従って上座仏教の布教活動は、信者対比丘（僧侶）、大乘は檀家対寺（僧侶）。経営的には大乘は家単位である特定の寺の信徒となり、寺はこれを檀（一段上に置く）信徒、檀家と称し、法事、法要、葬儀等を執りもってもらう。布施の名目で経済的援助を持続的に行う。従って檀家と寺は一体の関係。上座は、あくまでも個人



であり、信者が布施、供養のために僧侶（比丘）に援助する（援助は表現としてよくない。あくまでも布施）。わかっているようで、わからないところですよ。

いずれにしても、寺、僧侶と信者の間は、援助関係にある。一方通行は公安委員会の道路標識だけ。大事なことは、深く仏道を信ずるといふことが前提であり、安心と立命はその延長線上にある。だからお賽銭出さずして乞い願うは、盗人のはじまりなり、思いきって出す。

さて大概の方々が上座仏教圏を旅行され、仏陀像に対し違和感をもたれたことと思う。私も手を合わせ、ご利益があるように思えない。これは上座圏から来られた方も、日本の仏像に同じ思いをされていると思う。日本のわびさびに對し、金、銀、珊瑚に彩られた仏陀像。まずヘアースタイルが随分違う。

たまたまコロンボの或る名利を訪ねた時、樹

齡四百年とか五百年、なんでもインドにはすでになくお釈迦さまが悟りを開かれた処から移植し、これがその原木の子孫だという、そのご神木、菩提樹の下で、たまたまそこにあつたご仏像について、なぜ天辺が鋭角に高くなつてゐるのか尋ねた。住職は大きな声で、「ああ」、そこに落ちていた菩提樹の葉っぱを拾い上げ、頭の上に乘せ、仏像を指差したのです。

全く同じ型を見たのです。住職は言う、菩提樹は仏の化身、最も尊い祈りの対象だと合掌して見せた。私は間髪入れず、その一枚を住職よりもぎ取つて、ポケットにねじ込み、持ち帰つてしまいました。それからいいことづくめ、ドンドン懐が豊かになっていきます。

のち方丈に、「日本のご仏像の天辺は南部鉄瓶てつびんですか」。方丈、ああオレは運命が悪くなる。なぜですか。こんなバチ当たりを言う奴と一緒だと。でも方丈、あたまを、びんたというのではあ



りませんか。「方丈……。」

やがて丁寧^{ていねい}に教えてくださいました。お椀を伏せた様に二段になっている、あれは下の方が螺^ら髪^{はつ}といい上の方を肉髻^{けい}という。巻貝のような渦巻^{うずまき}は、すべて右回り。そこは広大無辺の仏の智恵。一杯詰め込まれているんですヨ。ホレ頭のいい人は螺髪^{らはつ}に指差して、グルグル巻くでしょう。お前左巻^{まき}だなどいわれたら、よろこべないんです。私はどちらですか、両方ですネ。トーゴさん頭は帽子の台ではないのですヨ。ハァー。さてぼつぼつ終盤にしようかなと思いつつ、仏教の知識がないと、馬鹿みたいなことに拘ってしまふのです。

ネルソン総領事に、いまいちどお尋ねする。スリランカは、自然環境の恩恵とその影響は承知しました。でも日々の生活でがんばらなくても食べてゆけるといっただけで、どうして満足なのか。ハイ、トーゴさん、そうです、贅沢は考

えないのです、がんばらなくても、なんとかかな
るといふことは、限りなく穏やかに、のんびり
と生きるということが仏陀の心に叶うと思ひ込
んでいるのです。ネルソン先生、あなたもそう
ですか。イイエ、ワタシ日本人デス。がんばら
なかつたら、今日にも死んでシマイマス。トー
ゴサン、郷に入ったら郷に従う、ガンバラナク
テワイケナイノデス、慣れるまで、三十二年カ
カリマシタ。私は安心致しましたと申し上げた。

さて人間には本来、神仏から与えられた定め
(運命) というものがあります。これを非常に
大事に思っているのです、どの様に転んでも仕
方がない。これは神仏の定めであり、試練だと
受けとめて生きる『生き方』が根底にあるんで
す。いまひとつ、『カルマ』、業というものを強
く信じているんです。或る行為というものは、
必ず結果をもたらすという理、いわゆる因果律
なのです。大乘でいう『輪廻転生』のことです。

だからなにがあつても、受けとめ、仕方がない
と思えるのです。ヴィパシー師のいう、裏をと
れば『笑いながら、苦しんでいる』とも言える
のです。

さあこれでは引き下がれない。人間には、生
まれながらにして、よくなりたい、いまよりよ
くなるために、なにをするか考えますヨ。よく
なる可能性を信じて、それはないのでですか？

どうも私には人間を放棄しているとしか思え
ないのです。という、決定的なコトバが返っ
て来た。『がんばる』ことは欲望を充たすこと
です。欲望を充たすことは仏陀の教えに違ふこと
になるのです。『結果は苦しみ、悲しむ』ことに
なるのです。だから日本人は『贅沢しながら、
苦しんでいる』といえるのです。ほんとうに私
にはムズカシイと思いました。ここどころが
理解できれば、上座は卒業。

それでも納得できない。大菩提寺のウパティツ

サ大僧正にデンワする、上座仏教の本(大要)を送って下さいと直接依頼したところ翌日、クロネコが飛び込んできて玄関にドサツと投げ入れてくれました。御蔭さまで、没頭できました。結果、『解らないということがようやく解りました』。実に恥ずかしい。肝心なことは私が瞑想修行。そして二二七戒律を遵守する、やがて解脱した時、輪廻から逃げられることが、解ったのです。直感で解るのです。解脱の時分は、ワタシガ、ツチノナカニハイッタ時なんです。

ネルソン先生のいう、『業』カルマと宿業、輪廻転生について、日本の仏典に、『業』は行為であり、同時に『力』だだけ示してあります。わかりません。そこで頂戴した虎の巻、スリランカの仏教学者、クマーラスワミ博士がビリヤードの玉に比喻し説いているのです。これは実に面白い、想像しながら御覧ください。突き棒(キュー)で突いた玉(例えば赤玉)が、エ

ネルギー(運動量)をともなつて転がりはじめ。あらかじめ前方に並べた玉(例えば白玉)にぶつかる。最初の赤玉は、その時点で静止する。赤玉の持っていたエネルギーのすべてが白玉に移行し、白玉が動き出す。白玉は次の玉へとぶつかる。そして静止する。ぶつけられた次の白玉は移行したエネルギーをともなつて、また次の白玉にぶつかる、静止する。また次へと動く。そして同じことをくり返す。

クマーラスワミ博士は、赤玉は現世の肉体、そして動くエネルギー(運動量)を『業』カルマ。業はわれわれの肉体が『現世において朽ち果てても』なおその力『業』は枯渇することなく『来世へと伝えられてゆく』、これが仏教の精髓であり、倫理的な因果律の理法(ダルマ)だという。

いわゆる悪因悪果、善因善果、輪廻転生とは、そのようなものだ、肉体が消滅しても、自身が

つくった『業』は次の存在へと移行するのだという、マコト二明解。面白くも、恐ろしい譬えだが、実にわかり易い。来世に生まれる私はいったいどうなる、心配になってきた。やっぱり、仕方がないと受け入れるか。

最後に親善使節団の使命とはいったいなんだっただのか反省こめて総轄してみたい。基調ダルマパーラーからの贈り物は、日本国と日本仏教の関わりを十二分に伝えている。

およそ五十年前、昭和二十六年敗戦後、連合軍の占領下にあった日本、この国をどの様に処理するのか、自由を与え、独立させるのか。実に日本の命運と存亡を分ける重大なサンフランシスコ対日講和会議。

日本の全権大使は、吉田茂首相。無条件降伏という屈辱のなか、理由や希望が許される状況ではない。すべて蛮行と決めつけられている。

ソ連の提案する日本分割、戦利品として戦勝

国の自治領とする案はすでにその内容も示されていた。われわれ承知の通り、北方四島は戦利品として勝手にとられ、いまだ還さないロシア（ソ連）です。いったい、北方領土という呼び方がなくなるのは、いつの日か。事態は日本がずたずたに切り裂かれ各国代表の思惑のなかに翻弄される。同じ敗戦国ドイツは既に分割され、東西ベルリンのその悲惨は長期に亘り続いていた。従って分割することは、状況として特別なものではない。（終戦時内閣書記官長迫水久常回顧録）

当時日本のアメリカ大使グループは、米大統領にマッカーサー元帥と共に、分割は日本の統治を困難にするとの意見書を提出、トルーマン大統領も無視できず、それにより賛否の決定を表明せず、検討に待つとしていた。戦勝国は四十五ヶ国、責任追及と賠償問題が絡むだけに方向は揺れ動いていた。（故、マッカーサーの回顧

録による)。

終戦間もなく(二十年九月)天皇がGHQにマッカーサー元師を訪ね、敗戦の将としての会見を求める。元師は平服で、出迎え奥の執務室で待っていたという。『天皇は命乞いに来た』と側近に語ったことを述懐している。天皇、裕仁は「戦争の責任は、すべて私にある。国民には一切ありません。この責任に対し、私はこの命を連合国に委ねます。願わくばこの命と引き替えに、貴国より日本国民に食糧を与え、飢えから救って欲しい」と、余りの申し出に、元師は驚愕し、思わず、オー、マゼステイ、自ら段を降り手を差しのべ握手した。(この時の写真は日本人の心情を思い永久に公開しないとのこと)私はあまりの感動に抱きしめ、敬愛の念を示したい衝動にかられた。自らの命を投げ出し、国民を救うという行為は、過去の世界の歴史になかったという。やがて天皇を玄関まで見送った、

と記録が公開されている。

このベースに、勝戦国セイロン(スリランカ)代表、ジャヤワルデネ大臣(のち初代大統領)ひとり日本擁護の演説に立った。そしてソ連案に真向から対峙、Noと高らかに宣言、ソ連案のすべてを拒絶する。

演説に仏陀のことばを引用、参加国に最大の寛容と慈悲の精神を求め、さらにセイロン国は被った損害に対し、その賠償と、権利を放棄する、そして一切を求むるものではない。日本に独立と自由を与え、分割させないという約束が整なわねば、条約に署名しないと結んでいる。今私は思う、天皇裕仁陛下の犠牲心、ジャヤワルデネ大臣の犠牲と勇氣こそ、仏陀の教えに通う尊い賜りもの、大臣はのち述懐する。

日本とわが国は、数千年に亘り共通の文化と伝統をもち、深い絆で結ばれている。われわれは、同じアジアの仏教国として日本を擁護する。

わが国も仏教国だから、仏陀の教えに基づいて行動したのみである、という内容をのこしている。これに対する尊崇の念は全権大使吉田茂をして帰国後最高の敬意を示し打電している。やがて日本は解放され、四十ヶ国以上の条約文を整え、ついに独立と自由を手にする。許されるはずのない日本。最悪を最善に導いた仏陀のことばは生きていた。たったひとことが、国と人々の運命をすっかり変えてしまった。そして復興へ。ついに世界一の経済大国までにかけのぼる。

この歴史的出来事は、日本人だからこそ均しく知る義務を感じてならない。いったいこの救世主について、どれだけの人が承知し、認識しているのか。実は私も、この旅団に加わるまで知らなかったのです。知る機会があったのかもしれない。しかし、その心がないから、見逃し、聞き逃してしまっている。これは自身にとって恥辱であり、悲しい。

ジャヤワルデネ大統領は平成八年十一月一日に亡くなっている。遂この前のこと。新聞各紙、対日講和会議の『憎しみは、憎しみによってやまず、愛によってやむ』との言葉を引用。吉田茂の回想録から、『ジャヤワルデネ、日本の知己ここにあり』を合わせ載せている。また入院中の大統領に対し、天皇陛下より、度々御見舞いの電報を打っている事実を拝読し、これは徒事ではないと実感する。

ところが、後日再び新聞各紙に、『ジャヤワルデネ元大統領の遺言日本人を救う』とある全誌掲載はされている。大概見逃してしまいたいような小さな記事。遺言は『私の角膜を日本人に』。遺言に従い角膜はすぐ空輸され移植、経過は良好。婦人、光の世界をとり戻す（群馬県桐生市）。

私も書くに当たり、限りなく資料を集めていた（殊にアジア文化協会の局長、上坂元一人先生の資料）。そこにこの記事。私は拝見しながら

嗚咽するとか、しゃくり上げ、どうしても、涙が止まらない。いったいこの方は、どこまで日本と日本人を救おうとしているのか。救っても、救っても、まだ足りない気持で救い続け、死んでも、尚、まだ救いの手を差しのべる。この犠牲心はなんなのか。

生前この方の語録に、『恩に報いるは人の道なり、恩を忘るるは人にあらず、恩は石に刻みて終生これを忘れず、怨みは水に流し、わが胸にこれを留める』。これは戦後久しくに亘り、日本からの支援、援助とODAに対するものであったと示されている。同じく、日本も鏡に向うがごとし、恩に報いるは人の道。私はあらためて『業』カルマというものの実態を見たような気がする。(尚、スリランカへの最大援助国は日本だどこに行っても耳にした)。

私の感動を筆に乗せることはできません。なんと、もどかしさを感じる。人の道、人の生

き方というものは、神仏、聖人の示す、標準、道理に従う以外、解決の道はないことを教えていただいた。

道元のいう、自未得度先度他の心、自分が未だわたらざる前にまず他をわたさんとする菩提心。これが愛であり、慈悲であり、仁恕、万人の心の奥にひそんでいる万国共通の尊く美しき心。この心を引き出すのが宗教であり、道に携わる僧侶の使命。そして宗教の目的だと思う。また人間の「理想」なのかもしれない。

私は書きながら他人ごとのように、或る先入観や偏見にとらわれ、熱慮じゅうりょのないままに、ここまで来てしまったように思う。反省する。

人間知らないことを知るまでにはずいぶんの時間と労力を必要とする。いい加減では、知り得ないということを感じする。知らず知らず、使節団となり、身に備しない歓迎を受け、身に余る旅団からの好意をいただいた。さらには、

黒田方丈団長が、スリランカを頭上に戴き、敬い慎んで、足を運び、留学僧を受け入れ、さらにスリランカに派遣し続けて来たのか、歴史認識と、その関わり、敬意を踏まえての行為行動。そしてひとり報いても報いても、なお報い足りぬ心で報い続け今日にあった。そんな事を、よりやく理解し、認識する。黒田方丈の尊い心、露知らず、わたしホントに馬鹿でした。方丈の真の底は仲々わからないのです。やはり、黒田武志方丈は、近世稀な、大化け物。

あとがき

出発の日、三月八日、慌ただしい世界情勢。中近東は戦雲垂れ籠め、アフガニスタン、イラクの戦場がインド洋、ペルシヤ湾岸沿いに展開中、まことに不穏な状況下、テロの危険サインもA。刻々と時間読みの段階に入っていた。さらにはアジア南西地域に得体の知れない新型肺

炎、大流行の兆しとか。いったいこれでも向うのか、団長も思案に焦がれているに違いない。

成田で、方丈大丈夫ですか。『大丈夫、弾は届かない、肺炎はハイハイエン人に移る病、この旅団、素直な方ばかり。ハイハイと。だから心配いりません』。嗚呼!!全く不感症という病。その通り、すべては帰国してから事態は急変、予想以上に深刻だったようだ。いかにも災い転じて、憂いなし。

旅行中、宿泊は、シングルないし、ツイン。これは希望による。

ツインは旅行社の偏見により、組み合わせされる。通知後は変更不可との達し、良し悪しは、時の運、『業』の世界。私は中外日報社形山支局長と寢室を共にする。旅団きつてのクール人間と、これ又熱烈人間のペア。夜な夜な討論し激論に至る。最後に私が水をブツかけられて沈没するというパターン。想像を超えている。機内

といい、部屋といい、私はなんと運がいいことか。『行くところ、必ず師有り』。すべてに勝るお方、よく人材というが、その通り、報道界の逸材。その博学たるや、動く宗教界の図書館、宗教界を分析、分解、方向づけに至るまで、ここまで識るかという程に、企業秘密を除外して、その残りの知識を頂戴できた。授業料は無料、私の献身的、湯茶接待のもてなしに、すっかり油断していただく。お蔭でこの旅行記も、スイスイと書けている。頭は帽子の台ではありません。

さてスリランカ出入国時のフリーパス、帰国時、成田空港審査官に旅団のひとり、ご婦人が引っ掛かる。さあ大変、「アナタハ、ドコニイツテ、ドコカラエツテキタノカ」。スリランカでの査証もれが生じている。一時混乱したものの、方丈と旅行社の方が事情を説明、ようやく通過する。総理でも、こんなことはなかったという。



結局、グルグル回る人工衛星の前例にならない一週間、空中を彷徨さまよっていたという、大岡のお裁き、事無きを得る。これは実際、笑えぬ事実、フリーパスという大様さに、ご婦人のスリランカ訪問は、記録と証拠は隠滅、従って実績なし。

五月十日、善光寺開創三十五周年、留学僧育英会設立二十周年記念の大法要、大本山総持寺で挙行。その節、彼の大菩提寺管長、ウパティツサ大僧正と、ペルポラ財団総裁、ペルポラ・ヴィンサイ大僧正が、スリランカ日本大使を同道、わざわざのご臨席、大乘の総本山に上座仏教の大僧正、平成の大融合でした。私はこの機捉えて、大僧正に直接先の国際会議場での通訳なしのご法話、ネルソン領事翻訳によるものを使わせていただきたいと申し出る。大僧正は、プリーズ、カマク・ナハどうぞという。それにしても、私の思っていたスリランカは、遠くなかった。旅行も、すべて予定通り、なにひとつ障りなく、

全員無事元気で帰国できた。これすべて「仏天加護の御蔭」。と真に思えるなら、急性横着上座仏教感得症として認定。仏陀のもと、さらに絆も深く、親善使節団の役割、全うできたように思う。

方丈のことばを借りるなら、「お蔭さまでお蔭さまで、いい旅でしたハイハイ。」ただひとつ私個人的に残念だったのは、折角のスリランカ、せめて、「インド洋の真珠」でも、ひと粒おなかどのに買ってくればよかった。帰国の夜、味噌汁の具がまた、ひと品違っていただろうに。すべては、アーユ・ボーワアン。



生活仏教の諸相

駒沢大学名誉教授 文学博士 佐々木 宏幹

二〇〇一年三月、アフガニスタンはバーミヤンの世界的に著名な巨大石仏二体が、イスラーム・タリバーンの手により木端微塵に爆砕された。

一体は五五メートル、ほかは三八メートルのかの仏像は、五世紀頃の作とされている。私は一九七〇年八月に現地を訪れ、大仏を拝する事ができたが、すでに顔面は削り取られ、両腕や脚部もかなり破壊されていた。

偶像を認めないイスラームによるものであったことは言うまでもない。

七世紀半ばにかの地を訪れた玄奘三蔵は、大仏は黄金色に輝いていたと記している(『大唐西域記』)。

バーミヤンの大仏が爆砕されたとのニュースは、世界の人びと、とくに仏教徒にとって大きな衝撃であった。心ある人びとは、国際紛争という現実の厳しさを痛感させられた。

時がたち、あのショックな事件を冷静に振り返ることができるようになると、人びとは破壊された世界的な文化遺産の今後をめぐり、

声を挙げ始めた。

その声は大別して二つあったように思う。

一つは、粉碎された大仏は「そのままにしておくべきだ」との声であり、他は仏教文化遺産として「復元することが望ましい」との主張である。「現状のままにしておくべきだ」という見解を述べた人のなかに、たしか平山郁夫氏（東京芸芸大学長）もおられたと思う。

平山氏と同じ見解に立つある識者は、仏陀の教法の特質は「形あるもの（造られしもの）は必ず滅す」というところにあるのだから、粉碎された仏像に「こたわることはない」と述べていた。

他方、大仏復元を望む人たちは、永いあいだ信仰対象であった大仏が破壊されたままになっていることは仏教者として耐えられないと主張していた。

いま、世界的に有名な大仏が破碎されたこと

をめぐり、わが国の識者たちの二つの異なる声
「見解・主張を取りあげたが、ここでこれら二つの声のいずれが正しいかを論ずることは、少なくとも「仏教文化」生活化された仏教」という視点から見ると、あまり意味がないように思われる。

なぜなら、一つの声は「諸行無常 是生滅法」という仏陀の悟りを基盤として挙げられているのに対して、他の声は仏像を衆生救済（済度）の信仰対象として拝みかつ祈る立場から発せられているからである。

ところが仏教を宗教（人びとの苦（悩）の究極的な解決を目指す営み）として捉えようとする限り、これら二つの声は決して別個のものではなく、両者共に必要不可欠の見解・主張であるとしなければなるまいからだ。

前者は「一切皆空」を説き、「おのれこそおのれのよるべ」の自覚を教える。後者は「海衆安

穩”を願ひ、”三宝、俯して照鑑を垂れたまえ”とひたすら念ずる。

かつてバーミヤンの地に巨大な黄金色に輝く仏陀の像をうち仰いだ人びとは、心から生活の無事や旅の平安を祈り、”力”をえたにちがいない。いま瓦礫と化した仏像の姿を目にした私たちは、仏陀の説かれた”空”の真理をただ厳肅に受けとめるのみである。

今後人びとは仏像や仏塔を造り続けるであろうが、造られたものは所詮滅しざるはずである。

しかし、滅しざることを知りながら、人は仏像を造らないではいられない。色即是空 空即是色の相であるといえようか。

◇ ◇ ◇

世の中は理念や建て前にこだわらずともうまくいかなしいし、逆に現実や本音にかかずらいすぎても駄目という常識がある。ではどうすればよいか。色即是空 空即是色は根源的な答え

であろうが、これを解説しだすと、くどくなる。そこである仏教関係のシンポジウムのやりとりを事例として、”理念と現実”の問題に迫ってみよう。

本年二月に京都で全日本仏教青年会主催により、”葬式仏教”を考える―日本仏教活性化への道―というシンポジウムが開かれ、基調講演の後、四人のパネリストによる討論が行われた。私はこのシンポジウムに出席していなかったが、ノンフィクション作家の井上治代氏が講演と討議内容を概括的に紹介しているので、以下では私が重要と考える部分を引用することとしたい（井上治代「葬式仏教を考える―仏教再生の道を探る―」、『法然』第一二号、浄土宗報恩明照会、二〇〇三）。

基調講演は仏教思想家のひろさちや氏。氏は葬祭の本質に触れ、「怨念を鎮める」とか「たたる靈魂」などを仏教は認めるかと問い、「仏教は

もともと靈魂の存在を認めない。悲しまず死者を忘れるという教えだ」と述べ、僧侶が葬儀を行うことに否定的な意見を語り、仏教者として仏教の原理をきちんと説くことが、仏教を活性化させる道であると強調した。

基調講演を承けてまず井上氏は、現代の家族構造の変化を述べ、「夫婦のみ」と「独居」世帯が全体の半数を占めるのも間近であるとし、「個が尊重される生活が保障されなければならない社会に突入した」と説いた。

そして檀家制度に固執する寺院のあり方に悲観的な見通しを述べ、「檀家制度は保険として残しつつも、並行して個を単位とした活動をすべきだ」と語った。

つぎにフォト・ジャーナリストの藤田庄市氏は、新聞社が一九七八年から毎年行っている国民意識調査をもとに、「宗教は国民の八割から相手にされていない」（朝日新聞、二〇〇三年一月

八日）とした上で、しかし「宗教に関心がないという層は、新しい布教の沃野であり、伝統仏教の僧侶が信心決定していることが最重要である」と述べた。

臨済宗・神宮寺住職の高橋卓志氏は七百軒の檀家のほかに「尋常浅間学校」を主宰し、千二百人を超える会員をもつ情報誌『僧伽』を年四回発行。購読料（三千元）が寺のスタッフを雇う財源になっていると述べた。

他に寺院スペースを活用し、「極楽倶楽部」と呼ぶ老人のデイサービスを行い、さらに浅間温泉で高齢者向けのグループホームの運営にも乗りだしており、「お坊さんは、やりようによっては無茶苦茶に面白い職種である」などと説いた。

この高橋氏の話にコメントを求められたひろさちや氏は「政府の仕事を坊さんがしなければならぬ」と思っているのではないかと。坊さんの原点は世間から離れたところにある。坊さんは

寺の庭掃除をしていけばよい」と言い、僧侶はどこまでも世間の常識を離れた「出世間」を生きるべきだと主張。

翌日には前日のシンポジウムを踏まえ、三つの分科会が開かれ、パネリストと参加者が直接意見を交換し合った。

最後に二日間にわたる研究会を総括したひろ氏は、自分は仏教原理主義者であると立場を明示した上で、原理主義に対立する概念が都合主義であり、このご都合主義は理想主義と現実主義とに二分されるとした。

そして、藤田氏は原理主義的、高橋氏は理想主義的、井上氏は現実主義的と位置づけたのち、「仏教は釈尊の教えであり、仏教者は原理に立ち帰るべきで、社会の事象に関わるのは、僧侶の仕事ではない」と結論づけた。

◇ ◇ ◇

全日本仏教青年会が主催したシンポジウムの

議論は大要以上のとおりだが、これを現代仏教論として私なりに捉えなおすと、つぎのようになろう。

(1) 僧侶は社会活動や葬祭などに関わるべきではなく、釈尊の教えに帰り世間から離れて生きるべきだと説いたひろ氏の立場は、「原理主義的仏教論」であることは明らかだろう。(2) 僧侶に必要な不可欠なのはみずからの信心決定であり、決定心があれば、無宗教的に見える現代社会は、実は「布教の沃野」であると述べた藤田氏の論は、「信仰中心的仏教論」である。(3) 現代の社会構造の急激な変化を見据えた上で、伝統的な檀家制度は残しつつも、これと並行して個人の信仰開発に努めるのがこれからの寺院・僧侶のあり方だと語った井上氏は「社会・民俗的仏教論」的な立場を踏まえているように思う。これに対して、(4) 寺院住職として在来の寺檀関係的な活動のほか、会員制の仏教学校や老人向けのク

ラブやグループなどの運営を積極的に進める高橋氏の主張は、「社会活動的仏教論」とでも言うべき性格をもつ。

仮に以上のような仏教論の分類が可能であるとして、これら四つの仏教論を前にして、「仏教活性化」のためにわれわれはどう考えたらよいのであろうか。

私が本稿のタイトルとして掲げた「生活仏教」、つまり「人びとの生活のなかに生きる仏教」という視点に立てば、これら四つの仏教論のいずれもが意味をもっているということになる。生活のなかの仏教は、教義（宗旨）だけで成り立っているのではないし、社会活動重視に傾くだけでも不十分であろう。

生活仏教の現実の相は多様な局面・要素から成っているからである。それはまさに「諸相」と捉えるのが妥当であるような状況にある。

「釈尊に還れ、祖師に帰れ」という立場（1）

はきわめて重要であるし、そのためにはみずからの信仰や帰依の心が堅固であるべきこと（2）も言うまでもあるまい。しかしそうであるからと言って（3）や（4）の立場や論を無視せよということにはならないのではないか。

生活仏教の「現場」にあつては、過度の単純化は不毛かつ無意味であるとさえ言えようからだ。

長い間仏教論は建て前を強調する教理仏教論と、民衆の宗教生活に根強く存在する仏教民俗を重視する仏教民俗（又は民俗仏教）論とが、交錯すること少なく展開されてきた。教理仏教論は仏典・祖録を根拠に理念と原則を説き、これに対して民俗仏教論は地域社会の宗教習俗や慣行と仏教の理念とが習合した形で成立している葬祭や祈祷儀礼にこだわった。

前者は無常・無我や縁起の思想なくして仏教と言えるかと主張し、後者は文化の地域性や民俗性に基づく霊や力に関わらずして人びとを惹

きつけうるかと反論してきた観がある。

さきのシンポジウムでも「仏教はもともと靈魂の存在を認めない。悲しまず死者を忘れろという教えだ」(1)は前者を代表しており、対して「日本仏教には特有の歴史がある。社会の現象に目を向けない僧侶のあり方は、寺院の将来を危うくする」(3)は後者を代弁していると言えよう。

宗教(仏教)文化の研究者たちは、こうした対立を「テクスト」(教義・理念)と「コンテクスト」(社会・現実)間の深刻な問題と捉えた。そして大事なものは理念か現実かといった二者択一的論議ではなく、理念と現実、教義と民俗とが重なり合い、反発し合い、混じり合う「ダイナミックな場」であるとした(たとえばM・M・エームズ「仏陀と踊る靈魂」、『アメリカン・アンスロポロジスト』六六、一、一九六四)。

この宗教(仏教)における「ダイナミックな

場」の研究は、実はまだそう深められていない、新領野であると私は、考えている。

この領野が深まれば、さきに引用した事例の(1)、(2)、(3)、(4)のどれが正しいかではなくて、寺院の「生活仏教」にあつては四つのそれぞれが複雑に絡み合いながらダイナミックな「場」を作りだしていることが明らかになるに違いない。誤解されるといけないので一言付け加えておこう。仏教が仏教である限り、(1)の立場は不可欠であり、仏教者の目標である。問題は(2)、(3)や(4)の位置づけにある。現実には(2)、(3)、(4)が(1)を支えているという局面を見落としてはなるまい。もう一度最初に戻ろう。バーミヤンの大仏は破壊された。それは生滅の法の真理性をわれわれに如実に見せてくれた。しかし、その真理性を十分承知しながらも、人びとは大仏再建を企図せずにはいられないのだ。「生活仏教」とはそういうものである。



くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻—— その九

成興寺住職 小倉 玄 照

〈本文〉

釈迦牟尼仏かたじけなく迦葉尊者に付属面授するにいはく、「吾有正法眼蔵、付属摩訶迦葉」とあり。嵩山会上には、菩提達磨尊者まさしく二祖にしめしていはく、「汝得吾髓」。

はかりしりぬ、正法眼蔵を面授し、汝得吾髓の面授なるは、ただこの面授のみなり。この正当愆^{とういん}時、なんぢがひごろの骨髓を透脱するとき、仏祖面授あり。大悟を面授し、心印を面授するも、一隅の特地なり。伝尽にあらずといへ

ども、いまだ欠悟の道理を参究せず。

およそ仏祖の大道は、唯面授面授、受面授面のみなり。さらに剎法^{じょうほう}あらず、虧闕^{きけつ}あらず。この面授のあふにあへる自己の面目をも、随喜歡喜、信受^{ぶぎょう}奉行^{ぶぎょう}すべきなり。

道元、大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて先師天童古仏を礼拝面授す。やや堂奥を聴許せらる。わづかに身心を脱落するに、面授を保任することありて、日本国に本来せり。

正法眼蔵 面授

爾時、寛元元年癸卯十月二十日、在越宇吉
田峯吉峰精舎ニ示衆。

〈現代語私訳〉

釈迦牟尼仏は、尊くありがたいことに迦葉尊者に眼から眼へ一切を伝えて仰せになった。

「わたしのいのちの本質（正法眼蔵）は、すべて摩訶迦葉に伝え了った」と。またそれが中国に伝えられて、嵩山の修行道場にあつては、菩提達磨尊者が二祖慧可に向つてはつきりと「汝は、わたしの真髓をものにした」と言われた。

これらのことから推量するに、いのちの本質たる正法眼蔵を師から弟子に伝え、或いはいのちの真髓を弟子に得させるのも、すべては面授によるのであり、面授以外にはそれは不可能である。まさにその機が熟するに及んで、なんじのふだんの精進修行の自負心がさらりと抜けおちた時、仏祖から仏祖に面授され伝えられてき

たものが面授されるのである。大いなる悟りを面授し、いのちの本質を面授するのであるが、からだのほんの一部が特別の意味を持つていてということだ。もちろんそれですべてというわけではないが、さとりに欠けたところがまだあるのではないかとそれを求める努力をする必要はない。

およそ仏祖の大いなる道は、ただ面で授けて面で受ける、（表現を換えれば）面を受けて面を授ける、ということにつきる。それ以外には余分の法はないし、それで何も欠けたものはない。このような面授に出合うことのできた自己の誇りに満ちた顔をありがたく思つて大いに歎び、大事に修行生活を続けなければならぬ。

わたくし道元は、大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて今は亡き先師天童如浄古仏を礼拝し、面授を得た。その後、特に親しく室中に入つて指導を受けることを許された。かくして、いさ

さか身心すつきりとし、面授の重みをたしかなものとして保ちつつ、日本の国へ帰って来た。

正法眼蔵 面授

その時、寛元元年十月二十日、越の国、吉田県吉峰精舎にあって衆に示した。

迦葉の面授、慧可の得髓

摩訶迦葉は、梵語マハーカーシャパ (Mahākāśyapa) の音写です。マハー (摩訶) は「大」という意味ですから、大迦葉とも言ったりします。迦葉は姓です。

釈尊の時代のインドの大国マガダ国(摩揭陀)の首都ラージャグリハ (王舎城) の近在のバラモンの家に生まれたと言われています。バツダー・カピラーニー (拔陀迦毘羅) と結婚したが、同衾することはなかったと伝えられています。そしてついには、妻と共に出家し、釈尊の弟子と

なりました。十大弟子の中では、頭陀第一と称せられました。頭陀行というのは、あらゆる執着を捨ててひたすら仏道を修行することです。

衣は糞掃衣(捨てられた布を活用)。食は、常に乞食によるものを一日一食。住も樹下露地等を転々として過ごします。「頭陀第一」ということは、つまるところ、釈尊の説かれた修行法を忠実に実践する点においてこの人の右に出る者はいなかったということです。それゆえに、迦葉尊者は、釈尊のいのちの本質(正法眼蔵)を正しく受け継がれたと禪門では信じられているのです。

中国の第一祖達磨尊者は、伝えられたいのちの本質を二祖慧可大師に伝えられました。そのありようを、『景德伝灯録』等によってみてみましょう。菩提達磨がある時、門人たちに現在の境涯を尋ねます。門人道副の所見は、

「文字にとらわれず、文字を離れず、しかも

大いなる道の用をなしている」

というものでした。それに対して達磨は、

「汝は、吾が皮を得た」

と評しました。次に尼僧の総持は、

「東方世界の阿閼佉の国土を慶んで見たのに、

その後再びそこを見たことがないというようなところか」

と。達磨は、その答について

「汝は、わが肉を得た」

と評しました。次に、道育が言いました。

「地水火風は、もともとと空であり、色（物質）
や肉体）・受（感受作用）・想（表象作用）・行
（意志や記憶）・識（認識作用）も、存在するもの
とは言えない。それゆえに、私の見るところ
は、一切何も得るところは無いとでもいうべき
か」

達磨は評して言った。

「汝は、わが骨を得た」

と。最後に、慧可は、ねんごろに礼拝を三度
行じた後に、立つべき位置にすくと立った。
それを見て達磨は言った。

「汝は、わたしの髓を得た」

と。これによって慧可は二祖として認知された
と伝えられています。達磨のいのちの本質は慧
可に伝えられたのです。

このエピソードの読解は相当にむずかしい。
道元禅師は『正法眼蔵』葛藤の巻で、

「達磨さまは、四人に対して、皮・肉・骨・
髓と、それぞれに異なったからだの部位を示し
て評価を与えたのだが、いずれも祖師の道に添っ
ているのである。四人の門人は、それぞれに立
派な生き方であり、達磨さまの説くところをちゃ
んと聞いている。その聞くところ、或いは会得
したところは、ともにさすが身も心も打ち込んで
修行する者の皮であり、肉であり、骨であり、
髓である。身や心に関して一切のこだわりを離

れた皮肉骨髓である。自分の浅はかな判断で祖師の生きざまを誤ってはならない。問答のあれこれの断片的表現では十分にはわからない点があるのである。

それであるのに、正しい修行を努めていない連中は、四人それぞれに述べたところに浅深があったので、達磨さまもそれに見あうように皮肉骨髓をあてて評したのだと考える。つまり、皮や肉は、骨や髓に比較して軽く、表面的だと考え、二祖慧可の見解がきわだって優れていたから「髓」を得たという。このように考えるのは、いまだかつて仏道修行の何たるかを知らないものであり、正しい修行に身を任せていないものである。」

と述べておられます。修行の程度を皮肉骨髓によってランク付けしたものではないというのです。皮肉骨髓のいずれをとってみても達磨さまの身心そのものであって、真髓とか皮相とか

いう俗な表現にまどわされてはならないのです。

面は人間関係の要

ところで皮肉骨髓などという身体の一部を取り上げて、身心の全貌を象徴させることが可能なのだという「葛藤」の巻における道元禅師の見解は、ではなぜ「面授」が特別に重視されなければならぬのか、という疑問を私たちに抱かせます。達磨さまに対する二祖慧可の場合も、礼拝すること三度^{みたび}、その後、定位置に立ったというのですが、礼拝のたびに立ち上がって慧可は達磨さまの「面^{かお}」を見る、定位置にすつくと立ってまた「面」を見る、そのことをとても重視しておられるように窺えます。「唯面授面受、受面授面のみなり」という表現は、皮肉骨髓もさることながら、いのちの相続においては、「面」がすべてであるという印象を受けます。

この点については、かつて高校の国語教科書で読んだ和辻哲郎の『面とペルソナ』というエッセイを思い出します。たしか、全文が教科書に収載されていたように記憶しますから、とても短い文章です。その説くところは、「人」を表現した肖像彫刻が破損してトルソーとなった場合は「断片」と化すが、胴体から離れた首は「人」を表現して胴体や手足までイメージさせることが可能だという問題提起をまですす。そして伎楽面や能面を例に上げて次のように言います。

「人を表現するためにはただ顔面だけに切り詰めることが出来るが、その切り詰められた顔面は自由に肢体を回復する力を持っている。そうしてみると、顔面は人の存在にとって核心的な意義を持つものである。それは単に肉体の一部分であるのではなく、肉体を己に従える主体的なるものの座、すなわち人格の座にほかならない。」

そして、西洋でも、劇に用いられる面を意味したペルソナが、転じて劇におけるそれぞれの役割を意味し、さらには劇中の人物をさす言葉になると指摘します。もちろん、このペルソナの用法は、劇を離れて現実の生活にも通用するようになります。そしてついに、ペルソナは行為の主体、権利の主体として「人格」の意味に転化します。つまり、「面」が「人格」そのものを意味するようになったわけです。

この論考の中で大切なのは、「面」を意味する「ペルソナ」が、劇における「役割」を意味する言葉になったという点ではあるまいか、と私には思われます。「役割」というのは、面と面が向きあうことによって生きてきます。つまり人と人との関係性の中に於て初めて「役割」が意味を持つのです。

その点に思いを致す時、自分の面（顔）の特質がはっきりします。自分自身の面は、自分に

は決して見えないのです。なるほど鏡に対する時はそれを見ることが可能です。しかし、厳密には左右反対に映った姿はそれがそのまま自分の面というわけにはいきません。想像力によって自分の面をイメージしているだけです。

「鏡をもたない通常の生活に於ては、自分と関わる相手の表情を読みとることによって自分の面を想像するのです。そういう点を考慮に入れますと、「面」は自分一人が孤独に生活している限りは、皮肉骨髓などの他の身体の部位と対等の関係にあると言えるでしょう。

「面」が重要なのは、他との関係に於てなのです。電車に乗って、向かい側に一列に坐した人々を見ます。それらの人々はおしなべて無表情な面相をしています。まさしく能面のような顔に見えます。電車の乗客たちは、あえて他との関わりを持つことを拒否しているがゆえにそうなるのでしよう。

このごろ、私の周辺で他人との関わりを持つことを苦手とする人が目立つようになって来ました。いうなれば「役割」をはたすことを自在にこなせない人たちです。これは、豊かさの中で生を受け、豊かな生活環境の中で、幼少期から大人になるまで、自ら積極的に他と関わりを持つとうと努力しなくても生きてこられたことが原因かもしれません。もっと端的に言えば、生きぬくための「役割」を分担しなのまま勉強だけをして、成人したことが問題なのです。或いは、テレビゲームやインターネットなどの機器を相手に育ったことがその大きな要因なのかもしれません。

ともあれ、人と人との関わりを持つことが苦手の人は、社会生活の中で「役割」をはたすことに尻込みします。そういう人の「面」は、必然的に美術館に展示された能面の相に近づくのではないかという気がします。

「この面授のあふにあへる自己の面目」つまり「このような面授に出会うことのできた自己の誇りに満ちた顔」というのは、よき師との関係性の中でこそ受けとめることが出来るのです。それを「役割」という視点から考えますと、師を師の「役割」と認めて尊敬し、自らを弟子の「役割」に徹底させて、師に完全服従する生き方が出来るようになることが大切だということになります。

皮肉骨髄、手足、それぞれに役割をはたす上で重要な働きをします。幼少の頃から、からだを使って農作業の手伝いをし、生きぬくための役割をはたしつつ成長した世代は、面授受面が比較的うまくいったのかもしれない。そういう意味では、社会的役割を自在にこなすことが困難な人が増えつつある現代は宗門でも面授受面がむずかしくなっているのはたしかです。

(つづく)



◆◆◆ 韓国の寺院を訪ねて ◆◆◆

ニューヨーク州立大学

伊藤 博
伊藤 宣

韓国の古今

私たちは十年ぐらいおきに韓国を訪れていま

すが、近くて遠い国と感じます。一回目は一九七七年で町々の道路標識や店の看板などはほとんどハングル語でした。日本語を話す人は日本の占領を経験した人の中にはいたのでしょうか、使いたがりませんでしたし、英語を話す人はインテリを除いてはほとんどいませんでした。冬でしたが、韓国の暖房設備オンドルのある宿を

見つけるのに会話が通じず苦勞しました。次からは、韓国の大学教授の友人夫妻が高層マンションに泊めてくれます。

一九九〇年頃にはだんだん漢字も町々のサインから姿を消し、ほとんどハングル語のみになりました。行きたい所に行くのは難しく、首都ソウルの駅の汽車のプラットホームがどうしても分からず、たまたま他の観光客を連れたガイドが英語を話していてその人に聞いて正しい列車に乗れました。

一九九九年に訪れた時は経済的にもどんどん発達した後でしたので、車は氾濫し超高層住宅も至る所に立ち並んでいました。日本人は庭のついた一戸建ての家を好むといわれていますが、韓国人は未だ治安上不安もあり、特に都会では警備の付いた高層住宅を好むようです。一番の驚きはハングル語に加えてそこいら中に英語やローマ字の標識が増えたことです。ローマ字だと意味は分からなくても発音できるので、随分移動しやすくなりました。汽車の行き方もハングルと英語と両方で書いてあり、ホテル、レストラン等も全部両方で看板に出していました。

一九七〇年代は冷戦の最中で北南朝鮮の分断点、板門店で強い印象を受けました。観光バスの前後に機関銃を装備した護衛のジープが走り自由の家、会議場などを見学するのにバスを降りるたびに乗客をMPがぐるっと囲んで物々しく護衛される格好となりました。非武装地帯の

帰らざる橋の横には絶えずエンジンをかけたトラックが止めてあり、北から逃亡して来たらその後すぐに追手を防ぐためにトラックで橋を封鎖するため、ものすごい緊迫感がありました。二〇〇二年南北両首脳の会談が開かれ鉄道が再開された今、動乱後の長い緊張関係を考えると「やっとここまで辿り着いたか」という感じがします。

ソウルのお寺

韓国には大きな有名なお寺がいくつもありますが、ソウル市内にあるのは曹溪寺でこの寺は韓国最大の派である曹溪宗の総本山になっていて、全国の一五〇〇万の仏教徒の八〇パーセントがこの宗派に属すと言われます。境内に行ってみると地方の寺院からの僧侶達と一般のお参り客で絶えず賑わっています。特に、お釈迦様の誕生日の前には、僧侶や信者が木と木の間や

町の中に吊す蓮の花、竜、星の形の提灯は見事なものです。骨董品や洒落た料理屋は喫茶店などがある仁寺洞のそばにあります。ソウルに寺が一つしかないのは多分李朝時代になって儒教を崇拜して、仏教を排斥したのと、特にソウルは李朝の都であったために仏教が衰退したためであろうと思われまます。

韓国に仏教が中国から伝来したのは四世紀後半の三国時代の頃でした。初めに高句麗に伝わり、次に五世紀初め、百済にそして最後に、新羅に伝わり、六世紀初めには仏教が国教と公認されました。七世紀には新羅は中国の唐の朝鮮支配を断念させ、半島を統一した後、高度な仏教文化を展開させました。王京（現在の慶州）に多くの寺院を建てたのもこの時代で、慶州の仏国寺の釈迦塔、多宝塔などの石塔美術、花崗岩をドーム状に築き上げて造られた石窟寺院、その中に安置された仏像などは新羅仏教美術の

代表的なものです。新羅が王位継承で力を落とし、三国が群雄割拠しましたが、その後十世紀になって今度は高麗が朝鮮半島を統一し、仏教は再び栄え、全国に多くの寺院が造られました。ソウルにはたくさんすばらしい王宮や庭があります。日本の植民地時代の旧朝鮮総督府のビルは一九九五年まで国立中央博物館として使われていて、非常に立派な建物でした。この建物は歴史的な怨念がなければ壊すのはおしい建物でした。壊されて無くなったことは韓国人の苦い思いを考えると当然ですし、李王朝時代からの正宮であった景福宮を隠すように立っていたのが取り去られて植民地時代からの威圧感が無くなったようです。

韓国の京都、慶州

千年以上も栄えた新羅の都、慶州は日本の京都のような町といわれます。ソウルから汽車で

四時間ちよつとですが、私達はソウル駅から快適な汽車の旅をしました。慶州は見る所が多いので英語の解説も付くという観光バスに乗りましたが、付き添いのガイドはほとんど英語が話せなかったので降りてタクシーに乗り換えました。乗ったタクシーの運転手はバスのガイドよりは年配の人でカタコトの日本語と英語を話すので助かりました。

慶州市は特に古墳が有名で二五〇基もあり、その一部が大陵苑として公園になっています。その公園にある天馬塚は直径四十七メートル、高さ十二・七メートルの円墳で中を見学することが出来ます。中からは一万二千点の副葬品が出土したそうで古墳の構造と一九三七年の発掘時の状態を説明した展示があります。公園は真っ青な芝がきれいに刈られ、なだらかな円墳が起伏をなして少しきれいに整備されすぎている感もしました。



次に、新羅王朝の仏教美術で有名な国立慶州博物館を覗いてみました。本館は新羅最大の寺院皇竜寺の遺物品が中心に展示されており、二つの別館では慶州市内の古墳から出土した副葬品が収められています。なかでも冠、ベルト、腕輪などの金属製品は黄金の国といわれた新羅の豪華さを思わせます。又、野外にも聖徳大王鐘や三層塔、付近の寺院から出土した石仏などが沢山展示されています。

芬皇寺は七世紀の半ばに善徳女王により創設された寺院で、立派な由緒あるお寺でしたが、度々の火災や元軍の襲来で、今は礎石を残すだけになっていました。ただ珍しい三層の塔が残っておりますが当時は五層であったそうです。四角の塔で灰黒色の石を切り出して積み上げられたので、初層には仁王像が八体浮き彫りにされており、また基壇の四隅には石獅子が置かれています。

市外からは十五キロほど離れた吐含山の斜面には韓国を代表する名刹仏国寺があります。六世紀前半に創建されましたが、以後何回も改修されました。特に木造建物は秀吉の軍の手により全焼してしまったので、残っているのは李朝後期以降のものと、復元された李朝様式の建物だけでした。仏国寺の伽藍は斜面に建てられているため重厚な立体感があります。そして、奈良の薬師寺にも見られる、七〜九世紀の統一新羅時代に発達したという伽藍配置が特徴で、東側に無説殿、大雄殿、双塔鐘樓が並び、西側には極楽殿があり、統一新羅時代の金銅阿弥陀如来が安置されています。本堂である大雄殿の前には二つの塔が並んでおります。大雄殿の中央には本尊の釈迦仏が安置され、その左右には菩薩像、十六羅漢像などが並んでいます。大雄殿は一七六五年に創建当時の基壇の上に再建されたもので、李朝時代後期の代表的な仏教建築に

数えられています。

仏国寺が建つ山の頂上に石窟寺院があります。日本海に向かって建てられており、私達が行った時はよく晴れた日で日本本土は見えないものの日本海は良く見えて日本と韓国の近さを感じました。仏国寺と同じ頃創建されたもので李氏朝鮮時代に仏教が弾圧されたために一九〇〇年頃再発見されるまで、長年忘れられていました。補修後は木造建ての覆いが掛けられたと言う意味で人工の寺院です。しかし、新羅文化の結晶と言われる見事な石積み花崗岩の石仏はとても荘厳です。天井は花崗岩を積み上げたドーム型で、主室には如来像が台座の上に座し、その周囲には梵天、帝釈天、文殊菩薩など、本尊の後ろには十一面観音が浮き彫りにされています。

光州の名刹、松光寺

光州は学生の抗議騒動で有名になった大学町

ですが、ここから四十キロ、バスで一時間半位の山の中に韓国三宝寺刹の一つ松光寺があります。やはり曹溪宗の寺で禅の根本道場です。新羅時代に創建され、高麗時代に普照国師知訥によつて寺が栄えたと言われております。バス停のある門前町を通り抜けると、なかなか雰囲気のある大きなお寺の参道に入ります。溪流の上にかかる清涼閣や羽化閣は韓国風の青がかったグリーンを中心とした極彩色の門で、ここをくぐり涼しい風を意識しながら山道を歩くと大伽藍の広がる寺の中心に出ました。五十余りの建物のある大きな寺で境内には仏教国際学院というのがあり、絶えず外国人も修行しているそうです。時々列になって修行僧が境内を横切つて行くのが目立ちました。朝鮮戦争の時に多くの建物が破壊されたそうですが、今はすっかりきれいに修復されました。今は博物館もあり木造三尊仏龕などの貴重な遺物がおさめられて



います。

松広寺を見学して門前町のバス停に出て来たのは二時過ぎだったと思いますが、そこで日本の方にたまたまお会いしました。「この割合近くにある華嚴寺を見たいのだけれどどうも時間が無くて」と私達が言うのと、バスを乗り換えて行けば十分に時間はありますよとのことでした。そこで、元気を出して足を伸ばすことにしました。しかし、バス停、特に行き先があまり大きな場所ではないので分かり難く、最後に聞いた人は言葉が通じず、私達の手を引っ張って行って華嚴寺行きのバスに乗せてくれました。

華嚴寺は統一新羅の時代、八世紀に縁起祖師が開いたと言われています。バスを降りてしばらく歩くと智異山大華嚴寺と書いてある門に出ます。そこを通り過ぎると山門をくぐってから一時間も山道を歩くとやっと寺に出ました。

松光寺に比べるとかなり小規模の寺でしたが、

ここで一番古い建物は正面の大雄殿で、一六三六年に碧巖大師により再建されたものだそうです。入り口からかなり遠いことや、私達が訪れたのが午後かなり遅かったこともあってあまり人ごみも無くかえって落ち着いたお寺らしい雰囲気味わってきました。

日本と韓国の僧侶の正座の仕方が似ているのに驚いたことがあります。バンコックのワットパクナムに参拝した際、多数のタイの僧侶達に混じって若い韓国の僧侶一人が一緒に読経しておりましたが、タイの僧侶が足を崩して座っているのに対し、韓国の若い僧侶は日本同様きちんと背筋を伸ばして正座している姿がとても対照的でした。これも小乗仏教との風俗習慣の違いかなと感じました。

儒教

寺院を宗教の場と考える私達には韓国に行っ



て儒教の寺院を見るたびに違和感が感じられます。儒教が人びとの道徳制度として根を下ろした時代から成人式、結婚式、葬式、それに先祖崇拝に結びつき大衆に溶け込んでいます。韓国の儒教的な思想では人生には何回かの角目があり、その節目のような時に起こりうる混乱を無事に通り抜けることが必要になるという前提で一連の行事を規定しています。昔は成人式は男子二十歳、女子は十五歳で公式に責任ある社会人となったことを確認しました。

結婚式は家族が社会の基本的な単位であることを確認し、先祖を尊敬し、家族の継続が保障されたことを公に表す行為です。新郎新婦の家長が結婚を決定すると、花婿の家族が花嫁の家族に手紙を送り彼らの運命を決定すると言われる生年月日及び生まれた時間を知らせます。日本や中国とは異なり韓国では伝統的に結婚式は花嫁の家で行われ、新婚夫婦は二、三日花嫁の

家に留まります。子孫を沢山つくり繁栄する人生を送ることが社会に対する義務でもありません。た。

葬式は家族のメンバーの死を悼み、残された家族が悲しみと恐怖を乗り越えることができるようにと意図されました。葬式は近親者のみならず、一族による手の込んだ行事となり、伝統的には喪の期間は二年間で、定期的に儀式を行います。

先祖崇拜は先祖の魂を敬い子孫への恵みを祈るため、過去、現在、そして未来永劫に親族親戚の結合を強めることを目的としています。今日でも敬虔な儒教者は両親、祖父母等、四世代にも渡ってその命日には儀式を行います。その他にも旧正月のような祝日には茶の儀式や墓前での儀式を行います。このような儀式は氏族の強い団結を呼び排他的になるとも言われますが、世代間の結びつきを強くし誇りを持たせます。

この儒教の伝統的な思想は家族と社会とを結ぶ強い絆として韓国の地域社会に残り、多くの伝統は今でも続いています。

シャーマニズム

韓国の伝統的な大衆信仰であるシャーマニズムには今でも幅広い支持層があります。韓国の土着信仰では人間の体には数個の魂が宿り時間や空間に妨げられず次の世でも永久に活動するか、新しい人体に入って甦ると考えられています。七つの星の靈魂、山や竜の靈魂等、自然の中にある靈魂や王、將軍、大臣等の歴史上の人物の靈魂のほか、悪霊もあります。

そして、シャーマン（祈祷師）は靈魂を慰めたり、靈魂と生きている人間との間を取り持つ靈媒の役を果たします。韓国のシャーマンには二種類あり、トランスで靈魂に選ばれた恍惚シャーマンは超自然の能力を持ち病を癒すこともでき

ます。この種のシャーマンは当初靈魂の呼びかけに抵抗した結果、病氣になったり失神したり、幻想に陥り、それを克服してシャーマンとなります。シャーマンの主な宗教的儀式は、具現する靈魂により異なる色の衣装を着、早いリズムの打楽器の伴奏で踊りトランスに入ります。手の平をこすりながら祈りを捧げ、靈魂の世界に入り靈魂と直接に伝達します。もう一つのシャーマンは相続によってシャーマンになった人たちで超自然的な能力は持つておらず、シャーマンと靈魂とは別々の正体を保ちます。儀式も単純な衣装をまとい、テンポが遅い打楽器や弦楽器や吹奏楽器で賑やかな音楽を使い踊り儀式を行います。

シャーマンは超自然的な能力を持ち主として部族国家の頃から地域社会の精神的な必要を満たすことができる宗教上のリーダーの役を務めていました。シャーマンの儀式は民族伝統に根

をおろし、三つの機能を果たすそうです。

第一に幸せを招く儀式は頻繁に行われます。

昔はこの儀式は王侯貴族の家庭から庶民に至るまで各家庭や村々で安全と繁盛を祈りました。

国の至る所に神社を建てシャーマンは音楽を奏で踊り祈りました。後になってこれらは村や町の共同の儀式や祭と発展していきました。

第二にシャーマンのみが病氣を引き起こす靈魂をコントロールできると信じ、皇室で危険な病氣が流行する悪い魂を追い出す為の儀式を行いました。シャーマンの家さえも病氣の靈魂から安全であると信じ病氣が流行するとシャーマンの家に避難したものです。個々の家庭でも恐れられていた天然痘の靈魂を追い出す儀式がしばしば行われました。

第二に韓国のシャーマンの儀式は死人の魂が天国に着き平安を見つけられるようにと意図されています。特に病氣や事故によって亡くなっ

た人のさまよっている魂を天に導くためにこの儀式が必要であると考えられていました。しかも、生存者に不幸をもたらさないための儀式でもありました。

韓国では道教も宗教文化の一角をなしていません。道教の陰陽の思想によると、奇数は縁起がよく、特に旧暦の五月の五日は一番の吉日でシャーマニズムと道教が合同でお祝います。この日は昔、農閑期を利用して始まったらしく、豊作を祈って儒教者とシャーマンたちが揃って峠に登ります。そして、儒教の神主が山の神をシャーマンが山の霊魂にお祈りした後、神社の前で、お面をつけた男女が舞踏を演じますが、この催し物は韓国の無形文化財にもなっています。韓国人の三割近くがキリスト教信者で社会事業に大きな影響力を持つとはいえ、熱心にお参りしている沢山の信者を見ると韓国もやはり仏教と儒教の国だと感じます。しかも、寺院を回って

みて狭義の宗教よりも幅広い精神文化を見た様な気がしました。



前角老師提唱

繰り返し繰り返し繰り返し の修行

Do it over and over and over

なぜ修行をするのですかと聞かれた
らどの様に答えますか。

道元禪師様は『正法眼蔵』の中で次
のように言われます。

仏道をならふといふは、自己をな
らふ也。

自己をならふといふは、自己をわ

するなり。

自己をわするるといふは、万法に
証せらるるなり。

ならうという言葉は何かを繰り返し
行うという意味合いを含みます。また
ならうということは、必ずしも何か新
しいことでもなくともよいのです。ひよっ

としたら、修行という言葉がよいのか
もしれません。仏道をならうというこ
とは、自分自身を修するということ
です。繰り返しの過程であり、自分の人
生をおいて他にありません。

繰り返しの修行ということは、知識
以上のものを要求します。その意味で
私たちは坐禅を行います。勿論、私た
ちの坐禅は、繰り返し何かを学ぶとい
うものだけではありません。道元禪師
様は、悟りそのものだと言われます。
言い換えれば、「修行」と「悟り」は一
体であるということです。私たちは悟
りのために修行をしているのではあり
ません。悟りはすでにここにあるので
す。私たちの誰もある程度の悟りを
具していますし、その時その時、一瞬
一瞬、その悟りによって自分自身を明

らめているのです。つまり、修行を繰
り返し実生活に溶け込ませるようにし
なくてははいけません。

道元禪師様は「仏道をならふという
は、自己をならふ也」と言われます。
私たちはどのように自己をならうので
しょうか。またどのように修行してゆ
けばよいのでしょうか。「私たち」と言っ
ているのは、いつでも「個々人」のこ
とであります。私の人生！あなたの人
生！仏法、仏の体は完全に私の人生で
あり、完全に「あなた」の人生である
のです。お釈迦様はこのことを発見さ
れました。ですから「なんと素晴らし
いことよ、自己他已、万法宇宙に証せ
られる」と言われたのです。これは、
観念的な「自己」だけでなく「全て」
ということですから、「自己」と

いうのは全てなのです。しかし、これを知るだけではまだ不十分です。ならう、修行するという言葉だけでは十分ではありません。言い換えれば、一瞬一瞬、過不足なく、人生を生きぬいていかなければならないからです。

道元禅師様は「自己をならうというは、自己をわするるなり」と言われます。仏法と自分の生活が分かれているとき、つまり自分の生活が自分の体と一体となっていないとき、それは迷いです。それらが一つになったときが、「悟り」または「現成公案」と呼ばれます。

「現成公案」とは道元禅師様の著作ですが、私たちは絶対的眞実 *Absolute Reality* と訳しています。言い換えれば絶対的眞実が私たちの人生を明らかにしてくれるのです。あなた方は、どのようにこの公案と向かい合いますか。

仏や悟りの人生として生きることです。人生を離れた悟りについて語っているのではありません。悟りや迷いについて語ったとき、それはすでに迷いであります。同じことが公案と向かい合うときや、只管打坐の修行をするときにも言えます。自己の外に何か目標を立てたとたん、すぐさま自己からかけ離れた状態になってしまいます。どんな素晴らしい目標でも、結果は同じことです。ある種の自我（エゴ）を含んだ見地に陥ってしまうからです。

どのようにしたら自己を忘れることができるのでしょうか。道元禅師様は「自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり」と言われます。証せられるということは、方法によって、証明、確認されることであり、単純に全

てによって証明せられることです。そうあるべきであり、自己を忘れたとき、私たちは方法であり、人生そのものになるのです。これは私たちが繰り返し繰り返し、自己を生きなくてはいけないことなのです。

「万法に証せらるるというのは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。」言い換えれば、そこには自己と他己の間に迷いが無いということです。お釈迦様は、暁の明星をご覧になられたとき、このことを悟られたのです。本来の自己を見、全宇宙を見、人生の自由をご覧になられたのです。人生は初めより完全に自由なのです。全く制限されていません。私たちはこのことに感謝しなくてはなりません。本当に自由なとき、その瞬間は我を忘

れているはずですが。何かにとらわれているとしたら、あなたには自我があり、完全に自由だとはいえません。本当に我を忘れたとき、内外の垣根はありませんし、自己他己の分け隔てもなくなります。このように開放に満ち溢れるなかで、私たちは人生に感謝できるのです。

私は、「自由」という言葉は、アメリカ人の素晴らしい気質だと思います。どのようにしたら、私たちは無条件に自由となれるのでしょうか。どの種の自由について話しているのでしょうか。自由であるとき、他人の境地になることができません。親しい友だちであろうと、見知らぬ人であろうと問題になりません。

あなたたちの中で、「仕事の世界では、どのように応用したらよいのでしょうか」と尋ねる人がいるかもしれません。締め切り間際の状況でどのようにして、自己を忘れることができるか、と尋ねるかもしれません。それには、単純にその仕事に身を投じ、なすべきことに専念することです。締め切り、そして次の締め切り、そこにはもう締め切りは存在しません。一瞬一瞬が始まりであり、終わりでもあるのです。そこには、他人によって定められた、終点や締め切りは無いのです。

つまり只管打坐を修行するときはまだ坐るだけです。これが、自由の状態です。そして、完全に自由になると、あなたは時間と空間そのものに他なりません。道元禪師様は法印ということ

を言われます。法印とはこの自由ということです。そこには、あなたの目的とあなたの人生との境はありません。この境を埋めることが、道元禪師様の言われる法印そのものなのです。

坐禅中、ほとんどの時間ただひたすら坐っていることはできません。何らかの思いや迷いが次から次へと浮かんできます。よく私は只管打坐しているという人がいますが、そう感じているだけです。そこには自分だけの思い込みがあるのです。言葉や概念にとらわれてはいけません。公案と向い合っているときは、公案を人生として受け止めなくてははいけません。公案は勉強や評価を下すたぐいのものではありません。あなた自身の人生を現成公案としなくてははいけません。そこにはすでに

あなたの人生が存在します。そのような人生は、完全に自由で、自我の意識はとないのです。

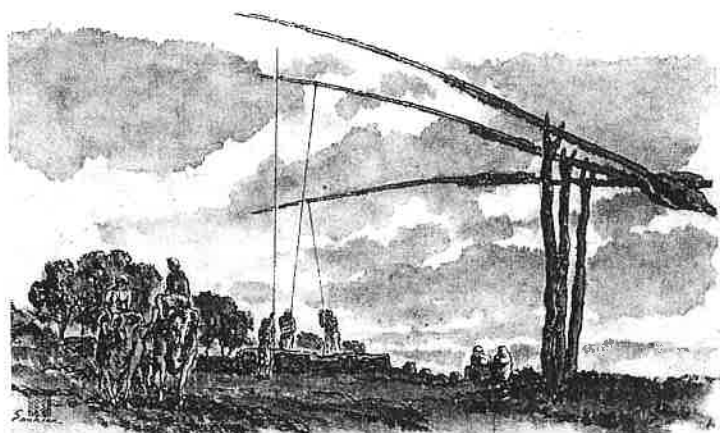
心と体において、この自由を踏破するためには法印の証をえることです。

ただひたすら、繰り返し、繰り返しあるのみです。

“Appreciate Your Life-The Essence of Zen Practice”

Taizan Maezumi Shambhala Publications pp.22-25より

翻訳責任：遠藤 博因





因陀罗尊者



成寿山善光寺開創三十五周年
横浜・善光寺留学僧育英会設立二十周年
記念式典





緑の風が心地よい總持寺参道

これまで深く感謝し
新たな決意で歩みだすために

兼ねてからお知らせしたように成寿山善光寺の開創三十五周年と横浜・善光寺留学僧育英会設立二十周年を記念する式典が平成十五年五月十日、横浜市鶴見区の曹洞宗大本山總持寺で行われました。

当日は天候にも恵まれ、總持寺参道の爽やかな緑の風の中、全国各地から善光寺檀信徒のみなさんがお集まりになりました。また、これまでに善光寺や留学僧育英会に縁の深い方々にも多数ご来席いただき、善光寺の歴史を祝うにふさわしい盛会となりました。当日のみなさんの表情をお伝えしましょう。



曹洞宗大本山總持寺三松閣



- 400名を超える参列者に受付も大忙し（写真上）。
- 参列者をお迎えする黒田老師と倫子夫人（写真左中、下）。
- 三松閣に向かうバーナガラ・ウパティッサ・スリランカ大菩薩会会長（写真右中）



僧侶の荘厳な読経が響きわたる法堂（大祖堂）

参列する檀信徒のみなさんの表情も真剣に





万感を込めて低頭する
黒田老師

開祖瑩山禪師の前に 信仰の心を再認識する

式典はまず、場所を三松閣から法堂（大祖堂）に移し、伊東盛熙監院老師の導師により記念法要が営まれました。広い法堂の中には百人を超える總持寺の僧侶の力強い誦経が響き渡ります。そして、その誦経に呼応するかのようにひときわ深く頭を下げる黒田老師の姿が印象的です。莊嚴な雰囲気の中、檀信徒のみなさんは一人ひとり仏前に進み焼香します。ゆっくりと手を合わせ、頭を深く垂れ、心を鎮めながら、三十五年という長い歳月の移り変わりとともに日々の生活の中に感じる感謝の気持ちを変えて認識したのではないのでしょうか。



ご来賓の方々のご参列



伊東盛熙監院老師の導師による回向

黒田倫子夫人と檀信徒代表





厳粛な雰囲気の中で執り行われた法要



伊東監院老師にお礼を述べる黒田老師



仏壇に進んでご焼香される檀信徒のみなさん



ご挨拶の後、黒田老師を讃える
カルナティラカ・アムヌガマ駐日スリランカ大使



信じることの大切さを説く、木村清孝鶴見大学教授の講演

仏教の国際親善を携えて スリランカからのお客様も

式典には約四百人の檀信徒、僧侶四十人、来賓二十人、あわせて四百六十人近い関係者が来席しました。その中には、今年三月、黒田老師が八十人の友好使節団を率いて訪問したスリランカから、バーナガラ・ウパティッサ・スリランカ大菩薩会会長、ペルポラ・ウパッシ大僧正の来席もありました。また、日本・スリランカ国交樹立五十周年にあたり交流を深めていたカルナティラカ・アムヌガマ駐日スリランカ大使もご夫妻でお越しいただき、留学僧育英会の設立二十周年記念式典にふさわしいグローバルな雰囲気の中で行われました。



ご来賓の挨拶に続いて乾杯

瑩山禅師の歩みから もう一度、禅を考える

記念式典は再び三松閣に場所を移して、記念講演と祝宴が行われました。宮本延雄鶴見大学事務局長のご挨拶に続いて、木村清孝鶴見大学教授・東京大学名誉教授の「瑩山紹瑾禅師に学ぶ」と題する記念講演が行われました（記念講演の内容は百四〇ページに）。講演の冒頭に木村教授の教え子である学生がこの育英会にお世話になったこと、また、木村教授のお父様と黒田老師につながりがあったことを述べられ、その縁の深さを感じざるを得ませんでした。そして、この總持寺にふさわしい瑩山禅師をテーマにしたお話に参列者は真剣に耳を傾けていました。



アムヌガマ駐日スリランカ大使



ご来賓・伊東盛熙監院老師



ご来賓・洞外文隆老師



ご来賓・宮本延雄鶴見大学事務局長



ご来賓・荻野映明老師



檀信徒総代・熊谷豊太郎氏



ベルポラ・ウパッシ大僧正



ウパティッサ・スリランカ大菩薩会会長

温かい心、和やかなひととき

式典は善光寺総代表熊谷豊太郎氏のご挨拶に続いて、伊東盛熙監院老師、アムヌガマ駐日スリランカ大使、ウパティッサ・スリランカ大菩薩会会長、ウパッシ大僧正、神奈川県三浦市の木瑞寺住職洞外文隆老師、埼玉県飯能市の能仁寺住職荻野映明老師から温かいご祝辞をいただきました。そして、



(写真上から)

- ご参列のみなさん一人ひとりに声を掛ける黒田老師
- ウパティッサ師にお礼を述べる親善訪問使節団の一員
- 三松閣に集まった四百人を超える参列者。壮観な眺め



来賓のご紹介に続いて、乾杯。祝宴に移りました。スリランカからのお客様には友好使節団のメンバーがともに再会を喜びました。

その後、善光寺の三十五年を知り尽くしている東郷敏氏のお話、黒田老師の兄黒田俊雄老師のご挨拶で中締めとなりました。和やかなひとときに、心のあり方を考える。来席したみなさんには心に残る一日になったことでしょう。

(写真上から)

- アムヌガマ駐日スリランカ大使ご夫妻
- 気さくにお話ししてくださる大使夫人
- ご来賓のみなさんもいろいろな話題に花が咲きます
- 木村教授に講演の感動をお伝えして



ご来賓と語らうアムヌガマ大使



世代を超えた笑顔が善光寺の未来を象徴



- 参列者への感謝の辞で席を締めた黒田俊雄老師（写真上・右）
- 35年の歩みと想いを語る檀信徒代表・東郷敏氏（写真上・左）
- ご来賓一人ひとりにご挨拶を述べる黒田老師（写真中・右）
- ご来賓、立正佼成会理事長・山野井克典様をご紹介（写真中・左）
- 今日の日と35年間を支えた倫子夫人と檀信徒のみなさん（写真下・右）
- 黒田老師の歩んだ道のりを讃えるご来賓のみなさん（写真下・左）





結びは参加者全員で
善光寺の唄を大合唱

成寿山善光寺開創35周年 留学僧育英会設立20周年

曹洞宗大本山總持寺で記念式典

去る五月十日、横浜・善光寺（黒田武志住職）開創三十五周年および「横浜・善光寺留学僧育英会」設立二十周年の記念式典が、横浜市鶴見区の曹洞宗大本山總持寺で催された。檀信徒約四百人、僧侶四十人、来賓二十人ら約四百六十人が参席し、法堂（大祖堂）で記念法要が厳修され、三松閣に会場を移して記念講演、祝宴が行われた。

黒田武志住職は、無一物から出発し、〃釈尊の原点に返れ〃と叫び続けて三十五年間、檀信徒

の応援を得ながら、檀家を三千に拡大、また仏教の将来性を託すため横浜善光寺留学僧育英会

を立ち上げて二十年、その間百十人の育英僧（二十一カ国二地域）を育ててきた。

式典は最初、總持寺の法堂（大祖堂）において、伊東盛熙監院の導師により記念法要が厳修された。その後、三松閣に会場を移して、記念講演、宴会が行われた。

記念講演では、鶴見大学教授・東京大学名誉教授の木村清孝教授が「瑩山紹瑾禪師に学ぶ」と題し講演。まず自分の学生が育英会のお世話になったこと、自分の父も黒田老師とかかわりがあったことを述べて本題に入った。

木村教授は、「みんなが安らぎ、悟りへいくことができるようにしたのが大乘仏教であり、その中で瞑想・禅定、心を静める行を通して真実が現れる筋道を大切にしたのが禅宗である。その一つである曹洞宗では、大本の釈尊、日本曹洞宗開祖の道元禪師、その伝統を大衆化して広めた四代目の瑩山禪師の三人を礼拝している」

と述べて、瑩山禪師に焦点を移した。

「瑩山（紹瑾）禪師は八歳で得度、十九歳で弥勒菩薩のいる兜率天に登った、といわれる。

二十二歳で、法華経の一部に触れ、私と宇宙は一つだと気づき、深い知恵を修得された。二十五歳で、知恵のまままで終わってはいけなとし、観音の大悲を自らの願いとし、どうしようもない人間をも救う願いを持った。亡くなる寸前には、悟りを實現する菩提心を転生してなお起こし続ける決意を述べている。また、伝統を守りながらも、報恩行など、現実的な問題にも対処した。それは、平常心（当り前の心）が真実そのもの、仏教の核心から出てくるものであり、みんなに悟り、平安を實現させようという菩薩の願いから出てくるものである。師のモデルは観音菩薩にあった」

最後に、一人一人が慈悲による菩薩行を行うことこそ瑩山禪師の願望であり、黒田老師も菩

薩の一人だと語って講演を締めくくった。

祝宴では、善光寺総代表・熊谷豊太郎氏によるあいさつの後、伊東監院、カルナティラカ・アムヌガマ駐日スリランカ大使、バーナガラ・ウパティッサ・スリランカ大菩薩会会長、ペルポラ・ウパッシ大僧正、神奈川県三浦市・本瑞寺住職の洞外文隆師、埼玉県飯能市の能仁寺住職の萩野映明師が祝辞を述べた。

アムヌガマ大使は、祝辞の中で、「黒田老師の仏法興隆に対する貢献、仏教研究には、私が日本に赴任する前から知っていた。留学僧育英会は仏教国をリードする若いリーダーたちを通して偉大な貢献をされている。老師こそ上座部仏教に対する深い理解を持つ最も尊敬すべき日本仏教界を代表する一人だと確信する。昨年は日本スリランカ国交樹立五十周年に当たり、黒田老師は、今年三月、八十人の友好親善使節団を率いてスリランカを訪問、世界平和祈願コロン

ボ大会で『ダルマパーラの贈り物』と題した感銘すべき講演を行った」と述べ、黒田老師の国内外にわたる活躍に賛美を惜しまなかった。

(宗教新聞より転載)



成寿山善光寺開創三十五周年
横浜・善光寺留学僧育英会設立二十周年
記念式典

記念講演

瑩山紹瑾禅師に学ぶ

鶴見大学教授
東京大学名誉教授

木村清孝

私どもの曹洞宗、禅宗は禅の伝統を受け継いでおります。それは、仏教学では大乘仏教という大きな枠組みの中に入ります。大乘とは大きな乗り物ということですが、それが何を意味するかというと、生きとし生けるものすべてが救われていく。すべてが悟りの安らぎへと赴くことができる、そういう教えということです。

私だけではない、あなただけではない。みんな

ながいっしょに、誰もが救われていく。安らぎへと導かれてゆく。そういう教えであることを標榜して、釈尊が亡くなられてから数百年後に新しい運動として、仏教の再生を目指して起こってきた教え、これが大乘仏教ということになります。その大乘仏教の展開の中から特に禅定、深い心の静まり、一般的な言葉を使いますと瞑想といっぺいいと思います、この心を静かに

澄ませること、そしてその中から真実の知恵が現われてくる。そういう筋道を大事にして生まれてきたのが禅の伝統です。基本的には釈尊ご自身が最終的に菩提樹のもとで静かに瞑想に入られ、座禅をなさって、悟りを開かれた、この仏教の原点をモデルにしているわけです。曹洞宗以外にも禅宗はいくつかありますが、それらすべてがそういう釈尊のありようを基本にしている、そう申し上げていいのではないかと思います。

さて、禅宗という宗派自体は千五百年ほど前にすでに中国において成立しました。曹洞宗はその流れをくんで展開してきたものですが、日本にこの宗風をしっかりと根づかされた方、日本曹洞宗の開祖に相当するのが道元禪師です。そして、その道元禪師から四代目、この禅の教えを広く、みんなのために流布されたのが、瑩山禪師です。そういうことで、釈尊と道元禪師、

および瑩山禪師。お三方を礼拝することを曹洞宗では基本にしています。

では、瑩山禪師はどういうお立場でどういうことをお広めになったのでしょうか。瑩山禪師は八歳の時に永平寺に入り、十三歳で剃髪、頭を剃って得度をなさっておられます。今でいいますと小学校を終える頃となりますでしょうか。その後、師のもとを離れて、何人もの先生方から教えを受ける、求道の旅をなさっておられます。

今は、お坊さんというのは一人の師にずっと付いてという形が一般的です。けれども、雲水という言葉がありますが、禪僧は行脚僧として、各地を自由に歩いて、これはと思う先生について勉強する。そういった体験を重ねていく中で最終的に、これでいいんだという境地を修得する。これが、禅のお坊さんの基本的な生き方なのです。このことが雲が動き水が流れる、その

ありさまと似ているものですから、雲水さんという呼び方をするわけです。こういう求道、道を求める生き方が禅宗の基本でございます。

このようなことで、たいへん若い頃、十代にすでに瑩山禪師は求道の旅をなさっておられました。寂円という禪師さんのもとで十九歳の時、一つの宗教的な深い体験をなさったといわれております。その体験とは、不死、死なないままに兜率天という弥勒様がおられる世界に昇られた。そしてそこで不退転といいますが、仏道を真直ぐ歩く、その深い確信を得られたということです。

その後も瑩山禪師は、何度も大きな体験を重ねておられます。まず、その三年後の二十二歳の時に、法華経の一節に触れて一つの体験を得られます。

先程法堂でごいっしょにお参りをさせていたいただきましたが、その時に読まれたお経が般

若心経と、法華経の中の観世音菩薩品という一章です。ご回向の中では「大乘妙典観世音菩薩品」といわれておりましたが、大乘妙典というのは、法華経のことなのです。

さて、その法華経の法師功德品という一章に「この肉眼で、私どものお父さん、お母さんからいただいた自分の目で、三千世界を見る」という教説が出てきます。

超能力といいますが、仏教では神通力といえますけれども、それだったら全世界を見渡すこともできるでしょう。けれども、この肉眼でどうしてありとあらゆる世界を見られるのでしょうか。

この教えに触れられて、瑩山禪師はハッと気づかされたといわれます。そして、「私自身とこの世界とは決して別ではない、バラバラではない。一つなんだ」と確信されたということです。

仏教の立場で申しますと、一つの深い知恵を修

得なさったと言っていていいでしょう。

ただし、知恵は知恵のまままで終わってはなりません。一つの面として、知恵はどこまでも深まっていかなければなりません。同時に、その知恵がいわゆる慈悲、いつくしみの心、あわれみの心へと転換していく。慈悲の働きを生み出し、大きく開いていく、そういう面がなければなりません。瑩山禅師も実はその三年後、二十五歳と伝記には出てまいりませんが、「大悲闡提の願」をお持ちになったといわれているんですね。これは先程の観音経、観世菩薩品の観音様のお心です。観音様が持つ大きないつくしみ、あわれみの心、瑩山禅師はこれを自らの願となさったのです。しかも、その対象は直接には一闡提です。

一闡提と申すには、分かりやすくいえば、どうしようもない人間、救われそうもない人間、仏になれない人間、そういう人たちを指す言葉

です。そういうどうしようもない人をこそ、安らぎの岸へと渡したい。こういう願いをお持ちになった、といわれております。

瑩山禅師はここにおいて、知恵と慈悲という仏教の大きな実践目標が二つともに具わったと、それを自らのものとして体得なさったと、考えてよろしいのではないのでしょうか。この大悲闡提の願いは瑩山禅師の次の世界にかける願いにつながってまいります。

瑩山禅師は最晩年に二つの願いを立てられました。それが何かと申しますと、一つは発心、菩提心を起こし続けるという願いです。すでに申し上げたように、禅師は十代、二十代の初めの頃までに何度も悟りの体験をしておられます。菩提心を起こすということは、一回、二回で終わるものではありません。本当の知恵を身につけるものではなく、衆生のすべてを安らぎへ導くということ、そのことは大乘仏教では歴劫修行と申しますが、

生まれ変わり、死に変わりしていく中で、繰り返し繰り返し、どこまでもどこまでも求め、身につけられるように努めていくものでなければなりません。

瑩山禪師は、晩年亡くなる直前に、菩提心を起こし続けて、仏の悟りを自らのものとするまで、次の世もその次の世も私は生きていくという決意を述べておられるのです。

もう一つは、女人救済の願です。いわば先の大悲闡提の願の焦点を、特に女性に合わせて表明されたものといえるでしょうか。すべての女性たちを救っていく。女の人みんなを安らぎの岸に私は導きたい。こういう願いを立てておられるのです。

もちろん男性はどうでもいいと思われたわけではないでしょう。けれども、ちょうど元の日本侵略の行動があった、時宗の時代から後、鎌倉幕府が滅亡へと向かう時代まで、その頃が瑩

山禪師が活躍なさった時代です。この間に、文化・宗教の面でも商業面でも一時的には、両国の平和な交流も行われますが、鎌倉幕府の力というものは衰えてまいりまして、日本の国内ではいろんな動揺があるわけです。決して楽な時代ではなかったらうと思われます。特に女性たちのおかれた状況というのはたいへんなものであったでしょう。

おそらく瑩山禪師はそうした条件を踏まえて女人救済の願を立てられているのではないかと。大悲の願といいますが、一般的に「みんなを救うよ」ではなく、今、特に問題なのは何なのか、そういうところをしっかり目を据えて具体的な行動をとられていると思われれるのです。

このことが、瑩山禪師のご一生を拝見しておりましたも、非常に強く感じられます。

例えば一方では、実際に仏教はどう伝わっていくのか、そのことをしっかりとお考えになっ



宋山五年秋无

ておりまして、出家、在家、両方を含めまして多くの授戒をしておられます。

また、義介禅師のもので三十二歳の時に法を継がれますが、きっかけになったには「平常心是道」という言葉だったといわれております。

この言葉自体はたいへん古いものでありまして、禅師よりも六百年程さかのぼりますのでしようか、馬祖道一禅師が最初にいわれた言葉のようです。平常心、当たり前心がそのまま道である。真実の現われであるというんですね。

普通平常心といいますが、心がまったく動じない、不動の心といえますか、落ち着いた心のことですね。ところが、もともとの平常心、仏教では『びようじょうしん』と読みますが、悲しい時に泣く、嬉しい時に笑う、そういう現実が起こる、その心を実は指しているのです。それがそのまま道の現われ、真実の現われだというのが「平常心是道」の本来の意味です。

瑩山禅師はこれをしっかりと受け止めて、仏教とはこれだということを最終的に納得されたわけです。

このように、現実の世界、今ある世界に注目し、その中で何が大事なのか、今何をすべきなのか、そういう事をしっかりと見極めて、自らの生き方、行動のありようを決めていかれたのが瑩山禅師であると私は思います。まさしく菩薩としての活動と申し上げてよいでしょう。

みなさんは観音菩薩、文殊菩薩など、菩薩と申しますと、私どもとはまったく違う優れた力を持った雲の上の人という印象をお持ちかもしれません。しかし、菩薩の本来の意味は、本当の仏の悟りを実現しよう、生きとし生けるもののために身を捧げよう、こうした決意をする人はみな菩薩なのです。

瑩山禅師は、そういう菩薩としての思いを自らの体験を通してどんどん深めていかれる。そ

して、自らも菩薩として生きようとされました。そのモデルはといえば、それは観音菩薩です。

現代においても、自らの利益、自分の我欲に動かされずに、いつでもみんなのために、生きとし生けるもののためという思いを持って活動なさる方は、立派な菩薩なのです。だから、例えばボランティア活動で、いたたまれずに何か役に立てばと飛び込んでいかれる。そういう活動をなさるとすれば、現代の菩薩の一つの姿です。私たち一人ひとりもこうした自分の狭い見、小さな利己的な心というものを離れて、できることを何かする。もし、瑩山禪師のお弟子の一人としてそれができれば、瑩山禪師も本当にお喜びでしょう。それが禪師ご自身が選ばれた曹洞禪の継承のあり方ということになるであらうと思います。黒田老師ご自身のご活動がまさにその一つですね。

できることはみんな違います。違うからこそ、

むしろ、いろいろな花が咲くのです。「錦上に花を添える」という言葉がありますが、私どものこの世界は仏の目から見れば、すでに完成された世界、何も付け加えることのない世界といわれます。その世界をさらに美しくしていこうとするあり方、そうした願いを持って生きていくこと、これが「錦上に花を添える」です。そして、そのような生き方が少しでもできることこそが、瑩山禪師の教えにつながるものとして、最も望まれていることではないかと思う次第でございます。

ていただきたいと存じます。

昨年2002年は、第2次世界大戦集結後、日本とスリランカの国交樹立50周年という記念すべき年でありました。このことは1951年9月に締結されましたサンフランシスコ対日講和条約の批准を承けて1952年4月この条約の発効に際してスリランカは最も早い時期に日本と国交を樹立した国のひとつであったことを如実に物語っております。黒田老師には、国交樹立50周年記念企画推進委員会顧問として記念行事の推進に携わっていただくと同時にスリランカ訪問友好親善使節団代表・団長として一行80名を引率して本年3月スリランカを親善訪問していただいたのであります。私はこの使節団が80名の参加者を数えたことに驚嘆すると同時に、国交樹立50周年記念世界平和祈願コロombo大会において黒田老師のなされました基調講演—21世紀の日本とスリランカの仏教相互交流を通じて世界平和への貢献を考える—の力強い卓見に共感と大きな喜びを禁じえません。

このようにして私は駐日大使として国交樹立50周年記念事業を祝い黒田老師の日本におけるご貢献の生き証人となりましたことをこのうえもなく幸運に存じます。

結びにあたり私は今一度黒田老師の仏法への深き帰依と発展途上にある国々と未だ恵まれぬ人々に対するご慈悲のお心に対し賞賛と敬意を表させていただきたいと存じます。

善光寺ご寺族と育英会関係者ご一同、ご列席のご来賓各位のご清栄とご発展をお祈り申し上げます。

ご列席の皆様にあまねく三宝のご加護のございますように。

2003年5月10日

スリランカ民主社会主義共和国
駐日大使 カルナティラカ・アムヌガマ

スリランカ全権委任日本大使

カリナティラカ アムヌガマ閣下よりの御祝辞

黒田武志老師

善光寺ご寺族、檀信徒の皆様、
尊師方と貴賓各位

本日ここに善光寺開創35周年記念・横浜善光寺留学僧育英会創設20周年記念式典の開催されるに当り皆様にご挨拶させていただきますことは、私にとり無上のよろこびとするところでございます。

まず、はじめに黒田武志老師、善光寺ご寺族、檀信徒の皆様、尊師方とこの記念すべき式典にご列席の貴賓各位に心からお祝いを申し上げたいと存じます。

仏教徒として生まれました私は駐日大使としての多忙な公務の中で日本の仏教関係の方々との交流をこのうえもない大切なものと考えております。皆様ご承知のとおりスリランカは南アジア有数の仏教国でございます。このような経験から日本の仏教関係者とスリランカとは、二国間関係におきまして大きな役割を担っていると申せましょう。

実は黒田老師の仏法興隆に関するご貢献と仏教研究につきましては私が大使として日本に赴任してまいります以前からよく承知致しておりました。横浜善光寺留学僧育英会は仏教興隆と仏教界の次の世代を担うべき若いリーダーたちの育成に大きな貢献をされております。このような黒田老師の御業績から老師こそはテーラヴァーダ仏教に深い理解のある日本仏教界を代表する方として最も尊敬申し上げます。

この機会に私は黒田老師のご貢献のひとつをぜひ紹介させ

dhist world in the future.

Having said the above, I consider Rev. Kuroda one of the most respectful Buddhist leaders in Japan, who has a through understanding of Theravada Buddhism. Thus, may I take this opportunity to introduce some of Rev. Kuroda's contributions in this regard? The year 2002 marked the 50th Anniversary of Establishing Diplomatic between Japan and Sri Lanka after the World War II. This fact clearly depicts that Sri Lanka was one of the first countries that established diplomatic relations with Japan, in April 1952, as soon as the ratification of the Japan Peace Treaty was signed in San Francisco in September 1951. Rev. Kuroda was actively involved as advisor for the 50th Anniversary Celebration Committee by promoting various events and as leader of the Friendship Delegation of 80 member's visiting to Sri Lanka in March 2003. I was not only impressed by the size of the delegation but also delighted with the powerful speech delivered by Rev. Kuroda on "Developing World Peace in the 21th Century through Japan - Sri Lanka Buddhist Exchange" at the Colombo Gathering for World Peace. Thus, I feel fortunate to grace the commemorative event as Sri Lankan Ambassador to Japan and to witness Rev. Kuroda's contributions in Japan.

Lastly let me reiterate my sincere admiration and respect for Rev. Kurada's faith in Buddhism and philanthropic approach towards countries and people who are less fortune, and I wish members of the Zenkoji temple, the Foundation and all the guests gathering here today success in all activities they are going to pursue in the future.

May the noble triple gem shown its blessings upon all those gathered here today.

H. E. Karunatilaka Amunugama
Ambassador of Sri Lanka

H.E's congratulatory speech

for the ceremony for the 35th Anniversary of establishing the Zenkoji Temple and the 20th Anniversary of establishing the Yohama Zenkoji Scholarship Foundation for International Buddhist Study on 10 May 2003

Rev. Takeshi Kuroda,
Members of the Zenkoji Temple,
Reverend Sirs, and Distinguished ladies and gentlemen

It is my great honor to address the ceremony for the 35th Anniversary of establishing the Zenkoji Temple and the 20th Anniversary of establishing the Yokohama Zenkoji Scholarship Foundation of International Buddhist Study here today. Let me first take this opportunity to extend my warmest congratulations to Rev. Takeshi Kuroda, members of the Zenkoji Temple Reverend Sirs, and other distinguished guests gathered here to celebrate these two significant events.

In spite of my busy schedule I treasure and enjoy tremendously the responsibilities I have as a born Buddhist and as an Ambassador of Sri Lanka to interact with the Buddhist community here in Japan. As you may be aware, Sri Lanka is one of the most prominent Buddhist countries in the South Asian region. Thus the interactions between the Buddhist communities in Japan and Sri Lanka play a significant role in bilateral relations between our two countries. Even before being posted here as Ambassador I was well aware of the Rev. Kuroda's contributions in promoting Buddhism and the study of Buddhism. The Yokohama Zenkoji Scholarship Foundation for International Buddhist study has contributed significantly in promoting Buddhism and educating the young generation of Buddhist leaders who would lead the Bud-

日域無双の禅林

東香山大乘寺に

東隆眞先生が晋山

善光寺住職 黒田 武志

新緑に萌ゆる初夏。爽やかな六月八日。

古都金沢の名刹大乘寺に、前駒沢女子大学学長東隆眞先生が新命住職として晋山されました。

大乘寺は、正応二年（一二二九年）曹洞宗高祖・道元禅師の高弟、徹通義介禅師（永平寺第

三代）が開創。足利尊氏の祈願所ともなったという歴史ある古刹です。野田山丘陵の広大な敷

地、樹齢数百年もの古木に囲まれ、仏殿・山門・法堂などは、

国の重要文化財に指定されている仏教遺産です。この天下の名刹東香山大乘寺、その第七十二

世を継承するに、まことにふさわしいお方であります。

ご存知のように、師は、日本教育界の代表であり、教育者としてのご活躍がたいへん長く、

学校法人駒沢学園に四十年間奉職、その間中学校・高等学校の校長、そして短期大学・女子大

学の教授・学長を歴任されました。文学博士の師は、瑩山禪師研究会として比類なく、ライフワークともなっているそのご研究の真髄は、数多くの著書として残されております。

東隆眞先生と私は、大学・大学院時代の同窓知己。同学の畏友であり、私は横浜善光寺留学僧育英会の理事として設立より今日まで、並々ならぬご支援ご助力をいただけてきたという、深い法縁をして今日にあります。それだけに今日の慶事、それは私の無上の喜びであり誇りでもあります。

師に対し、私は新寺建立以来、発願する諸々につきご指導を仰

いでまいりました。都度肝にし
て要なるジャッジ。私の励みと
なり、自信となり、活動エネルギー
の源泉となつて下さったのです。

師は、常に大都会にあつて教
育界のみならず宗門内外の各種
行事にも多々参画なされており
ます。一寺に埋もれることなく、
宗門のためご研究と執筆活動を
通して、私どもに晋く影響させ
て頂きたいと願ったこともあり
ました。しかし師のご決意、原
点復帰、初心忘れず、道場に身
を挺する覚悟を承り、あまりの
潔さにただただ感服・敬服。か
くなる上は豊かな学識とご経験
を十二分に生かされ、宗風の高
揚と山門興隆にお力をお尽くし

頂くことを、唯々願わずにはお
れませんでした。

さていよいよ大乘寺新命住職
晋山が、莊嚴嚴肅な雰囲気の中執
り行われる。私の心は溢れんばか
りの感動で渦巻いておりました。
五人の侍者の方を従えた東新
命住職、総門で最初の法語を誦
み上げ、多数の檀信徒が迎える
参道を、山門・仏殿・法堂へと
おすすみになり、宗門内外の要
人や檀信徒が見守る中、儀式は
順々と進んでゆきます。

いよいよ晋山上堂。
まずは諸疏宣読の儀。「山門疏」
を大乘寺後堂・堂監土田國和老師
（山形県正光寺ご住職）。『門葉疏』
を中澤玄爾老師（秋田県宝蔵寺

（ご住職）。引き続き私は「道旧疏」を宣読させていただきました。

「道舊疏」

日域無双の禅林 東香山大乗寺
は 開祖徹通義介禅師の偉徳を
奉じ 並に観音大薩埵の威神力
に依る加賀の大法窟なり
新命 天籟隆眞老大宗師
本月本日の吉辰を以て晋山開堂
の盛儀を挙行せる

小納

新命老大宗師と等しく 一佛両
祖の正法を求め
曹洞宗学を振り 堂奥に出入す
正法眼蔵 行学一如の四十餘年
なり

此に於て 幾多懐舊の想念有り

今日の典禮 慶賀の至りに勝え
ず 謹んで単疏を呈して
以て賀懇を伸ぶるなり

夫れ 惟みれば

外には 浮華を去て 駒大の宗
学を博覧し
学会に満つる
内には 實徳を充たし 諸嶽の
選佛 活機の禅に参玄す
福慧雙修 智行両全たり
更に又 駒沢学園に学を弘め
承陽の玄旨に潜心し 祖息を仰
ぎ 教育機関に職を奉じては瑩
山の家風を追慕して 法幢を樹
す
今また 本師龍潭老鐵漢の後席
を担い 大乘禅寺に晋住するの
機縁を得たり



付して願くは

分座堤綱 洞山玄門を開顕して
無盡蔵

拈槌豎拂 海會の大衆に垂化し
て 最上の機たらんことを

維時 平成十五年六月八日

横浜善光寺守塔 道舊比丘

武志 謹んで疏す

私は、慶賀の念をこめて奏上
させて頂きました。

やがて師は、須彌壇上（説法
の法座）に登座。香をたき、国
家の隆昌と安泰、人々の幸福を
祈念し、関係者への感謝報恩の
誠を捧げ尽したのち、朗々たる
お声にて、

「朝朝、大乘寺と共に起き、夜

夜、大乘寺と共に眠り、大乘寺
と一体とならんことを願う」と
胸中のご決意を吐露なさいまし
た。そして、大乘寺専門僧堂安
居僧や来賓の僧たちとの問答が
活発に展開されました。

須彌壇上の風光を問われた師
は、即座に「独坐大雄峯」と示
され、「音なきところ、これ真の
音。響きなきところ、これ真の
響き」と。私はその何ものにも
妨げられない先生の澄み切った
無碍のご境地に、深い感銘を受
けました。又この家風峻厳たる
古道場で家風について問われる
と、「拙僧に家風なし。無心にし
て道にかなう」と。さらに「仏
法」についての問「高祖大師示し

ていわく。一毫も仏法無し」と。
太祖大師示していわく、平常心
是れ道」まさにその教えそのまま
にいかなる難問にも、何物にも
とらわれることない無心・平常
心のままで凛として即答なされ
た。私の心に印象深く刻まれ、
また堂内のあふれんばかりの人々
の心にも、あたかも砂に水が浸
み込むがごとく心地よく沁み渡っ
ていくように思いました。

続いてのご祝辞には、有田恵
宗・管長御專使（宗務総長）、武
田秀嗣・永平寺御專使（永平寺
副監院）、伊東盛熙監院・總持寺
御專使、三香美英舜石川県宗務
所長、檀信徒代表総代本多政光
氏が読み上げれば、東先生はこ

れを受けて、

「文字通り私は非力非才である。どうかこれからも倍旧のご指導ご支援をお願いしたい」と述べられました。

掉尾は、開山歴住諷経の導師を務めた前曹洞宗管長前総本山總持寺貫首・板橋興宗禪師が、「東隆眞大和尚は名声赫々たる学者だが、単なる学者ではない。少年時代、四国の徳島県にある太祖瑩山禪師初開の道場・成満寺で渡辺頼応老師について剃髮得度、そして東海道をわらじで歩いて鶴見の總持寺にたどりついて安居した。私も頼応老師の師翁に当たられる渡辺玄宗老師が、大乘寺から曹洞宗大本山總持寺

貫首に登ったときに頭を剃ってもらい、東住職の兄弟子にあたる。不思議な法縁です。どうぞこの大乘寺をさらに立派な修行道場にしていただきたい」と、垂示なさいました。

こうして晋山の盛儀は無事円成致しました。

尚、晋山式の前夜、加賀百万石の城下町高尾の森のホテルで、同期同窓の「駒大三心会（会長は東先生、副会長は私が勤めている）」の面々がこの慶事にと馳せ参じ、翌日に迎える荘厳な儀式を前に、感動的な祝宴が催されておりました。

青春をともし過ぎ、熱き佛教論を交わした三心会の同志で

す。皆一同に四十年の時を遡ったかのように、親しく懇談したり歌ったりと、慶事にふさわしく盛り上がった祝宴となりました。東先生のご晋山に随喜し、遠方よりご参加くださった三心会の皆様は次の通りです。

| | | |
|-------|------|-----|
| 五十嵐隆暁 | 長野県 | 定津院 |
| 大寺 忠章 | 埼玉県 | 西光寺 |
| 小倉 玄照 | 岡山県 | 成興寺 |
| 松田 憲英 | 新潟県 | 宝寿院 |
| 石井 孔寛 | 福島県 | 梵音寺 |
| 石附 周行 | 神奈川県 | 最乗寺 |
| 市河 雄峰 | 三重県 | 長樂寺 |
| 上本 英雄 | 愛媛県 | 観音寺 |
| 梅村 欣司 | 岐阜県 | 竜雲寺 |
| 大八木春邦 | 山形県 | 保春寺 |
| 影山 秀和 | 愛知県 | 智蔵院 |

| | | | |
|----|----|------|-----|
| 吉川 | 弘眼 | 東京都 | 勝興寺 |
| 佐藤 | 憲雄 | 新潟県 | 永林寺 |
| 篠崎 | 知足 | 長野県 | 地藏寺 |
| 清水 | 政文 | 岐阜県 | 桂昌寺 |
| 武山 | 梅芳 | 宮城県 | 江林寺 |
| 田村 | 淳一 | 山形県 | 林泉寺 |
| 辻村 | 英俊 | 熊本県 | 金性寺 |
| 寺口 | 良英 | 長野県 | 宗徳寺 |
| 洞外 | 文隆 | 神奈川県 | 本瑞寺 |
| 平岡 | 正堂 | 大分県 | 興禅院 |
| 藤田 | 俊孝 | 東京都 | 賢崇寺 |
| 宮下 | 博一 | 長野県 | 長谷寺 |
| 村上 | 義教 | 東京都 | 観蔵院 |
| 山口 | 碩永 | 三重県 | 光明寺 |
| 留守 | 孝道 | 宮城県 | 福厳寺 |

この三心会を代表し新潟県永
林寺の佐藤憲雄老師。さらに山

出保金沢市長、駒沢学園伊藤文
雄理事長・学長、東先生の金蘭
の友であるシーエスエム田中義
信社長、地元を代表して掘宗哲
老師（前大乘寺西堂）が祝辞を
述べ、乾杯の発声は大乘寺責任
役員の羽仁素道老師（迦葉山住
職）。三心会からは、代表して洞
外文隆老師（神奈川県 本瑞寺）
が、東新命ご住職に対して記念
品の目録を贈呈。その後、あちこ
ちで交歓の笑顔、よろこびの歌
声が響き渡っております。

でもある東新命住職を迎えるに
あたり、金沢の聖地であり文化
遺産でもある大乘寺を護り、隣
接地を公園化して緑豊かな心安
らぐ空間にしたい。五年後には
徹通禅師の七百回遠忌を修行さ
れるとうかがっております。市
として防災面で援助することを
お約束いたします」

と述べられたのが、たいへん印
象深く残りました。無心の尊い
お方の周りには、自然に、その方
を支援する尊い方々が、み仏のお
導きで現れるのですね。

師の最も得意とするところの
佛教による人づくり…。

私も師と同じ時代を駆け抜け、
同じ仏の道を通して、仏天の加

護は申すに及ばず、宗教家として、研究家として若き人々と接し、人材の育成・教育にご一緒できますこと、誠に欣快に耐えない思いです。

大典を終え、霊峰東香山の新緑が一段と光彩を放つ。

やがて金沢を後にし帰路につきました。が、列車の中、師が言い放った「大乘寺と共に起き、大乘寺と共に眠り、大乘寺と一体になる」この語が胸を衝き、師と私の四十年を思い起こしつつ、いよいよ禅風高揚にご専念され、その力が普く天地にみまざるよう祈念し、心の内で合掌し続けておりました。(了)



講演

生きがいのある人生

成寿山善光寺住職

黒田 武志

さる五月十六日曹洞宗団信徒会館において、黒田方丈は「曹洞宗婦人会」総会にて「生きがいのある人生」と題して講演を行いました。曹洞宗婦人会は全国千六百カ寺の寺院婦人会、総会員数五万人の団体で、広く活動を続けています。当日は熱心に講演に聞き入るみなさんの姿が見られました。

過分なご紹介をいただきました黒田武志でございます。先程総会も無事終わられた由、おめでとうございます。

曹洞宗の為に、仏法興隆のために御尽力くださっているお姿

に頭が下がります。この婦人の会も三十年近い年月。会もさぞかし盤石になられていることでしょう。曹洞宗の住職として御礼を申し上げます。さて、光明皇后というお方。

飛鳥時代今から凡そ千二百五十年も前の話です。日本の歴史の中で最も才色兼備の人であると思います。聖武天皇に東大寺の建立を勧め、悲田院・施薬院を造るなど社会事業に大いなるお

力を尽くされ、まさしく闇の中
に一条の光明を与えたお方です。

実に女性の力は大きいですね。

ある日、光明皇后にお告げが
ありました。浴室浣濯の行といっ
て老若男女に関わりなく千人の
人をお風呂に入れて上げなさい、
というものでした。やがて千人
目の人、ときに癩病のような人
が現れ光明皇后はびっくりする
のですねえ。それでもお告げに
従い、お風呂に入っていたら、
そしてその方の膿を吸い、身体
を洗ってさし上げると、その人
は仏様だったという逸話もある
お方です。まさしく仏語に謂う
一水四見。心の在り方を教えて
いる。

私も六十五歳ですから人生の
三分の二は終わってしまいまし
た。さあどうする。

私は、栃木県の大田原市という
当時は相当山深い田舎町の小さ
な寺の五男坊として生れました。
男ばかりの八人兄弟です。父の
教育方針は「学校は出してやる。
しかしその後は自分で決める。
一切面倒はみない。」というもの
でした。高校卒業後のことをあ
れこれと考えるようになってい
たのです。気ままな五男坊とい
うこともあって、未だ自分が僧
侶になろうとはその頃思ってい
なかつたのです。

つか世界中を歩く、そしていろ
いろなことを見てみたい、とい
う…。高校三年生の夏休み、僧
侶となっていた二番目の兄が、
アメリカに開教師として渡るこ
とになりました。そこで自分も
連れて行って欲しいと頼み込む
と、「お前、将来の道は決めたの
か？ お前は坊さんが似合うと
思う。親父だってそう思ってい
るに違いない。日本でじっくり
仏教を学んでからアメリカに来
い。」という兄の一言で心が決ま
り、私は僧侶になるため駒澤大
学に入学したのです。当時大学
の授業料年間九千円、大学院一
万八千円でした。アルバイトを
して授業料に充てたものです。

大学の卒業が近づき、兄に手紙を出すと、「大学を出たくらいでは何の役にも立たない。大学院へ行け。」と。大学院を修了し又手紙を出すと、「大学院を出たくらいではアメリカ人に仏教は説けない。本山の総持寺に行つてから来い。」そして「次は永平寺で修行を積んで来い。」。結局、十八歳の時に夢見たアメリカへ、実際に渡れたのは三十歳を過ぎからでした。

しかし、厳しく言ってくれたこの兄のおかげで私は、感謝の心も、お金の尊さも、生きることの尊さにも気がつかなかった自分の心を磨くすばらしい経験も二十代でたっぷりさせていた

だくことができただけです。

苦しい生活の中から駒澤大学の大学院人文学研究科仏教学専攻修士課程を修了させてもらい、曹洞宗大本山総持寺に修行のため上山し、十月にもう一つの本山永平寺に上山し、修行しました。これは僧侶となるための一般的過程です。しかし私は、どうにも満足できませんでした。伝統的、形式主義的な仏教的環境（形を尊ぶことに重きをおく修行）に身を置くうちに、いつの間にか自分の中から湧き上がってくる仏教への疑問、教団や寺院への疑問、そして自らへの厳しい反省がありました。こんなことでよいのだろうか。私に果

たして僧侶としての存在意義があるのだろうか、疑問と不安と焦燥に明け暮れました。

こうした悶々のうちに私は下山します。自分自身を寺院以外のところでとりなおしたいと決意したのです。

当時私の懐中には僅かなお金しかありませんでした。身に付けている衣一枚が全財産といつてもよいのでした。この金では帰れない。仕方がない。福井駅まで歩くことにする。歩くだけではダメだ。家々道すがら経をあげながら行こう。夕暮れにようやく駅に着き、発車のベルにせかされるように列車に慌てて飛び乗りました。ところがそれ

は反対に行く列車だったのです。巴むえをえないので富山というところで降りて、友人のいる寺を訪ねたて一夜の宿を借りました。これがきっかけで日本一蹴行脚が始まったのです。富山は仏教の盛んな地方でありますから一日の托鉢で八百円ほどいただし、こんなに集まるなら能登の大本山総持寺の祖院まで行こうと決心したのが始まりでした。

人間の生命は何て安いもんだろうなどと思いました。翌日も雨です。「今の俺に一体何ができるんだろう」と自問自答しました。「そうだ、俺は坊さんだったんだ。お経をあげることが仕事ではないか！」そう気がついて、宿の主人にお経をあげさせて下さいと頼みました。雨に濡れ、汚れた衣のままの私に主人は読経を快諾下さり、その上温かな白いご飯をご供養して下さいたのです。それ以上甘えるわけにはいかないと思つて、土砂降り

の雨の中に飛び出して行きました。しかし、誰も喜捨してくれ

女学生がたくさん現れたのです。私は校門に向いお経を唱えてみると三円、五円とみるみるうちに応量器にお金が入ってくる。その時でした。太陽がパーッと差したのです。

「ああ、私は生かされているんだ。人間は絶対に死なないんだ。」この身は仏様にお任せしていればいいのだ。人、一人ひとりの中に、仏様はいらっしゃる。「一人ひとりに感謝し、幸いになっていただくことが私のすべきことだったのだ！」

この時の感動をどう表現したらよいか……。実に感動的に確信したのです。それが私の人生の基礎になりました。私はそう

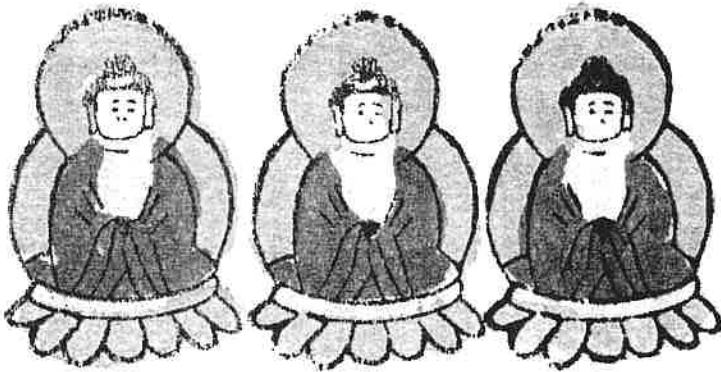
一杯の茶とコッペパンをかじり、

た二十円を見つめながら、茶碗

て雨が止み始めた頃、下校中の

して救われてきましたから、何も動ずるものではありません。苦境の中で大いなるものに救われたのです。生涯忘れ得ぬ思い出です。

さて、私は曹洞宗の僧侶です。『修証義』について少しお話をさせていただきます。『修証義』の「修」は修行、「証」は悟りのことであります。禅の修行は坐禅が中心であります。坐禅という悟りを開くために修するものと思う人もあるでしょうが、実はそうではないのです。もしそうだとすると、坐禅はすなわち修行の手段で、悟りは目的ということになります。確かに常識的には修行と悟りは別物で、



修行は先、悟りは後、修行の結果得られものが悟りということになります。これは至極もつともなことですが、禅では修行と悟りを対立させ、その間に思慮分別をさしはさむことを「染汚」といって嫌うのです。修行と悟りを対立させて、坐禅しながら悟りを待ち望む思いがあつてはならぬ。坐った姿がそのまま仏である、と教えるのであり、これを修証不二というのであります。

昨今、目的のために手段を選ばない「染汚」の行為が生み出したもの、それが環境汚染、公害、自然破壊、資源の乱開発等々、実に忌まわしい問題をも契機し

てきています。競争原理は時として人間の飽くなき欲望につながり、その弊害は私の最も危惧するところです。

取ってやる、奪ってやるといった態度で犯し続けてきた人間の飽くなき欲望の累積に対する報いが今や地球規模で人類全体の上のしかかつてきております。

私たちは今こそここで、あまりにも現実的、欲望的人間を中心としたこれまでの生き方、世界観を深く反省し、大自然の恵みによって生かされている人間の姿に目覚めなくてはなりません。生かされている自らの姿に気づいたとき、「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さん」とす

る誓願がおのずから生れるでありますよう。

『修証義』第四章は「発願利性」(誓願をおこして一切衆生を救うこと)を説いておりますが、

四通りの般若(智慧)として、

布施(むさぼらず、へつらわず、物でも心でも惜しみなく与える)

愛語(慈悲の心をもって、親が子に対するが如く、思いやりのある優しい言葉をかける)

利行(身体の行い、口で言うこと、心に思うこと、における善行で人々に利益を与えること)

同事(他人と心を一にして協

力し合うこと)

の四通りの実践項目を示しております。これはいずれも発願利生、忘己利他の思いやりを根底においたものであります。

婦人会会員の誓いはまさにこの四摂法そのものですね。「摂」とか「整える」という意見ですから、人と人が幸せになるための四つの条件をまとめて教えていると申し上げてよいでしょう。この四つのが、何時でも、何処でも、誰にでも、実行できた時、人は幸せになることができます。

「人間万事塞翁が馬」、これは中国の故事ですが、この意味は

もうご存知ですよね。

人生には何も善し悪しなどない。それこそ、よかったり、悪かったり、肝心なことは自分が今、置かれている所で精一杯生きることが大事なのです。そして仏様の教えを実践することこそが本当の信仰生活なのです。一日一日を大切に生きることです。虚しく過ごしてはなりません。明日をも知れぬこの生命ゆえに、朝には今日生命ある事を深く感謝し、夕べには今日の無事を感じて、改めて尊い日送りを中心から誓うのです。

今日一日の生命を大切に生きることこそが、感謝報恩の生活であり、仏教徒の生活なのであ

ります。

最後に瑩山禪師様について少しお話したいと思うのですが……
禪師の母君は大変熱心な観音信仰者でした。まだ京都在住の時、母（禪師の祖母）と別離してしまい、七、八年行方知れずでした。ある日、清水寺（本尊の十一面観音菩薩）に七日、日参の願をかけたところ、六日目に参拜の路上で十一面観音の頭部を見付けたのです。この機縁に驚き、十一面観音にさらなる願をかけたところ、翌日母の使者と巡り会うことができたというものです。この因縁を重んじ、尊像を補修され一生頂戴の念持仏とされたのです。また、この観

音様は瑩山禪師のご生涯にも深い関わりがあるのですねえ。

禪師の母君は、なかなか子供を授かることができなかったの
で、十一面観音に祈願をかけたところ、その願いが叶い、三十
七歳の時、朝日を飲み込む夢を
みて、ご懐妊を確認されたとい
われています。そして「もし私
の子が、成人となり、善智識と
なって、人天のために益する人
になるならば、どうか安産させ
てください。もしそうでないな
らば、観音様、威神力をもって
胎内で朽失させてください。」と
祈られ、毎日『観音経』を誦
して礼拝されたそうです。その
後、ご出産のため多彌観音堂の

産所に行く途中で瑩山禪師を安産され、このことに因んで名前を行生と名づけたといわれています。

このように母の篤い観音信仰の影響を強く受けて育ったことが、後に禪師の出家の機縁につながったのではないかと考えられています。

瑩山禪師は、いってみれば、観音様の申し子であったのです。そして、ご生涯を通じて、観音様と一つであったのです。

自身を観音様の申し子として自覚する、そのことが後に衆生済度の誓願へと発展してゆくのです。

誓願は、瑩山禪師にとって大

変重要な意味をもっており、禪師の生涯は誓願に貫かれていたということもできるのです。その誓願の一つが諸々の人々を救済したいという衆生済度ですね。

そしてもう一つが、女性を濟度する菩薩になりたいというものでした。お母様が女人救濟、つまり女性の幸せのために尽くしてくださいと遺言されたことを、禪師様は強い誓願として、かたときもお忘れにならなかったのです。

禪師は檀家さんをとっても大事にされた方で、檀家さんを仏のように敬い、寺檀一体となって仏法に對しなければならぬという強い誓願も立てておいで

した。

家族構成の変化・地球・社会の変容が顕著なこの時代だからこそ、私たちは檀信徒との関わりを大切にして布教・教化を實踐してまいりたいものです。

日本で大乘仏教を見直す

バンジヨブ・バナルジ博士

(タイ・チュラロンコン大学教授)

横浜・善光寺(黒田武志住職)の招請により、訪日したタイのチュラロンコン大学教授バンジヨブ・バナルジ博士は、将来同大学の学長候補に目されている前途有望な学者である。

博士は一九五三年の生まれ。タイ国人の習わしとして、子供のころより仏道に入り、上座部仏教の教えに帰依している。十歳でシャミ、二十歳で得度し、二十八歳まで僧侶生活をした。

その間、マハチュラ・ブツディスト大学(仏教大学)を卒業し、チュラロンコン大学院修士了、インドのマガダ大学で仏教哲学を専攻し、博士号を修得。現在はチュラロンコン大学で仏教を教えている。一九九五年、アメリカでのブツディスト・カンファランス、二〇〇二年、WFB(世界仏教徒会議)マレーシア大会などの国際会議に出席し、著書は二十六冊に及ぶ。

バナルジ博士は十八年前、立正佼成会に招請されて訪日し、昨年は黒田武志師のタイでの講演などに触れて大乘仏教を再認識、大乘仏教を見直そうとしている。「上座部仏教の国々に比べて、大乘仏教国の発展ぶりをまざまざと見せつけられるにつけ、その背後に大乘仏教があるのではないかと思うようになった」と、大乘仏教を研究する動機を述べた。黒田師は、大乘仏教の長所を学んでもらおうと博士の訪日を実現させた。

「日本にきた直接の契機は、昨年タイの私の大学で行った黒田老師の講演で、はじめて大乘仏教の講演を聞いて大変感動した学長に、日本で大乘仏教を学んできたらどうか、と勧められたからです。今回は、曹洞宗の修行道場、大学、寺院、宗務庁など曹洞宗の施設を中心に訪問しました」

日本について、「日本はタイが持っていない知

恵を持っている。小さい国だが、大きいことができる国だと思った。それは大乘仏教から来ているのではないか」と感想を述べ、「タイでは、大乘仏教が今後の世界にも期待できる仏教の姿ではないか、という意見が出てくるようになっていく」と語った。

上座部仏教徒大乘仏教との違いについては、「五十年前、クリスマス・サンフリーという英国の仏教学者が、大乘仏教と上座部仏教を比較したときに、大乘仏教の国の方が金持ちだと指摘していた。その時点で納得もしていた。その理由は、上座部仏教では、仏教家の視点から見ていて、発展を経済面で考えない。宗教面での発展とか大事にしている。経済発展とはつながりにくい面がある。だが、大乘仏教は、仏教と違う形で経済発展と一緒にしていると感じている」と言う。

また「スリランカやタイでは天然資源が豊か

なので、外に向かって発展する気持ちが弱い。日本は資源が乏しいため、外へ向けて発展しようとしたのが、経済発展につながったのではないか。また、日本が戦争に負けたことも経済発展につながった」とも。

「上座部仏教は、個人の悟りの完成、阿羅漢になることが目的で、それが一生涯とすれば、内面の完成のみを考えて、周りの発展、環境、社会をどうするとか、考える余裕がなかったのではないか」と質問されると、「阿羅漢について、タイでは今議論されている。阿羅漢というより、菩薩という精神、ゴールが、他人を助けるとか、社会を良くするのではないか、という議論がタイで起こっている。上座部仏教では、菩薩的な行動ができる人は、お釈迦さんだけと信じている。みんなができるということでない。私たちがそれをできるといふ考えは上座部經典には書いていない。大乘仏教を取り入れるという動き

は、トップ層ではなく、また大学と関係ある僧侶たちや学者に限られている。特に、現代教育がその役割を果たすのではないかと思っている。」と答えている。

日本仏教での妻帯については、「日本にきて驚いたのは、お坊さんが結婚して子供を生み、お酒も飲むのに、日本人がそのようなお坊さんを尊敬していること。酒を飲み、肉を食べても、尊敬されているのは、何かいいことをしているのではないかと思った。日本の仏教は、僧侶の結婚を最初から許していたと思っていたが、いろいろ調べてみると、そうでなく、妻帯は明治以後だということを知った。勉強する価値があると思う。今後、日本の仏教の歴史を研究テーマにしたい」と感想を語る。

他の宗教との対応については、「タイでは、仏教、キリスト教、イスラム教の人たちは、別々に住み、働いているので、互いにコンタクトし

ないが、むしろキリスト教やイスラム教の方が
仏教より閉鎖的なのではないか」と、温和な中
に厳しい目ものぞかせた。バナルジ博士の話か
ら、タイも激変の時を迎えていることがうかが
える。

(宗教新聞より転載)



バンコク週報より

日本人僧侶

新米。プラジープン

プラスチー松下

パクナム寺・元短大教授

僧侶生活のなかでの失敗例

(二〇〇二年八月十六日～二十二日号)

短期出家だからといって二百二十七ある戒律のいくつかは守らなくてもいいということはない。少年僧(サマネーン)は十の戒律を守るだ

けでいいし、尼僧(マーチー)なら八戒律でいい。しかし、一般僧侶の場合、そうはいかない。私がつけている日記には、戒律に関する話題が少くない。

二〇〇二年五月三十一日(土)

この一ヶ月間のトラブル・失敗例としては、合掌返し事件、そば捨て事件、正装姿で道路のポストに行った事件、下着の不着用事件、自室の仏像を移動させた事件、若い僧へ文句を言った事件などがある。

これらはすべて他の僧から注意されたものだ。「合掌」は僧侶から信者や一般の人にしては絶対にいけない。しかし返礼や感謝の気持ちを示すためについでしまった。「食事」はすべて食べないといけない。必要な量を共通のスプーンで取り、たとえ美味しくなくとも、残したり捨てたりしてはいけないのだ。

「正装姿」で寺の中ならともかく、人目につく場所に行つてはいけない。その場合には外出姿に着替えなければならぬ。寺の中の姿（授業や瞑想会にいく際の格好）でもいけない。また、「內衣（上下）」は自室とその周辺、ないし外の仕事の時でも必ず着用することが必要だ。

「仏像」は置く位置や方角が決まっている。

部屋の窓から雨が降り込んでくるので模様替えをしたが、置く場所が正しいかどうか自信がなかった。先輩僧に聞きに行ったところ、やはり間違っていた。また、たとえ相手が「若い僧」であっても、文句や注意を感情的に言つてはいけない。一日でも早く出家したら年齢・学歴・国籍は関係なく従わないといけないのだ。私の場合、相手は外国人の僧侶であった。

それ以外に指摘されたことはないが、無意識のうちに戒律に触れていることもあるかもしれない。

食事以外では女性との関係が特にやかましい。物の授受や話題、部屋への招き入れ、席などいつも気をつけないといけない。タイ人女性は相手が気をつけてくれる。しかし外国人は無関心なのでこちらが神経を使うことになる。

戒律や生活にまつわる大きな事件は、パクナム

寺ではあまり聞かない。私がここに書いた「戒律違反事件」はまだ雛の事件なので、その後で懺悔をすましてしまっている。

戒律のなかでもっとも重要なものは「殺さない」ということである。部屋のなかの蟻や蚊を追い出すのは一苦勞だ。何匹かは無意識に偶然に踏んで殺してしまうことがあるので、この時も懺悔が必要となる。なお、懺悔は朝夕の祈りの時に毎日二人組で行う。

そのほか、戒律ではないが、タイ式座り方、仏教儀式の際の祈り方、黄衣の着方、座ったままの食事の仕方は、暑さや生活環境が違うので慣れるまでは苦勞が絶えない。しかし元パクナム寺で学び、留学僧を沢山育てている横浜・善光寺の黒田住職によれば、「宗教は理想であり、人間の最も美しい姿と心を教えています」（留学僧育英会論文集VOL14）とのことである。

次号は「何故私が出家したか」を少し具体的に

に紹介する。

新米日本人僧侶の心の変化

（二〇〇二年九月十五日〜十九日号）

出家後一か月で少し慣れ、二か月で何とか慣れ、入安居に入った。そして、その後どうなったかといえば…。

衣食住そして学が保証された寺での生活、それも灼熱の異国タイでの生活で、何を学び何を感じ、また何をやる事ができたのだろうか。

振り返ってみると、出家以前はバラ色であった。準備に充分時間をかけ、出家式（得度式）が大きな山場となった。そしてそれはうまくいった。

しかしそれ以降が大変だ。パクナム寺ではタ

イ人高僧をひとり知っているだけで、私以外日本人はいない。僧坊のある建物は外国人ばかりで英語が共通語、その上皆が三十八年といった古参。指導してくれる先輩僧や修行の相談者がいない。それでも、チベットから来た僧（ロシア国籍）が生活面のアドバイスをしてくれるので助かった。しかし言葉はタイ語がダメ、英語も少しのため余りコミュニケーションができない。だが勘がよく、仏心ももった親切な僧である。

ある時、「人間関係を広げるためには日本語講座を主催したらよいのではないか」と思い立ち、出家して半月ほど経ってからスタートしてみた。カンボジア、ネパール、タイ人の四名が口コミで申し込んできた。しかしその後だんだんと仏教大学の勉強が忙しくなり、一人二人と減っていった。私のタイ語の勉強にもなるのだが、人より日本語のレベルが違っていたため結局は収

拾がつかなくなり、教えるというのではなく日本語サロン風にした。私の方でも、寺にいる誰でもがタイ仏教とタイ語の先生である、との認識に切り替えることにした。

パクナム寺での仏教の授業は専門語や固有名詞が多く、辞書もなく、タイ語・英語の辞書をやっとの思いで探した。「テラワード仏教は簡単にはわからない。二年はかかる」と、前に居た日本人僧侶と比較され、度々授業で言われるのでまたまた落ち込む。三人の先生がすべて、タイの仏教を勉強に来ている日本人の私に親切ではあるが、特別扱いをするわけではない。毎週あるテストの時間中、本を見て答案を書くことを許可されているくらいのものだ。

ただ日本の宗教の悪口（戒律が甘い、など）を比較論で言う先生もいる。ほぼ事実のため反論できないが、ただタイ人僧侶は日本の仏教事情を知らなすぎる、という面も否定できない。

私がどこまでタイの仏教を理解できたか。その勉強の成果を早く論じたいものだが、ここではタイ仏教の良さを三点だけ強調しておく。

1、「仏教が社会・国家の規範になっている」。

国旗の三色が意味する「国王・仏教・国家」がそのことを如実に表している。

2、「僧侶は良く勉強をしている」。特に原点（戒律・法）を忠実に守っている。

3、「お寺がその地域の中心になっている」。心の拠り所でもあるのだ。

「外国人がタイの仏教を分かるのか」とつづやいたタイ人女性がいた。しかし、国際的な宗教である仏教は、もっともつと広く開放・拡大すべきではなからうか。ただ「チャー・チャー（タイ語で『ゆっくり』の意）」と。

将来タイ人以外の外国人が僧伽（サンガ、二派ある）のメンバーなどに進出してくる可能性もあるし、尼僧の地位が向上したり（すでに外

国人僧寺や尼僧寺がある）、また僧侶が政治に参加したり、社会事業によりかかわるようになれば、その評価そして我々との距離も変わってくるだろう。

もちろん日本の仏教の国際化（インドには著名な日本人僧・佐々井秀嶺）がいる）、またタイなど諸外国との仏教交流（六月末、曹洞宗は初めてタイとの仏教交流を実施した）が強く求められるのは言うまでもない。

そんな夢を持ちながら今はただひたすら有り難く学ばせてもらっている。

パクナム寺の献血奉仕活動

（二〇〇二年九月二十七日〜十月三日号）

信者からの寄進は寺の改築・修繕や僧侶の衣食住などのために使われるが、その反対に寺か

ら信者への「寄進（「逆タンブン」とでも言おうか）も結構ある。僧侶は寺で学問をし、そして修行をするわけだが、その一方で寺は、地域住民のために橋をかけたたり、学校を建てたり、衛生面の指導をしたり、森林を保護したりと、実に多くの活動をしているのだ。

寺に行くとき募金箱が置いてあるのをよく目にするだろう。集まったお金は関連団体に直接渡すことになるが、そのほか、特別な奉仕活動を寺院内で行うこともある。

例えば、私が出家しているパクナム寺（バンコク）の献血活動は約三十年の歴史がある。一年に四回、寺の庭内でタイ赤十字の衣料スタッフが一人当たり三五〇CCの採血を行う。今年七月五日から七日にかけてこの献血が行われたが、三日間で二千七十四人の市民の協力を得ることができた。継続して参加する者も多く、この時は僧侶も積極的に献血する。

この献血活動はラジオでも報道されており、過去八年間、毎年九千人前後が参加している。

なお、最も献血者が多かったのは三年前（仏暦二五四二年）で九千五百九十九人を記録した。『一〇〇回記念誌』より）

同プロジェクトの代表である、パクナム寺のチャイ・キツサロー僧は「多くの人がこの献血活動に理解を示しています。今では献血だけでなく、眼球・骨・臓器の提供者も増えています。これまでに、寺で集めたお金で献血車を一台、タイ赤十字に寄贈しました。次回の献血は十月十一日から十三日まで行いますので、是非寺参りをおねえてお越しく下さい」と話している。

なお、十五年前、私がこのチャイ・キツサロー僧に初めて出会ったのは、献血基金のアップीलのため来日した時のことだった。

ワットパクナムパーシーチャロアンについて

ワットパクナムの概要

ワットパクナム（ワットは寺）は、アユタヤ王朝時代（西暦一三五〇—一七六七）後期の十八世紀はじめトンブリー地域（パクナムとは「河口」の意味）の現在地（パーシーチャロアン）に建立されました。しかし当時の資料は現在見当たらず規模や陣容はわかりません。

その後、仏暦二四六〇（西暦一九一七）年にプラモンコンテープムニー（西暦一八八五—一九五九）が僧正になってから飛躍的にクローズアップされた寺となり僧侶数・施設そして教育・訓練内容が拡充されてきました。特にルアンポー（偉大な父）ワットパクナムとよばれる瞑想の

理論と実践法は全国的に著名になりました。また、ワットパクナムの他の寺と異なった特徴は、規模以外に尼僧の大量受入れと養成、海外との交流や外国人僧の受入れと養成そしてパーリ語の教育の拡充発展もプラモンコンテープムニー時代に行われています。

現僧正のソムデットプラマハーラチャマンカラチャーイン（西暦一九二五年生まれ）は、前僧正の跡継ぎとしてますます拡充発展させタイ僧伽（サンガ）のマハーニカイ派の最高長老（ソムデット）を仏暦二四三八（西暦一九九五）年から務めております。僧正には仏暦二四〇八（西暦一九六五）年になっております。新たに加わっ

た社会的事業は、三十年以上にわたる当寺での
献血活動で、タイ赤十字をはじめ多くの関連団
体と信頼関係を築いています。これらを発展さ
せた社会的事業に多く挑戦しています。

規模と陣容

僧侶数は入安居（あんごう）の日、仏暦二五
四五（西暦二〇〇二）年七月二十一日で僧二六
一名、少年（見習い）僧五三名、尼僧一四八名
の合計四六二名です。寺院内には大きく八つの
組織があり、担当は内容によって人数が決めら
れています。副住職格の長老僧が八名いて責任
体制が確立されています。いくつかの行事や企
画には古参の僧が随時協力して行っています。

主な施設は、他の寺と異なり瞑想発展会館（ホー
チロンウツパサナー）、モンコンテープムニー
を偲ぶ会館（ホーソンウエーチアニアモンコン
テープニーラミッツ）、ルアンポー一〇〇歳記念

場（アムソーン）、特別法身ビル（ツークピッセ
イタンマカーイ。図書館一階、美術館二階）、発
展記念タンマ經典学校（ローンリエンプラプリ
ヤッテイタンマタワナムサン）をはじめ他の
寺と同様にあるウボソ（布薩堂、僧の礼拝堂）、
プラタビドー（教典書庫）、サーラー（ホール、
大食堂）、ウイハーン（仏堂）とウイハーンコー
（信者の納骨所）、クティ（僧房）が大小十五棟、
あります。そして広い駐車場や庭石が動物に似
たのをあつめた庭園もあります。

ワットパクナムは運河に面しているのでワッ
トパクナム港もあり、チャオプラヤ川からの船
の交通手段は便利です。また、市内（4・9番）
は、ここが終点なのでわかりやすいです。

瞑想（ウツパサナー）とプラモンコンテープムニー

毎日朝と夕の二回瞑想会が「瞑想発展会館」
の二階で行われています。常時は、僧侶・尼僧・

信者の二〇〇名前後が参加しています。最大四〇〇名は収容可能で冷房も完備しています。

ほぼ三十分法話、三十分お経・三十分瞑想の一時半です。土・日は、昼間二回、仏陀の日は、昼間一回追加されます。瞑想の効能は、精神の安定や洞察力が養われることから悟りまでの段階があり、続けることが大切です。プラモンコンテープムニーの理論は、呼吸法から始まります。イメージした水晶球を鼻から引き入れ臍（へそ）の真上までの七ステップで移動させ停止させる理論と実践法です。

寺の行事

年間行事は他の寺と特に変わる事はないです。マハーラハブーチャー（万物節、三・四月）、ウイサカブーチャー（仏誕節、六月）アッタミブーチャー（仏陀誕生日、六月）、アサラハブーチャー（三宝節、八月）の四大家事があります。また、

毎月の新月と満月には戒律を確認する儀式の「パティモーク」があります。その他寺全体の参加行事以外には寺の支援協会主催の僧正の誕生日行事や尼僧会団体からの寄進の行事等が随時あります。

僧の一日

朝四時には起床のため寺の鐘がなります。六時からサーラー（大食堂）で朝食、食事後布薩堂（礼拝堂）で朝の祈り。托鉢はワンプラ（仏陀の日）以外は認められていないのでサーラーで僧正以下一緒に食べます。信者からの寄進の受け取りや金銭での布施の感謝状交付も食事前後にサーラーで行われます。食後午前から学校に行く人、瞑想に行く人、自房で勉強する人がいます。そして最後の食事が十一時からの昼食で、すべてを十二時までには終わらないといけません。午後からも学校に行く人（仏教大

学や寺院内)、自房で勉強する人がいます。夕方五時からが夕の祈り。その後瞑想会に参加して一日が終わります。安居期間中は特別プログラムが加わります。また外出は祝賀・式典などの行事や昼の食事招待が多いです。個人的な用事もそれらの合間に行い、自分ですべてします。

出家

「得度式＝ブアット」といって僧正や戒師などの参加によって審査されます。条件は、二十歳以上である、男性である、親の許可がある。債務がない、身体に障害がない、特殊な病気がない、などです。そのためのパーリ語のお経によって式がすすめられるので暗記が必要です。

ただ少年僧＝見習い僧（ほぼ七歳から二十歳未満）は、条件が異なります。また、出家期間は決められてないのでいつでも還俗できます。

日本とワットパクナムとの交流

戦前から五十名以上の日本人が当寺で出家・修行しています。その後多くの国や寺そして分野で活躍しています。日本でも僧侶だった方からタイの仏教を勉強される方までいろいろです。

ワットパクナムで修行をする人のために審査をし、金銭面で支援している留学僧育英会（横浜・善光寺内）では既に一九八五（昭和六十）年から現在迄十四名を支援しています。また、真如苑（立川市）からワットパクナムへ涅槃像の寄贈（美術館に展示）があり信者の方がよく訪れています。当寺の運河側にタイ語・英語・日本語での寺の看板があります。

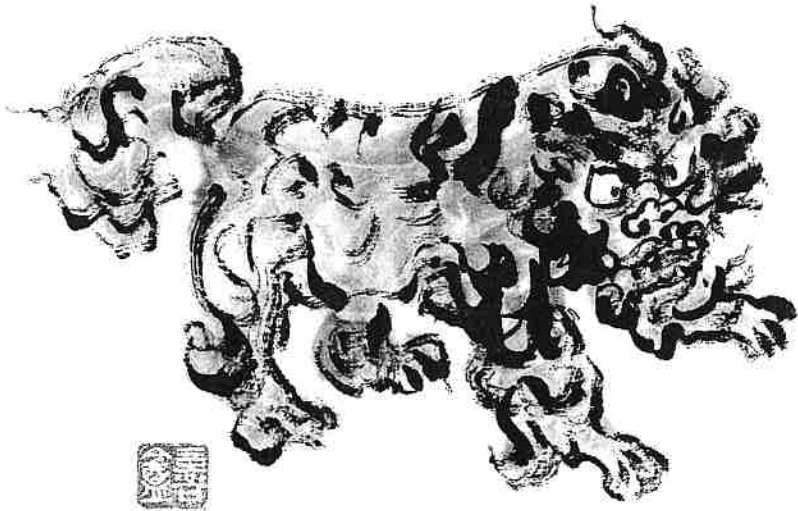
ワットパクナム日本別院

在日の一タイ人の寄進から始まった本格的タイ寺院です。仏暦二五四二（一九九九）年十一月十四日に地鎮祭が行われ、仏暦二五四六（二

〇〇三) 年春完成の予定です。

千葉県香取郡大栄町二九四一(0478-7318090)にウイハーン(仏堂)を建立しています。

現在二百二十七の戒律を守ったタイ人僧侶もおり、とくに在日タイ人が土・祝祭日には数多く訪れています。



留学僧からの 便り

拝

啓、益々御健勝のことと存じ上げます。

さて、私計良龍成は、スイス・ローザンヌ大学文学部に提出した学位請求論文の審査に合格し、今年四月八日に約7年半半の留学生活を終え日本に帰国しました。また帰国後、再びスイスに赴き、六月二十三日に行われた公開審査(soutenance)を無事通過し、ローザンヌ大学文学部から文学博士(Doctorat ès Lettres)の学位を戴けることになりました。この学位取得に至れましたのも、多くの先生・先輩方・友人たちの御指導、御支援があったからだと痛感しております。帰国後も、仏教研究に精進していく所存であります。どうぞまたこれからも、御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

敬具

二〇〇三年七月三日

計良 龍成



拝啓

お元気ですか。ご無沙汰いたしました。

今年の方開寺の十二周年になり記念の法要をいたしました。

ご寄附をいただいた方の感謝を深くお伝え申し上げます。

日本をたずねお会いできる日を楽しみにしています。

九拝

ZENKOJI
様

浄信

- 2000年4月 カンボジアを旅行（1週間）。
7月～10月 ワット・パクナムにて雨安居。昨年に引き続き教理（ナクタム）を学習。
11月 ナクタム3級の認定試験に合格。
- 2001年1月 ミャンマーを旅行（約3週間）。
6月 渡緬。パオク・メディテーションセンター（モーン州モーラミヤイン市）に掛塔。アーナーパーナーサティの修習始める。
7月～10月 パオク・メディテーションセンターで雨安居。
- 2002年7月～10月 パオク・メディテーションセンターで雨安居。
12月 パオク・メディテーションセンターを送行。シリモンコン寺（エーヤワディ管区テコ村）を訪問。瞑想修習会（10日間）に参加。
- 2003年1月 ナンクトウ山岳修行場の瞑想修習会（14日間）に参加。
2月 離緬。タイ国ワット・パクナムに戻る。ワット・カオクリン（ペップリー県）の別住行会（10日間）に参加。
3月 スワンモック（スラータニー県）の瞑想修習会（15日間）に参加。
4月 上座部を還俗。帰国。

真野留学僧からの修学報告

横浜善光寺留学僧育英会の第14・15回の真野大成育英僧より6年間の修学報告がありました。平成9年の6月にタイ国ワット・パクナムに入られ、平成15年4月に無事帰国されました。下記に6年間のタイ、ミャンマーにおける上座部仏教の修学・修行状況を記します。

- 1998年6月 渡タイ。
7月 上座部受戒得度。
7月～10月 ワット・パクナムにて雨安居。約80名の一時僧と共にスワットモン(経典の誦唱)等の訓練を受ける。
12月 ワット・ルンポーソツ(ラジャブリー県)の瞑想修習会(15日間)に参加。
- 1998年3月 マハーチュラロンコン仏教大学の瞑想合宿(ペンチャブン県・1週間)に参加。
7月～10月 ワット・パクナムにて雨安居。タイ語を自習。
12月 ヴィヴェークアーソム・メディテーションセンター(チョンブリー県)にて、純毘鉢舍那法による瞑想を修得(約1ヵ月間)。
- 1999年1月 ブリーラム県で行われた村民の瞑想修習会(5日間)に参加。
4月 ワット・サダム(シーサット県)のサマースクールに英語の講師として参加。
7月～10月 ワット・パクナムにて雨安居。寺の学校で教理(ナクタム)を学習。
12月 スリランカを旅行(10日間)。

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (L A禅センター)
“923 S.Normandy Ave., LA., CA90006 U.S.A”
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
“Box 197,Mt.Tramper,NY 12547 U.S.A”
3. Zen -Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
“Eisenbuch 7 D-84567 Erlbach Deutschland Germany”
4. Wat Paknam (ワットパクナム)
“Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand”
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成16年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文 (次項による)
 - 論題
 - ① これからの国際興隆と仏教の役割
 - ② 世界平和と仏教徒の誓願
 - ③ 留学僧として私はこれを学びたい
 - ④ 異文化の中で仏教を学ぶいずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上 (A4版タテ書き)
2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成16年度2～3名

平成15年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成16年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 20 回 生

横浜 善光寺 留学僧募集

平成16年度・2004

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

スリランカとの国交樹立50周年記念し

親善使節団が現地訪問

横浜・善光寺の黒田武志住職は、三月八日から十二日までスリランカを訪問。九日にコロンボのバンダラナイケ国際会議場で開催された「世界平和祈願コロンボ大会」で「ダルマパーラの贈り物」と題して基調講演を行う。仏教復興に身を挺した大菩提会の創設者・ダルマパーラの業績をふり返りつつ、二十一世紀の人類が世界平和のために仏陀の智慧から何を学ぶべきかを問いかけて大きな反響を呼んだ。

使節団は終始国賓待遇の歓迎を受け、元駐日大使のK・コデイトウワック人的資源開発・教育・文化大臣、ピパッシ財団のペルポラ・ピ

ニュース・アラカルト

パッシ理事長、スリランカ大菩提会のB・ウパティッサ会長ら政府要人や仏教界長老らと交流を深めた。

一行はまた大菩提会本部での盛大な歓迎式典に出席。また孤児や障害者など多くの子供たちの救済活動を展開しているサルボダヤ運動の瞑想施設を訪問。さらにキャンデーの仏歯寺やダンプーラの石窟寺院を巡拝し、シギリヤ城砦に登行するなど各地で仏教国スリランカの歴史と文化にふれた。

黒田団長とその一行のスリランカ訪問は、まさに仏教を通じた日本・スリランカ交流史の新たな扉を開くものといえる。

国賓待遇で歓迎受ける

昭和二十六年九月にサンフランシスコ対日講和条約締結。翌年四月の条約発効から数えて昨年は頂度五十周年。同時に成立したスリ

ランカとの外交関係も五十周年。それにともない国家レベルの記念行事が日本各地でも開催された。日本の仏教関係者によりスリランカ訪問友好親善使節団の派遣も、コディトゥーワツク大臣から正式招待の招請状が届きその結果両国交流の推進・発展を願って計画されたものです。

かつて「インド洋の真珠」と呼ばれたスリランカは、戦後イギリスから独立して自立の道を歩み始めるが、国内の安定は容易に得られず、政権抗争や民族間紛争をくり返してきた。こうした中でも、スリランカは日本にとって最も友好的で大恩のある国として、文化・技術・経済の多分野にわたり深い交流と協力の関係を維持してきた。

使節団は団長を支える、統括本部長に「心のひろば」主宰の武本俊氏、事務局長に報恩閣住職の釈正輪氏が就き、総勢八十人にのぼっ

ニユース・アラカルト

た。

歴史的意義持つ訪問

首相執務室を表敬

十日、黒田団長らは首相執務室を表敬訪問のち、ガンガラマヤ寺を訪問。

使節団に対するこの度の訪問。何処を訪ねても歓迎ぶりは熱く、到着時、コディトゥーワツク大臣から「この国はいま大きく変化しつつある。本来は厳重な警備体制の中にあるが、皆さんは自由に行動できるようになった。日本とスリランカの交流を向上発展させるのが私たちの使命であり、仏教を通じた交流はますます発展すると思っている。この訪問は歴史的意義を持つだろう」と歓迎の言葉。それを裏付けるように至れり尽くせり、旅団にとっては忘れ得ぬ想い出となった。

ダルマ・パーラの智慧語る

黒田武志氏が記念講演

大菩提会本部へ

大菩提会への道のりは、騎乗兵や象、小・中学生の音楽隊、民族衣装を着た舞踊団らの大行列。三百人の浴道は歓迎一色。大菩提会本部での使節団は、黒田団長に導かれダルマ・パーラへの献花。本堂で仏陀像に向い読経した。のち、大講堂で歓迎式典が開かれ、大菩提会副会長のカル・ジャヤスリヤ・エネルギー大臣からの歓迎の言葉があり、ラニル・ウイックラマシンハ首相から熱烈歓迎のメッセージが読み上げられた。

また、ジャヤスリヤ大臣から黒田団長に感謝状が贈呈され、黒田団長からは記念品が贈られ

ニユース・アラカルト

た。黒田団長は席上、善光寺留学僧育英会の理事長として、平成十五年度・第十九回留学僧に採用したスリランカ僧のダガマ・マイトレイヤ氏に辞令を伝達。バンドラ・グナワルダナ農村経済・財政大臣は「私たちの国の目的は平和を取り戻し、経済的に発展することだ。これを果たすためには日本の協力が要だ。日本は、これまでわが国に対し最も多くの援助をしてきている。こうした交流はわが国の発展のために大きな力となると思う」と挨拶した。

また国際会議場では、肖像画と歓迎の横断幕。政府関係者や僧侶たち、子供たちや音楽隊、そして舞踊団が長い列を作って使節団を歓迎。会議場は聴衆で埋め尽くされ、使節団による献茶式、野党党首マヒンダ・ラージパックサ氏の挨拶、使節団による読経の後、黒田団長の基調講演。その中で、ひときわ声を高くして。

「一人の人間、一つの民族、一つの国家だけ

が平和で幸福ならそれでよしとする価値観があるとするなら、それは葬り去られるべき過去の遺物といわねばならない。貴国が生んだ世界最大のNGO（非政府組織）、サルボダヤ運動の創始者アリヤラトネ博士の提唱される『サルバ・ウダヤ（みんなのめざめ）』の思想こそブッダ・ダンマの原点であり、ダルマ・パーラが私どもに残してくれた贈り物そのものといえよう——と黒田団長は訴えた。

最後に黒田団長は、寛容と慈悲の演説から、「法句経」の一節を引用して講演を終え、会場は大きな拍手に包まれた。

やがてサルボダヤ運動の瞑想施設を訪れた使節団。この運動の創始者アリヤラトネ会長と歓迎のひとつときをもった。会長よりキングココナツの実にストローを差した手造りによる飲み物のおもてなしをいただいた。会長は孤児や障害者など多くの子供たちの救援活動を展開し、庭

ニユース・アラカルト

野平和賞を受賞。その賞金を使って、アリヤラトネ会長は、この瞑想施設を整備したと語った。

俳句

節分会にちなんだ俳句が、お檀家の松本道宏氏から寄せられました。ご紹介いたします。

節分会

松本道宏

合掌の挨拶拝受節分会

雛壇に目無し達磨や節分会

節を説く落語口調や節分会

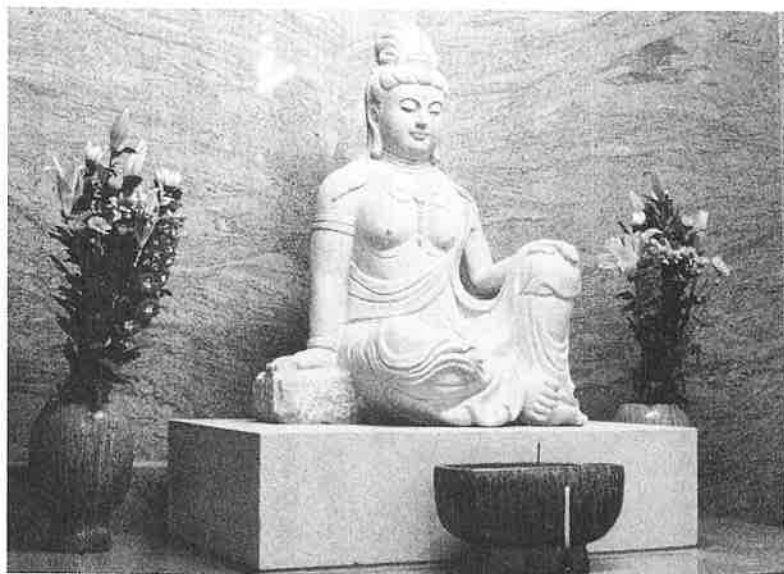
節分会般若心経大合唱

不況という鬼を払へり節分会

つつがなく迎えし古希や追儼豆

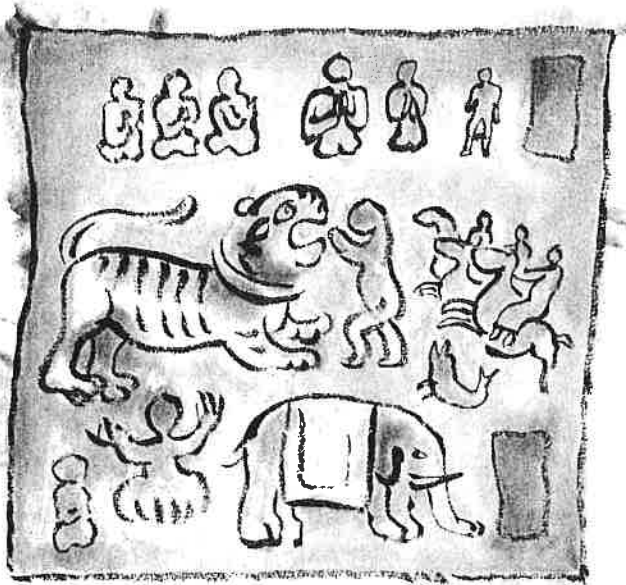
身の内邪氣払はるる追儼豆

赤鬼の面より貰ふ追儼豆



— ニューズ・アラカルト —





*The story of Gubbins
9th Century*



読者のために

「成寿」が楽しみ

孝道山統理 岡野正貫 猊下

横浜市

「成寿」ご恵送ありがとうございます。感謝申し上げます。ドイツでの道元禅師七五〇回大遠忌記念ゼミナール、タイ国での世界仏教徒連盟にての老大師さまのご講演、その他大変興味深い記事満載の貴誌冬季号を楽しみに拝読させていただきました。

一層のご活躍を

水野弘元先生

世田谷区

「成寿」拝読いたしました。拝見すると益々内容が充実し、種々の重要事項が記載され簡単に読めるものでなく、色々拝見してもまだ十分とは言えません。ご活躍の榮譽として大教師補任赤紫恩衣被着特許、曹洞宗特別奨励賞受賞、横浜プリンスホテルにおける祝賀会等、拝見するだけでも大変です。今日までのご活躍は聞いていましたが、本誌によって世界にわたってそれらの地

方を教化啓蒙されて来たことは、わが国でも例をみないこととで、深く敬意を表し、一層のご活躍を深く祈念いたします。

アフリカの旅より

アメリカ
伊藤 博先生

中部と西アフリカの旅から無事戻りました。治安や健康管理上とても気の疲れる六週間でしたが、収穫も多い楽しい旅になりました。

象牙海岸共和国が去年九月から内戦に入り渡航自粛勧告が出て、ほとんどの外国人が

国外退去後でしたので、日本大使の配慮は格別で、外交官の邦人保護の真剣さに驚かされました。全部で四カ国の大使館、日本海外協力事業団、日本貿易振興協会、カナダの大使館を訪れ対アフリカとの関係の話を聞いてきました。経済協力が主で世界一の日本の援助金がどのように使われているか良く解りました。

観光資源が少ないのと治安やインフラの不備もあり、日本からの観光者にはほとんど会えません。その代わり、地元人が使うバスやホテルを利用したので現地人と話したり、生活を観察する機会

に恵まれました。ほとんどの人が一日百円を稼ぐのに精一杯生きている姿をどこでも見ました。彼らには世界的情勢や国際化はおよそほど遠いものです。

ナイジェリアのラゴスや象牙海岸のアビジャンはアフリカで最も治安が悪く危険な大都市ですが、注意して人ごみに入ったせいか、私は人情味のある親切な一面に頻繁に出会いました。地元のバスに十三時間揺られてナイジェリア北部のカノ市に行ったときは、回教のシャリア法の為ビールも飲めないと聞いていましたが、そんなことはなくキリス

ト教徒の多い地区で手に入り
ました。又、回教の王様に当
たるエミアーの行列を見られ
たのも幸いでした。

觀光のハイライトはガボン
共和国の熱帯雨林でゴリラ三
頭が木の上で木の実を食べて
いるのを見たり、森に住む小
人族（ピグミー）に会えたの
も圧巻でした。

七回目のアフリカの旅も無
事終ったいま、もう二度と行
く事も無いであろう人類の発
祥地アフリカとその大地で一
生懸命生きている人たちに感
謝するとともに声援をおくる
のみです。

行きと帰りにパリで時間が

あったので、ルーブル博物館
とオルセー美術館に久しぶり
に寄り、日本大使館の開館を
待っている間、凱旋門の脇の
ベンチに座って車の行き交い
を眺めていると、今行つてき
たアフリカの国々を植民地と
していたフランスの栄光はア
フリカの犠牲の上に立ってい
るのかなと思わずにおられま
せんでした。

心に残った信仰の深さ

鹿児島県
大園雅和様

黒田 武志様へ

早いもので三月も終わろう

としていきます。ツアーから約
二週間が過ぎました。僕にとつ
てスリランカの地に立てたこ
とは人生の大きな宝物、財産
となりました。地図の上では
小さな島ですが、日本よりも
自然が豊かであり、また、多
くの人々と心のぬくもりに感
動しました。

それから、仏教の信仰の深
さには頭が下がります。日本
人も多くが仏教徒でありなが
ら信仰の浅さには、身をもつ
て考えさせられました。今回
のツアーで得たものは数えき
れないほどありますが、仏教
に関する事が一番心に残っ
ています！本当にありがとう

ございました。

学校の友達にも、仏教、自然、人情などいろいろな話をしました。これからは国際化の時代でもあります。少しでも多くの国の土を踏み、多くの異文化を学び、多くの人と交流ができれば良いなあと思っ



左端が筆者

ています。

本当にお世話になりました。またお会いできる日を楽しみにしています！

意義深い旅に感謝

国吉司 囃子様
沖縄県

黒田団長様

この度はスリランカ訪問の使節団として意義深い交流の機会を与えて下さいましてありがとうございます。心から感謝申し上げます。

未知との遭遇、すばらしい人々との出会いに旅の醍醐味を感じます。知ることは愛す

ること、レオナルド・ダヴィンチのこの言葉が好きですが、スリランカは全く未知の国でした。世界地図のどの位置にあるかさえわかりませんでした。国を挙げての訪問団の歓迎は、今日までの黒田団長様が成し遂げてきた功績の賜であることを十分に受けとめ認識を深く致しました。

又の機会に訪れたい！という気持は、スリランカが好きになったからでしょう。草木花のすべてが沖縄と全く変わらず、わが家の草花と身近に感じました。

佛像のふくよかな、そしておだやかな笑みの美しさに初

めて気づきました。クリスチャンの私は十字架上のキリストの苦しみと、佛教の教えが何であるかより、ふくよかで、おだやかな笑み、そのものの姿こそ慈悲と安心と癒しではなからうかとこの度の旅で感じました。どの宗教も、いつかは信仰の原点は一つにならなければならぬとは思いますが一つの疑問は、印度で生れたお釈迦様の国がヒンズー教で、スリランカが佛教国である事はまだ理解をしておりません。釈迦に説法の様な事を書いて恥ずかしい次第です。

二月は体調が悪く、過労で倒れ、圧迫骨折で腰痛もあり

ますが、シーギリヤの城砦の頂上に立った事は、今でも夢を見ている様な気がしております。神様、佛様、ご先祖様、こんな素晴らしい機会に恵まれた事を感謝いたします、と唱えながらの登頂でした。下りは旅行社の金明光様と釈正輪様の支えがあつてやっと地上に降りきった時、膝がへなへなとくずれ折り、眼から鼻から汗がそろそろと流れ出ました。体内が清められ、新しい力が与えられ、何の疲れも感じられず、マカフシギな状態で帰国しました。

十日間多忙な日程をこなして通常の生活に昨日二十六日

から戻りました。

元気で心さわやかに過ごしております。

ありがとうございました。

世界平和への想い

川崎市
宮川由香様

黒田武志先生には、ますますエネルギッシュに世界中を駆け巡られご活躍のことと存じます。

このたびは、善光寺様開創三十五周年、育英会設立二十周年、誠におめでとうございます。また私などにまで、身に余るご招待状ありがとうございます。

ございました。

主人が仕事のある土曜日は、大本山総持寺の方向に目を向けながら、「ああ、きつと今ごろは、先生が朗朗たるお声で心温まるお話をしていらっしゃるだろうなあ…」と心を馳せつつ過ごしたい気持ちでおります。

つい先日のイラクとの戦争のときも、きつと、どんなにか先生は、その無残な映像を見るにつれ、おびえ、悲しい瞳の幼い子どもたちを見るにつれ、お心、お痛めになっていたことと思います。

私も、子を持つ母として、目の前で死んでいく我が子に、

買ってやれる薬もない、食べさせてやれる食物もない…ただただ抱きしめているしか何もできない…という状況があらゆるでもこちらでも起こっている…その事実には本当に、胸が苦しくて、No more War! と叫びたい気持ちでした。

先生の「仏教を通して世界平和に貢献したい」という強い信念がますます強くなられた瞬間であったかと思われます。きつと先生は、できることなら大空をはばたきブッシュ大統領のもとへ飛んでいき、英語で先生のありたけの想いを話したい…そんなふうに見えるわれていたことだろうなあ…

と、イメージしておりました。

でも、黒田先生のような強いお志をお持ちの先生が日本にいてくださるといいうことは、日本人にとって本当にありがたいことですし、世界中の、仏教による世界平和の実現を、空想だけでなく一歩一歩実現させていこうとする黒田先生の意志を継ぐ方々がいてくださることも、世界にとってもまだ救われる可能性のある、ありがたいことと存じます。

私は、今の時代に生まれて、幸せだったのだと感じます。

先生が、若々しい情熱をたぎらせてさらなる飛躍をされることを、心よりお祈り申し

上げております。

心に残る体験

灌澤武雄様
横浜市

方丈様はじめ皆様お元気で
お過ごしのことと存じます。

先日は方丈様が焼香師の大役
をおつとめの際に、我々も参
加させていただき大変うれし
く一生心に残る体験をするこ
とが出来、心より感謝申し上
げます。そのうえ記念になる
写真をお送りいただき重々御
礼申し上げます。

がんばっています

伊達木昂訓様
厚木市

テレビ神奈川（TVK）で

の仕事も四年目となります。
神奈川新聞社との共同ビルと
なる新社屋建設も半年後には
完成しますし、二〇〇四年度
中のデジタル放送開始を目指
して、いよいよ正念場です。
皆様のご健康とご多幸をお祈
りいたします。

充実した季刊誌

村田一夫様
船橋市

「成寿」毎号大変興味深く
拝読させていただいております。
一寺院でこのように充実
された季刊誌を長年に亘って
刊行されておられますことに
感動を覚えます。高い見識で
布教活動を行っておられます
ことをよく窺い知られます。
外国での布教のご様子がよく
わかり御老師様のお人柄が滲
み出て嬉しく思います。

不思議なご縁で

松本道男様
横浜市

「成寿」で方丈様のご活躍を存分に拝読させていただきました。今まで仏の教えに無関心でありましたが、これからは少しずつ勉強させていただきます。

善光寺開創三十五周年を迎えられ心からお喜び申し上げます。善光寺さんには両親の死を機に大変お世話になって参りましたが、何故か私は開創されて間もない当時の善光寺さんを存じておりまして、

いつかお世話になるのではないかと思っております。不思議なご縁はみ仏のお導きと思っております。これからは仏の慈愛俳句も詠んでまいりたいと思っております。本当にありがとうございます。

これからもご指導を

茨城県
佐藤吉政様

国内外で精力的に仏の教えを広められていて、外国の人々にも理解された由、お慶び申し上げます。愚息も貴育英会のお世話になり留学しております。黒田理事長が外

国で講演されることはそれだけ日本人を理解してくれる外国人が増えることになり、日本のために大貢献されているのだと感服しております。これもひとえに実践に裏打ちされた老師の「人徳のたまもの」だと思います。これからもご指導のほどよろしくお願いいたします。

よい勉強になります

我孫子市
山崎康弘様

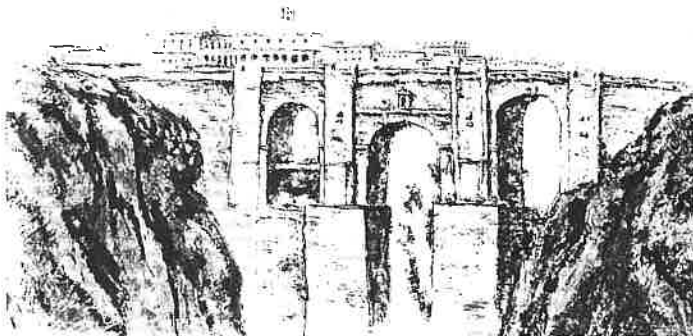
日頃、方丈様及び善光寺様の活動の様子は何となく想像はしておりますものの「成

寿」を拝見いたしますと毎号その記事の豊富さとご活躍の内容に改めて感銘を受ける次第です。

方丈様は、タイに於いて「一つのいのちとして全人類が調和している未来が必ず在る」と講演されました。又、伊藤博先生は「日本人は…異文明社会の衝突を避け対話を促進する仲介者として期待されている」と書いておられます。仏教界の現状について情報が少ない私としては伊藤先生のお言葉をどの程度の位置づけで理解してよいか分かりません。しかし、そのことが事実とすれば日本は源氏物語の平

安文化、武士文化、元禄、江戸文化のほかに仏教文化とその精神というものを世界への顔として今まで以上にもっと自覚してよいと思いました。

勿論、先生は日本人の仏教だけを取り上げたのではなく多神教的で「神」の存在について寛容な日本人の宗教観について言及されておられるのでしようが「期待されている」と言われると大変なことだなという思いが一方です。訳です。「成寿」はよい勉強になります。





but I continued to try and I don't know why but everything went well. I was always helped by Buddha.

I was invited to the ceremony to commemorate the 50th anniversary of the establishment of diplomatic ties between Japan and Sri Lanka as a representative of a total 80 goodwill mission and delivered a keynote speech "The Gift from Dharmapala" at Bandaranaike International Main Hall. I was hailed by the government and Buddhists and seeing the hall was packed full of thunderous applause, I couldn't help feeling the new fusion of Japanese and Theravada Buddhism and Xanadu of mandara.

The ceremony to commemorate the 35th of anniversary of the Temple and the 20th anniversary of the Scholarship Association was held in May at the head temple Sōjiji and about 400 eminent people from various fields and supporters attended.

In June, Baikaan was completed, which is used both as a temple office and a room for distinguished guests from abroad and our supporters. The library was also completed at the same time and we put 100,000 books in order.

In next March, I have a plan to attend the World Buddhists' Convention held at Buddhamonthon in Thai, the biggest Buddhists' country, and deliver a keynote speech "The Real Education" as a representative from Japan.

In next September, I also have a plan to lecture about "Zen and Dōgen, The World and the Buddhism" at Harvard University and University of California.

Priests studying abroad have grown up and been active in various fields of many countries. Small glims are getting bigger and bigger.

The world obviously suffers from miscellaneous causal symptoms and the phenomena beyond our understanding are disturbing and scare us. Why do we need Buddhism in times such as these? The expectation and its role seem to be important and hasty. What can we do now, or what should we do?

To the best of my poor ability, I will do my best to do today's duty which is handing down teaching of Buddha.

Foreword

The chief priest of Zenkōji—Temple
Takeshi Kuroda

Believing in Buddhism faithfully, we go back to Buddha through our founder.

This was our starting line when Yokohama Zenkōji—temple was founded 35 years ago. We have advanced with heart and soul all the while.

Yokohama Zenkōji-temple Scholarship Association which was established by the temple and the supporters together, marked its vigentennial this year. It has developed with the times when the need for cultivating human resources who have global perspectives become bigger. The dispatches and acceptance have numbered 110, countries concerned have reached 21. This year's recruitment is the 20th.

All thanks to the sincere donation from the supporters, we can continue the Scholarship Association year after year, We have asked for your cooperation by cutting down on the mouthful food to achieve the world peace, the prosperity of Buddhism and human resource development.

I thank you from bottom of my heart.

I visited Buddhist temple ruins and performed ascetic practices all over the world when I was young and noticed the importance of going back to the starting line, or Buddha. This became my belief. Thus, the establishment of the Scholarship Association means my challenge to practice.

“Wherever the teaching of Buddha is practiced, you can eat something.” I thank always Buddha's protection. I believe that the salvation of Buddha is in the deep charity by the wisdom of Buddha. Rev. Dōgen cited ‘generosity, goodwill, cooperation and ministrations as four virtues and persuaded that these were the profound order of all things in the universe. I wonder the Scholarship Association means the practice of generosity. There were various troubles and there were times when I almost gave up,

編集後記

▼「成寿」第三五巻をお届け申し上げます。去る五月十日、善光寺は開

創三十五周年および「横浜・善光寺留学僧育英会」設立二十周年の記念式典を曹洞宗大本山総持寺で催しました。当日は、日本・スリランカ国交樹立五十周年にあたり交流を深めていたカルティラカ・アムヌマガ駐日スリランカ大使もご夫妻でお越しいただきました。

▼式典では木村清孝鶴見大学教授・東京大学名誉教授の「瑩山禪師に学ぶ」と題する記念講演が行われました。一人一人が慈悲による菩薩行を行うことこそ瑩山禪師の願望であるとの木村教授のお話に感銘を受けました。ありがとうございます。

▼式典には全国各地から善光寺檀信徒のみなさん、また善光寺や留学僧

育英会に縁の深い方々にお集まりいただき心から感謝申し上げます。皆様の温かいご支援に一層の精進を誓っております。

▼黒田方丈は日本とスリランカの国交樹立五十周年を記念する友好親善使節団の団長として三月八日からスリランカを訪問。内容は本誌に掲載してありますのでぜひご一読ください。

▼善光寺留学僧育英会理事で、ご支援ご協力をいただいております東隆眞先生が古都金沢の名刹大乘寺に新命住職として晋山なされました。晋山式で東老師は「朝朝、大乘寺と共に起き、夜夜、大乘寺と共に眠り、大乘寺と一体とならんことを願う」と胸中のご決意を述べておられます。老師のご活躍を心からお祈りいたします。

▼黒田方丈は来年三月にタイ国ブツダモントンで、また九月にはアメリカ

カのハーバード大学・カリフォルニア大学での講演が予定されております。この時になぜ仏教なのか期待と役割は重大であります。

▼梅雨明けが例年になく遅く、八月には列島を縦断する台風がくるなど不安定な夏でした。秋彼岸です。秋分の日を中心に前後三日間の一週間、善光寺でも二十日に彼岸法会を営みます。この時期にもう一度、彼岸の意味を考えてみてはいかがでしょうか。

成寿 第三十五巻

平成十五年九月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺